道後湯之町遺跡２次調査

２０１８

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

道後湯之町遺跡２次調査

２０１８

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序　　言

本書は平成28年度に実施した道後温泉別館「飛鳥乃湯泉（あすかのゆ）」建設に伴う発掘調査の報告書です。

遺跡が所在する松山城から道後温泉に至る道後城北地区は、松山平野の中でも有数の遺跡地帯として知られており、これまでの調査・研究の結果、縄文時代から近世に至る継続的な集落の営みが明らかになっています。

道後湯之町遺跡2次調査では、縄文時代後期や晩期の土器が層位的に出土し、縄文時代と弥生時代の土坑が発見され、当時の集落や生活の様子を解明する貴重な手掛かりを得ることができました。

このような成果が得られましたのも、市民の皆様をはじめ関係各位の埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力の賜物であり、厚く感謝申しあげます。本書が埋蔵文化財の一助となり、さらには文化財保護並びに教育普及活動に寄与できますことを切に願っております。

平成30年1月

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長　　中山紘治郎

例　言

1．本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが平成 28 年 4 月から同年 6 月に実施した、道後温泉別館「飛鳥乃湯泉（あすかのゆ）」建設工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．整理及び報告書作成作業は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが行った。

3．本書掲載の遺構は、呼称名を略号化した。
土坑：ＳＫ、性格不明遺構：ＳＸ

4．本書で使用した標高値は海抜標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北で世界測地系に準拠している。

5．基準点及び水準点の設置は、セントラルエンジニアリング株式会社に委託した。

6．本書で報告した遺構埋土及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2006）に準拠した。

7．本書掲載の遺構図は調査担当者と調査補助員・整理作業員が作成した。また、遺物実測図については担当調査員の指示のもと、整理作業員が作成し、石器については調査担当者と整理作業員が作成した。デジタルトレースは整理作業員が行った。

8．本書掲載の遺構図や遺物実測図の縮分値は、スケール下に記した。

9．本書掲載の写真のうち、遺構の撮影は調査担当者、遺物写真の撮影は作田一耕が行い写真図版の作成は編集担当者が作成した。なお、現地説明会の撮影に際しては松山東消防署の協力を得た。

10. 本書の執筆と編集は、村上卓也の指示・指導のもと編集担当が分担し行った。

11. 本書における報告書の内容は、調査概要報告書（2016 年）と『年報 29』（2017 年刊行）を基に作成した。その内容に相違点がある場合、本書を持って訂正したものとする。

12. 本書で作成した遺物や図面、写真等の記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

13. 報告書抄録は巻末に掲載している。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1

第１節　調査の経緯

１．調査に至る経緯　　２．調査の経過

第２節　調査・整理及び編集・刊行組織

１．調査組織　　２．編集・刊行組織

第３節　立地と環境

１．地理的環境　　２．歴史的環境

第２章　調査の概要……9

第１節　層位

第２節　遺構と遺物

１．土坑　　２．性格不明遺構　　３．その他の出土遺物

第３章　調査の成果と課題……55

挿図目次

第1章　はじめに

第 1 図　調査地周辺の遺跡分布図……7
第 2 図　調査地位置図……8

第2章　調査の概要

第 3 図　西壁土層図……10
第 4 図　北壁土層図……11
第 5 図　南壁土層図……12
第 6 図　区割図・遺構配置図……13
第 7 図　SK 8 測量図……14
第 8 図　SK10 測量図
第 9 図　SK11 測量図……15
第 10 図　SK15 測量図
第 11 図　SK15 出土遺物実測図……16
第 12 図　SK19 測量図・出土遺物実測図
第 13 図　SK25 測量図……17
第 14 図　SK26 測量図
第 15 図　SK29 測量図・出土遺物実測図……18
第 16 図　SK31 測量図……19
第 17 図　SK32 測量図
第 18 図　SK 9 測量図・出土遺物実測図……20
第 19 図　SK12 測量図・出土遺物実測図……21
第 20 図　SK13 測量図・出土遺物実測図……22
第 21 図　SK14 測量図……23
第 22 図　SK14 出土遺物実測図……24
第 23 図　SK17 測量図・出土遺物実測図……25
第 24 図　SK18 測量図……26
第 25 図　SK20 測量図
第 26 図　SK20 出土遺物実測図……27
第 27 図　SK27 測量図・出土遺物実測図……28
第 28 図　SK28 測量図・出土遺物実測図……29
第 29 図　SK21 測量図……30
第 30 図　SK22 測量図・出土遺物実測図
第 31 図　SK24 測量図……31
第 32 図　SK33 測量図
第 33 図　SK34 測量図
第 34 図　SK35 測量図……32

第 35 図　SK36 測量図……32
第 36 図　SK37 測量図
第 37 図　SX 3 測量図……33
第 38 図　SX 3 出土遺物実測図……34
第 39 図　SX 5 測量図・出土遺物実測図
第 40 図　第Ⅶ層出土遺物実測図……35
第 41 図　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（１）……37
第 42 図　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（２）……38
第 43 図　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（３）……39
第 44 図　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（４）……40
第 45 図　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（５）……41
第 46 図　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（１）……43
第 47 図　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（２）……44
第 48 図　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（３）……45
第 49 図　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（４）……46
第 50 図　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（５）……47
第 51 図　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（６）……48
第 52 図　ベルト・トレンチ出土遺物実測図（１）……49
第 53 図　ベルト・トレンチ出土遺物実測図（２）……50
第 54 図　グリッド出土遺物実測図……52
第 55 図　地点不明出土遺物実測図（１）……53
第 56 図　地点不明出土遺物実測図（２）……54

表目次

表 1　土坑一覧……57
表 2　性格不明遺構一覧……58
表 3　SK15 出土遺物観察表（土製品）
表 4　SK19 出土遺物観察表（土製品）……59
表 5　SK19 出土遺物観察表（石製品）
表 6　SK29 出土遺物観察表（土製品）
表 7　SK29 出土遺物観察表（石製品）
表 8　SK 9 出土遺物観察表（土製品）
表 9　SK12 出土遺物観察表（土製品）……60
表 10　SK12 出土遺物観察表（石製品）
表 11　SK13 出土遺物観察表（土製品）
表 12　SK14 出土遺物観察表（土製品）
表 13　SK14 出土遺物観察表（石製品）……61
表 14　SK17 出土遺物観察表（土製品）

表 15　SK20 出土遺物観察表（土製品）……61
表 16　SK27 出土遺物観察表（土製品）
表 17　SK28 出土遺物観察表（土製品）……62
表 18　SK22 出土遺物観察表（石製品）
表 19　SX 3 出土遺物観察表（土製品）
表 20　SX 3 出土遺物観察表（石製品）……63
表 21　SX 5 出土遺物観察表（土製品）
表 22　第Ⅶ層出土遺物観察表（土製品）
表 23　第Ⅷ層（上層）出土遺物観察表（土製品）……64
表 24　第Ⅷ層（上層）出土遺物観察表（石製品）……65
表 25　第Ⅷ層（下層）出土遺物観察表（土製品）……67
表 26　第Ⅷ層（下層）出土遺物観察表（石製品）……69
表 27　ベルト・トレンチ出土遺物観察表（土製品）……71
表 28　グリッド出土遺物観察表（土製品）……72
表 29　地点不明出土遺物観察表（土製品）……73
表 30　地点不明出土遺物観察表（石製品）……74

写真図版目次

図版 1　1. 重機による掘削状況（南より）
2. ガードフェンス設置状況（南西より）
3. 調査区南壁土層状況（北西より）
図版 2　1. Ⅳ層上面の検出状況（東より）
2. Ⅳ層精査時の区割り（東より）
3. Ⅳ層（遺物包含層）検出状況（東より）
図版 3　1. 基準点設置状況（南東より）
2. 調査地から北を望む（南より）
3. 土砂置き場と大ベルト（北東より）
図版 4　1. SX3 検出状況（北西より）
2. 大ベルト精査の様子（東より）
3. SK28 据え置かれていた土器出土状況（北より）
図版 5　1. SX3 埋土の水洗選別作業風景（南東より）
2. 愛媛大学によるフィールド講義（南東より）
3. 現地説明会の様子（西より）
図版 6　1. 出土遺物（SK20：44、SK27：51、SK28：55）
図版 7　1. 第Ⅶ層出土遺物
2. 第Ⅷ層（上層）出土遺物①
図版 8　1. 第Ⅷ層（上層）出土遺物②
図版 9　1. 第Ⅷ層（上層）出土遺物③
図版 10　1. 第Ⅷ層（上層）出土遺物④
図版 11　1. 第Ⅷ層（上層）出土遺物⑤
図版 12　1. 第Ⅷ層（下層）出土遺物①
図版 13　1. 第Ⅷ層（下層）出土遺物②
図版 14　1. 第Ⅷ層（下層）出土遺物③
図版 15　1. 第Ⅷ層（下層）出土遺物④
図版 16　1. 第Ⅷ層（下層）出土遺物⑤
図版 17　1. 第Ⅷ層（下層）出土遺物⑥
図版 18　1. 第Ⅷ層（下層）出土遺物⑦
2. ベルト・トレンチ出土遺物①
図版 19　1. ベルト・トレンチ出土遺物②
図版 20　1. グリッド出土遺物①
図版 21　1. グリッド出土遺物②
2. 地点不明出土遺物①
図版 22　1. 地点不明出土遺物②

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯

1. 調査に至る経緯

2015（平成 27）年 7 月、松山市産業経済産業部道後温泉事務所（以下、温泉事務所）より（仮称）椿の湯別館施設整備事業に伴う埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地周辺では、東側の道後湯之町遺跡から古墳時代の土坑・溝、中世の溝を検出した。道後湯月町遺跡からは、平安時代から室町時代の池址を検出した。南側には中世、河野氏の築城とされる湯月城跡や、南東部には白鳳期の瓦が出土した内代廃寺、さらに西方には弥生時代の集落拠点である文京遺跡や松山大学構内遺跡などがある。また、北側丘陵部には湯之町廃寺や道後冠山遺跡、東側丘陵部には弥生時代前期の土壙墓や古墳時代の竪穴建物址を検出した道後姫塚遺跡などがある。

これらのことから、文化財課の委託を受け公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、申請地の 13 筆を対象とし、計 5 回にわたり試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、申請地からは弥生時代の遺物や土坑を検出した。これらの結果を受け温泉事務所と埋文センターは協議を重ね、愛媛県が指示した地域を対象とした発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、埋文センターと道後温泉事務所が調査契約を結び、埋文センターが平成 28 年 4 月 1 日に調査を開始した。遺跡名は地名より道後湯之町遺跡 2 次調査とした。

2. 調査の経過

発掘調査は 2016（平成 28）年 4 月 1 日（金）から同年 6 月 30 日（木）まで 65 日間実施した。

基本層序は 9 層に分層し、上位から第Ⅰ層・第Ⅱ層‥‥第Ⅸ層と付した。掘削は第Ⅶ層までは重機で慎重に剥ぎ取りを行い、掘削で生じた排土は不整地運搬車と重機を用いて調査区外の北に積み上げ、シートで覆い養生した。調査区の中央に任意でポイントを設定し東西及び南北にそれぞれ幅 1 ｍの土層観察用の大ベルトを設定し、調査区を 4 区（北東部・北西部・南東部・南西部）に大別した。大ベルトは、第Ⅷ層遺物包含層と遺構を確認するためである。遺物包含層の精査時には、調査地北東部を除いて 2 ｍ方眼で掘り下げ、調査区ごとに番号を付して収納した。なお、遺物取り上げは、最終的に 341 番となった。調査区の各壁面及び各大ベルトの両面の土層断面図を 20 分の 1 の縮尺で、遺構の平面図を 40 分の 1 の縮尺で作成した。そして、調査地の全測図を 100 分の 1 の縮尺で作成した。遺構の測量に際しては、専門業者に委託して世界測地系の 4 級基準点を打設し、これを基に測量を進めた。なお、調査の終盤で、精査していた縄文時代の遺構のうち、SX4 で掘り残していた埋土のほぼ半分を対象として水洗選別を実施したところ、焼けた（あるいは焼いた）獣骨砕片、サヌカイトや黒曜石の砕片のほか、多数の小礫を確認することができた。当初性格不明としていた遺構の機能を特定する資料を得た。また、各大ベルトは人力で精査して（掘り下げて）除去し、遺物を収納した。

なお、調査期間中には多くの研究者の来訪があり、指導・助言を賜った。

下條信行（愛媛大学名誉教授）・前園実知雄（公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター）・田﨑博之

（愛媛大学）・村上恭通（愛媛大学）・柴田昌児（愛媛大学）・吉田広（愛媛大学）・槇林啓介（愛媛大学）・笹田朋孝（愛媛大学）・三吉秀充（愛媛大学）・犬飼徹夫（日本考古学協会）・名本二六雄（松山市文化財審議員）・真鍋昭文（公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター）・岡崎壮一（大洲市教育委員会）・蔵本諭（大洲市教育委員会）・織田浩史（愛南町教育委員会）・松本安紀彦（愛南町教育委員会）

以下、調査の経過について略記する。

4月1日（金）：発掘区を含む工事対象地に丸杭を打設し、ロープを用いて安全対策を講じる。

5日（火）：重機の掘削に備えて、ガードフェンスとチューブ保安灯で安全対策措置を講じる。温泉事務所により「飛鳥乃湯泉」完成イメージ図を描いた看板が設置される。

8日（金）：調査事務所を設置する。

11日（月）：重機と不整地運搬車を用いて表土等の掘削を開始する。試掘成果を基に地表下0.75ｍまで表土等を剥ぎ取り、排土については不整地運搬車等を用いて発掘区外の北に盛り上げる。試掘時の褐灰色土（10YR 4/1）を確認してからは、遺構の検出と遺物の確認に細心の注意を払いつつ掘り下げる。遺物は確認できたものの、近代以降とみられる撹乱坑を除き明確な遺構を確認するに至らなかったことから、褐灰色土を掘り下げて、地表下１ｍの黒褐色土（10YR 3/1）上面を人力により再度遺構検出を試みる。重機等を用いた掘削は18日までおこなう。発掘区及び排土山にはシートを掛け、発掘区西壁沿いには深掘りトレンチを設定し、堆積土層の確認と雨水溜めに備える。

19日（火）：表土等掘削後の記録写真を撮影する。

20日（水）：任意で調査区中央に測量基点を設定し、平板を用いて縮尺1/100で発掘区や深掘りトレンチ位置の測量に着手。

25日（月）：測量基点を中心に東西と南北に幅１ｍの土層観察用の大ベルトを設定する。発掘区西半を中心に検出された遺物包含層に縄文時代晩期の縄文土器片が含まれることから、人力により手掘りで精査し、２ｍ方眼で遺物を収納する。なお、遺物収納に際してはグリッドごとに取り上げラベルを作製する。

28日（木）：遺物包含層精査時に礫石錘が出土。形態や大きさ等から縄文時代晩期か、それ以前に帰属する可能性が考えられた。4月は例年にない長雨に見舞われた影響により、進捗率が30％程度であり、温泉事務所の了解を得て5月は週末の土曜日も発掘調査を実施することとした。

5月2日（月）：北東部の遺物包含層の精査に着手。

6日（金）：出土遺物の洗浄をおこなったところ、縄文時代後期の縄文土器片を確認。

7日（土）：南西部の遺物包含層を精査継続。人工的に深さ10㎝程度を境界として、上位を上層、下位を下層として出土遺物を収納。上層と下層の色調は酷似しており、東西大ベルトの南面に観察により含まれる砕礫の多寡と質感を根拠として、断面でようやく細分できる程度であり、平面による分層は困難。

9日（月）：雨天により作業休止。

10日（火）：雨天により作業休止。

12日（木）：愛媛大学法文学部教授村上恭通先生が考古学研究室生８名とともに来訪する。担当職員が埋蔵文化財と、その調査方法についてフィールド講義をおこなう。

14 日（土）：遺物包含層（上層）から黒曜石製残核 1 点が出土。特徴的な色調（淡乳灰色）から、大分県国東半島の姫島産であることを確認する。

17 日（火）：南東部の精査が進み、南北大ベルト沿いでは落ち込みが複数確認された（後日、弥生時代中期中葉を主体とした土坑群であることを確認）。

18 日（水）：南東部の精査継続。東西に細長い落ち込みを確認（SX3、縄文時代後期のゴミ穴）。

21 日（土）：高所作業車を用いて、包含層精査過程の記録写真を撮影する。愛媛大学考古学研究室生 7 名が発掘体験に参加する。

24 日（火）：南西部の遺物包含層（下層）から有文の深鉢と考えられる縄文土器片 2 点が出土（共伴した縁帯文土器を参考縄文時代後期前半頃と推定）。

27 日（金）：北西部の遺物包含層を掘り上げたところ、浅黄橙色砂質土（10YR8/6）上面から小規模な起伏が認められた。

28 日（土）：雨天により作業休止。5 月末までの進捗率は 60％程度。

6 月 1 日（水）：委託業者による基準点等の打設等実施。

6 日（月）：現地説明会案内ポスター（6/18 開催）の掲示開始。

14 日（火）：発掘区南壁の中央付近で土坑状の落ち込みと弥生中期土器（横倒しで胴部に毀損を考えられる打ち欠きを認める）を確認。

15 日（水）：高所作業車を用いて遺構精査過程の写真撮影。

17 日（金）：18 日の現地説明会に備えて見学ルートとして各大ベルト上にブルーシートを敷く。

18 日（土）：現地説明会を午前と午後の計 2 回実施。参加者からは「出土した状態の土器を現地で見学することができてよかった。道後の地下に眠っていた遺跡の魅力がよくわかった」、「現地（遺跡）に縄文時代後期と弥生時代中期の人々の生活痕跡が残されていて大変驚いた」と好評。延 350 人の参加者がある。

20 日（月）：途中で雨天になり、事務所にて遺物を洗う。

22 日（水）：雨天。事務所で遺物を洗う。

24 日（金）：雨天。各大ベルトを精査して出土遺物を収納する。

25 日（土）：発掘区の埋め戻しに着手し、重機 2 台と不整地運搬車を用いて実施。

28 日（火）：埋め戻し終了。調査事務所の解体・撤去に立ち会う。

29 日（水）：発掘道具を移動。

30 日（木）：発掘区及び工事対象地の安全対策について最終確認。温泉事務所担当者 2 名の立会のもと、現地の引き渡しを実施。

第２節　調査・整理及び編集・刊行組織

１．調査組織〔平成 28 年度〕

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

	理　事　長	中山　紘治郎
事 務 局	局　　長	中西　真也
	次長兼総務部長	橘　　昭司
	文化振興部部長	梶原　信之
埋蔵文化財センター	考古館館長兼所長	村上　卓也
	主　　任	加島　次郎

２．編集・刊行組織〔平成 29 年４月１日現在〕

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

	理　事　長	中山　紘治郎
事 務 局	局　　長	中西　真也
	次長兼総務部長	橘　　昭司
	文化振興部部長	渡部　広明
埋蔵文化財センター	所　　長	村上　卓也
	主　　任	宮内　慎一
	主　　任	髙尾　和長
	主　　任	加島　次郎

第３節　立地と環境（第１・２図）

１．地理的環境

松山平野は瀬戸内海西部の伊予灘と、瀬戸内海中部の燧灘とに挟まれた高縄半島の南西部に位置する。高縄半島中央部には、最高峰の東三方ケ森（標高 1232.7m）をはじめ伊之子山、北三方ケ森、高縄山等からなる高縄山系が形成されている。高縄山系は西南日本内帯の領家帯に属し、主に中生代に貫入した古期領家花崗岩で形成されている。松山平野は高縄山地に源を発する重信川と石手川及び、その支流によって形成された沖積平野である。

２．歴史的環境

本遺跡を含む道後城北遺跡群内には、文京遺跡をはじめ数多くの遺跡が存在する。ここでは、近年、発掘調査された遺跡を中心に、時代別に概要を説明する。

（１）縄文時代

遺跡群中央部、城北地区にある道後城北 RNB 遺跡からは、縄文時代後期前葉と晩期後葉の包含層が層位的に検出され、持田本村遺跡、持田町３丁目遺跡や道後今市遺跡からは縄文晩期の土坑が検出されている。

（２）弥生時代

前期では、松山平野における弥生前期の標識土器である持田式土器が出土した持田町遺跡が古くから知られている。近年の調査では、持田本村遺跡から弥生前期前半の土坑、土壙墓、溝が検出され、持田町３丁目遺跡から弥生前期前半の土坑墓や土器棺墓が多数検出され、岩崎遺跡では前期末段階とされる大型の溝と土坑群が検出され、同地区における前期集落の様相が明らかになりつつある。中期になると、前半では道後地区の丘陵上に道後姫塚遺跡や道後鷺谷遺跡があり、扇状地から丘陵部へ遺跡の広がりが認められる。中期中葉では遺跡北部、祝谷地区の丘陵上に祝谷六丁場遺跡があり、中期中葉の遺構や遺物のほか、平形銅剣が土坑内から埋納状態で発見されている。また、祝谷大地ヶ田遺跡３次～７次調査からは 300 基以上の土坑が検出されている。祝谷畑中遺跡では中期中葉の大規模な環濠の検出と共に、弥生土偶が出土している。中期後半から後期にかけては、城北地区にて、松山大学構内遺跡２次調査や文京遺跡をはじめ多くの遺跡が存在し、該期の竪穴建物址が多数確認されている。

（３）古墳時代

集落遺跡は、道後湯之町遺跡から土坑と溝を検出している。城北地区の松山大学構内遺跡２次調査や松山北高等学校遺跡２次調査にて、古墳時代前期の竪穴建物址が検出され、中期から後期では持田本村遺跡、文京遺跡をはじめ祝谷アイリ遺跡などから竪穴建物址や土坑が検出されている。一方、遺跡群北部及び東部の丘陵上には数多くの古墳が分布している。祝谷地区では祝谷古墳群や常信寺古墳群があり、祝谷大地ヶ田遺跡６次調査で検出した祝谷９号墳は、前方後円墳で周濠の内外を列石が巡る四国初の古墳を検出している。道後地区では桜谷古墳や石手寺古墳群が存在する。

（4）古代

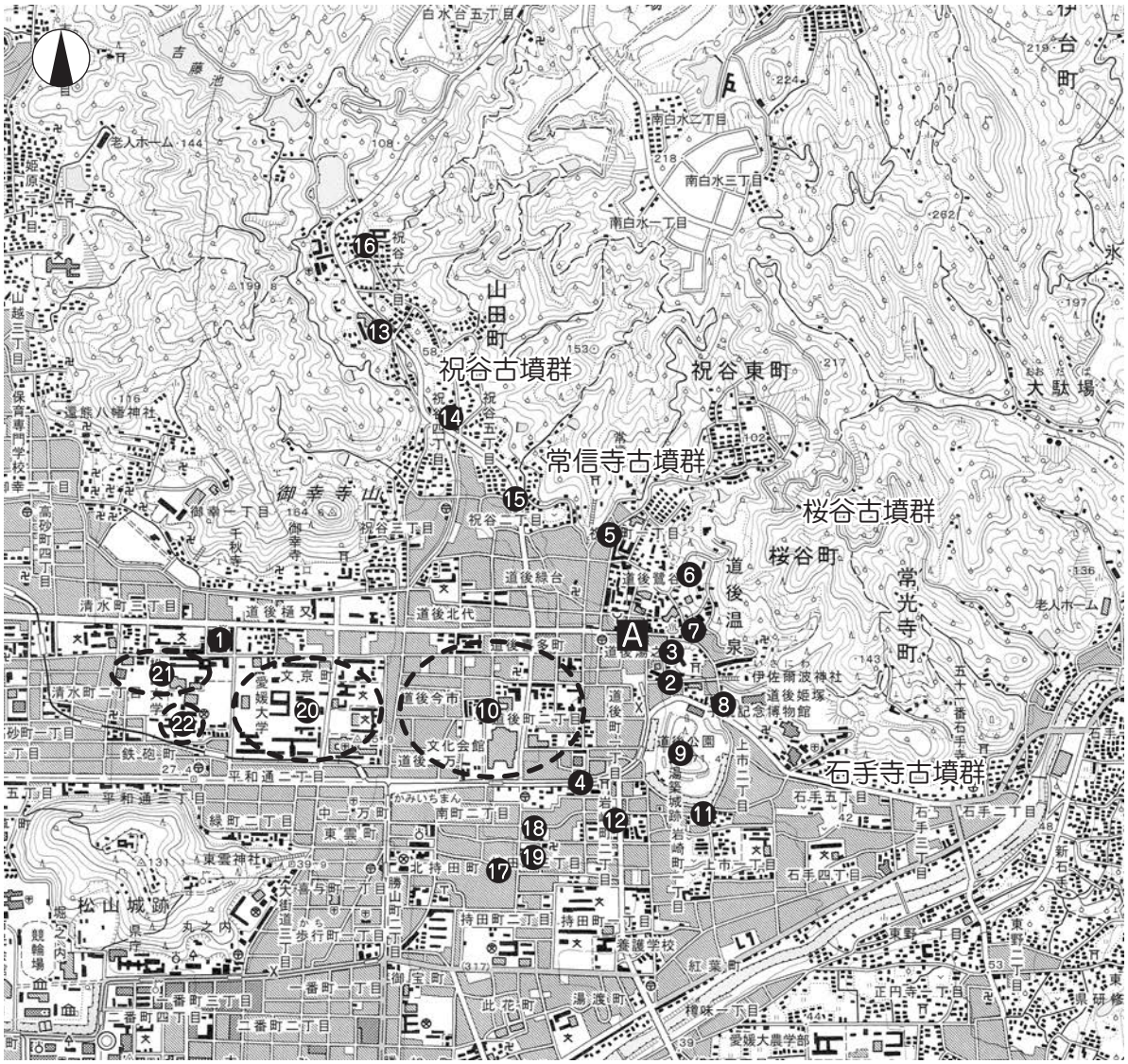
大化改新の前後、舒明 11（639）年に舒明天皇、斎明 7（661）年には斎明天皇の熟田津石湯（道後温泉）への行幸があったことが知られており、伊予国風上記逸文には聖徳太子が来県し、道後温泉本館南側にある伊佐爾波神社の丘に碑文を建てたという伝承が記されている。道後地区には白鳳期の創建とされる湯之町廃寺や内代廃寺が知られている。湯之町廃寺は現在の道後温泉北側 1km の地点にあり、一町四方の寺域が推定されている。内代廃寺は湯築城跡の東側に位置し、複弁八弁蓮華文丸瓦や四重弧文軒平瓦が出上している。大宝律令制定以降、愛媛県は伊豫国と称され、国内には 14 郡が設置されていた。松山平野には 5 郡（伊予・和気・久米・温泉・浮穴）が置かれ、道後地区は温泉郡に属していたものとされる。近年の発掘調査では、岩崎遺跡にて奈良時代の区画溝や平安時代の掘立柱建物址が検出されているほか、道後町遺跡では自然流路が検出されている。

（5）中世

道後今市遺跡（愛媛県県民文化会館）は弥生時代から中世に至る複合遺跡で、同 9 次調査や 10 次調査では 13 ～ 14 世紀を主体とする掘立柱建物址が検出され、同 1 次調査や 5 次調査では 14 ～ 16 世紀の溝や土坑、墓が検出されている。近年の調査では、岩崎遺跡にて 13 ～ 15 世紀の水田址が発見され、道後町遺跡では 15 世紀代の条里区画に沿った溝が報告されている。道後湯月町遺跡では、平安時代から室町時代にかけての池址を検出した。池址は石積みによる池垣を伴ったものであり、池址内からは土器や石が大量に出土した。完形品や破損品が集中して出土した場所が数箇所あり、その状況から池址に伴う祭祀がおこなわれた可能性が指摘されている。また、中世、河野氏の居城である湯築城跡が存在する。道後地区には石手寺や義安寺、宝厳寺などの寺院が集中しており、門前町や現在遍路道となっている街道が発達していたことが推定される。さらに、湯築城の築城以降には『伊予湯築古城之図』によると、道後温泉周辺には湯之町、湯築城周辺には上市、上古市、今市などの地名がみられ、市町が形成されていたことが推測される。

【文献】

愛媛県史編さん委員会 1980『愛媛県史 資料編考古』
松山市史料集編集委員会 1986『松山市史料集 第 2 巻考古編Ⅱ』
真鍋 昭文他 1985『持田 3 丁目遺跡』埋蔵文化財調査報告書第 58 集
宮内 慎一 1999『岩崎遺跡』松山市文化財調査報告書第 71 集
宮崎 泰好 1991『祝谷六丁場遺跡』松山市文化財調査報告書第 24 集
真鍋 昭文 2002『祝谷畑中遺跡』埋蔵文化財調査報告書第 101 集
宮内 慎一 1995『松山大学構内遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書第 49 集
真鍋 昭文他 1995『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書 2』埋蔵文化財調査報告書第 55 集
梅木 謙一 1992『祝谷アイリ遺跡』松山市文化財調査報告書第 25 集
三好 裕之他 2005『道後町遺跡Ⅱ』埋蔵文化財調査報告書第 121 集
中野 良一 1998『湯築城跡』埋蔵文化財調査報告書第 66 集
宮内 慎一 2008『道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡』松山市埋蔵文化財調査報告書第 123 集
宮内 慎一 2015『持田本村遺跡』調査概要報告書
作田 一耕他 2017『祝谷大地ヶ田遺跡 3 次～ 7 次調査』調査概要報告書

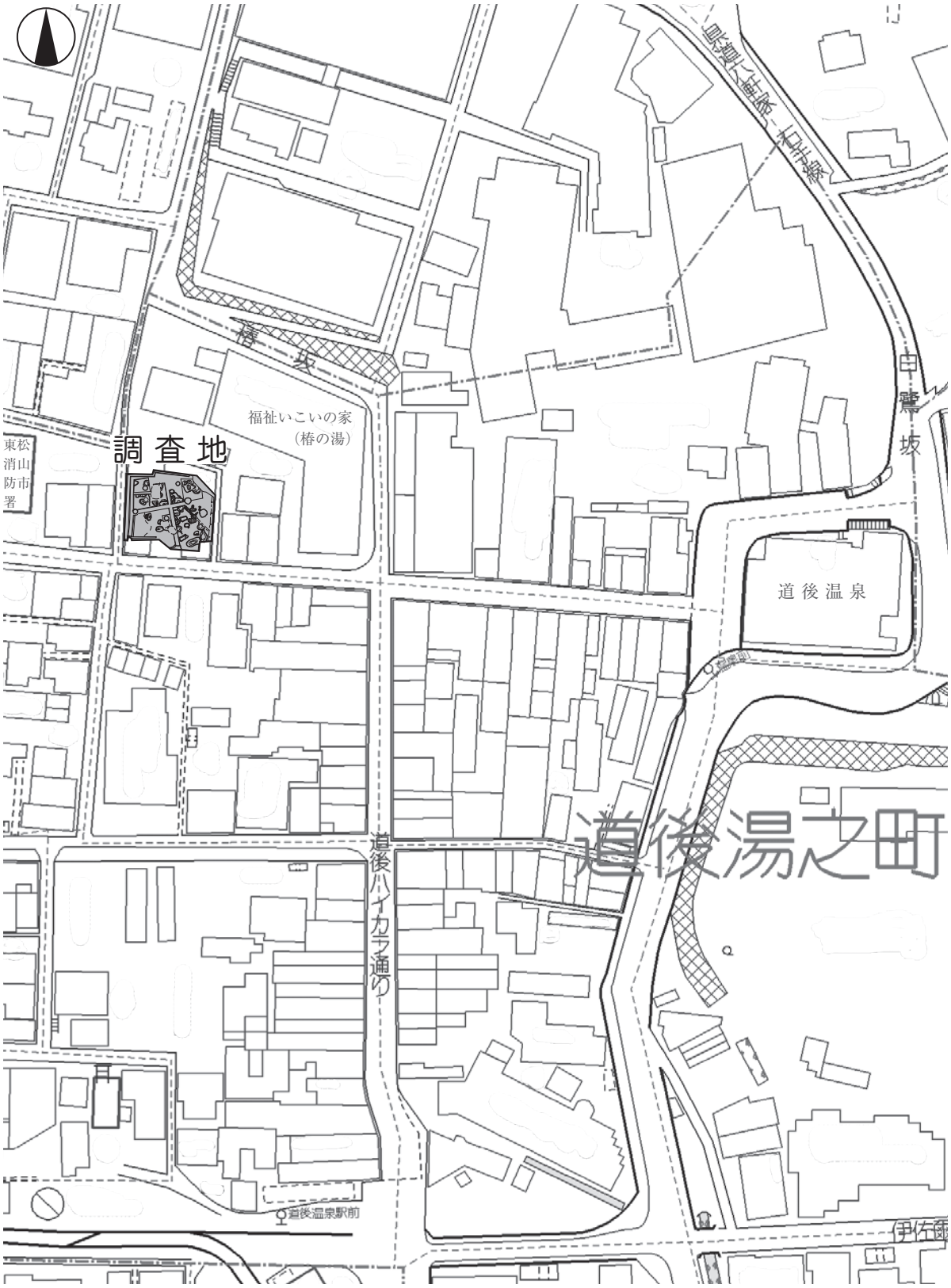


（S＝1：25,000）

A 道後湯之町遺跡2次調査(本調査地)

❶道後城北 RNB 遺跡
❷道後湯之町遺跡
❸道後冠山遺跡
❹道後町遺跡
❺湯之町廃寺
❻道後鷺谷遺跡
❼道後湯月町遺跡
❽道後姫塚遺跡
❾湯築城跡
❿道後今市遺跡
⓫内代廃寺
⓬岩崎遺跡
⓭祝谷六丁場遺跡
⓮祝谷大地ヶ田遺跡
⓯祝谷畑中遺跡
⓰祝谷アイリ遺跡
⓱持田町遺跡
⓲持田本村遺跡
⓳持田町３丁目遺跡
⓴文京遺跡
㉑松山大学構内遺跡
㉒松山北高等学校遺跡

第１図　調査地周辺の遺跡分布図



（S＝１：１,５００）

第２図　　調査地位置図

第２章　調査の概要

第１節　層　位

調査地は松山平野北東部、丘陵裾部の緩斜面上、標高 39.2 ～ 40.3m に立地する。調査以前は、既存宅地であった。現況では調査地北東部が最も高く、漸次、南西部に向けて傾斜をなす。調査地の基本層位は、以下の９層である。なお、調査では第Ⅷ層及び第Ⅸ層上面にて遺構を検出した。

第Ⅰ層：近現代の造成に伴う客土で、地表下約 0.4 ～ 1.2m の地点まで開発が及んでいる。

第Ⅱ層：灰白色（7.5Y 7/1）の粘質土で調査地南半部に部分的にみられ、層厚は５～ 30㎝である。

第Ⅲ層：にぶい黄褐色土（10YR 4/3）で調査地南西部にみられ、層厚は５～ 18㎝である。

第Ⅳ層：灰白色土（10YR 7/1）で調査地南半部に部分的にみられ、層厚３～ 22㎝である。

第Ⅴ層：灰黄褐色土（10YR 6/2）で調査地北東部を除く地域でみられ、層厚は５～ 28㎝である。

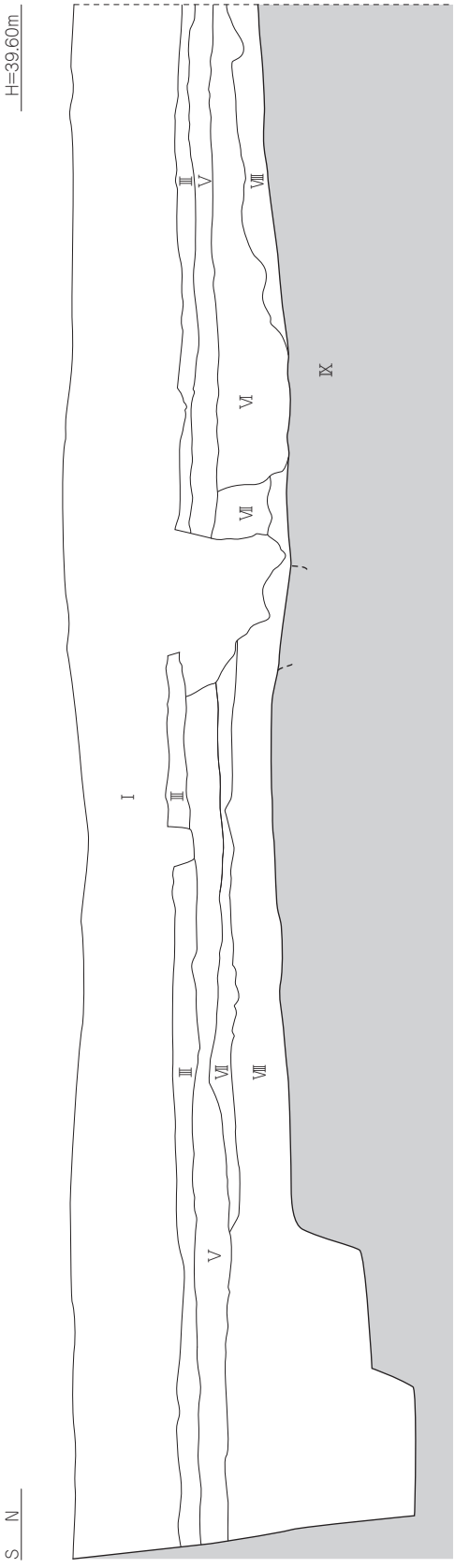
第Ⅵ層：褐灰色土（10YR 4/1）で調査地北西部を除く地域にみられ、層厚は３～ 30㎝である。なお、本層中からは古墳時代から古代の土師器片や須恵器片が出土した。

第Ⅶ層：暗褐色土（10YR 3/3）で調査地南西部にみられ、層厚は５～ 18㎝である。本層中からは、弥生土器片が少量出土した。

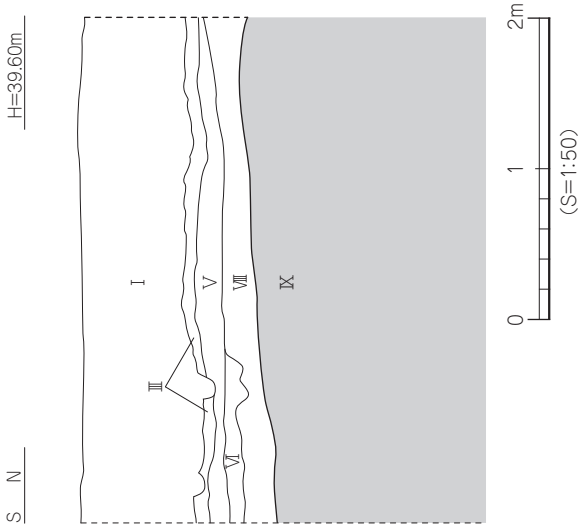
第Ⅷ層：黒褐色土（10YR 3/1）で調査地北東部を除く地域にみられ、層厚は５～ 30㎝である。本層中からは縄文土器や弥生土器、石器が出土した。

第Ⅸ層：黄橙色土（10YR 8/6）で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると調査地北東部が最も高く、標高 39.1 ｍ、南西部が最も低く、標高 37.9 ｍである。なお、本層は調査地の所在する道後城北地区で散見される縄文時代の堆積層である黄色シルトに相当するものと思われる。

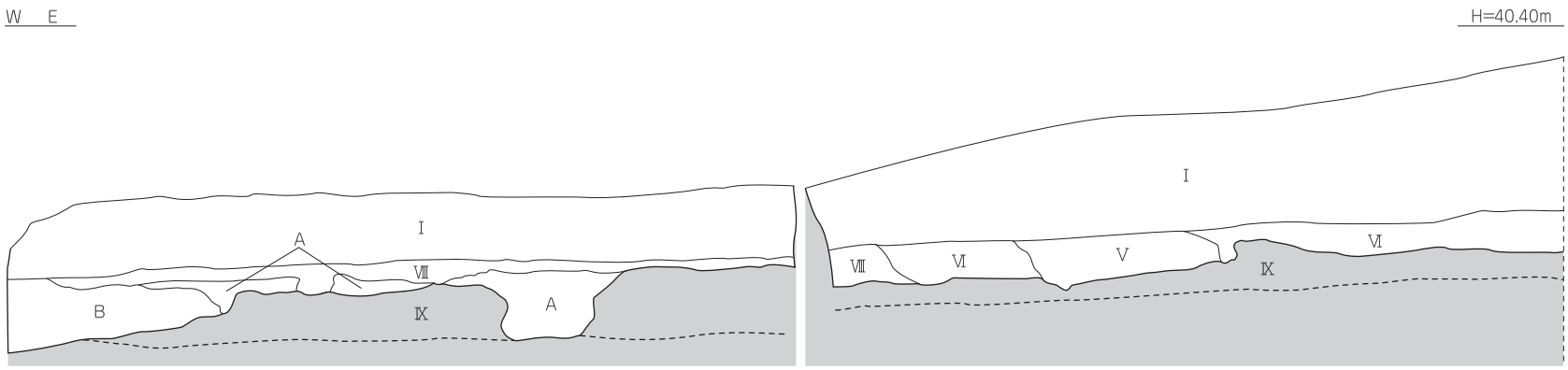
検出した遺構や出土遺物より、第Ⅷ層は弥生時代、第Ⅵ層は古墳時代までに堆積した土層と考えられる。調査では、調査地内に５ｍ四方のグリッドを設定した。グリッドは北から南へ向けて 1･2･･5、東から西へＡ・Ｂ・Ｃ・・Ｆとし、A1 区・A2 区・・・・・F5 区といったグリッド名を付した。グリッドは検出した遺構の位置表示や、遺物の取り上げ等に利用した。

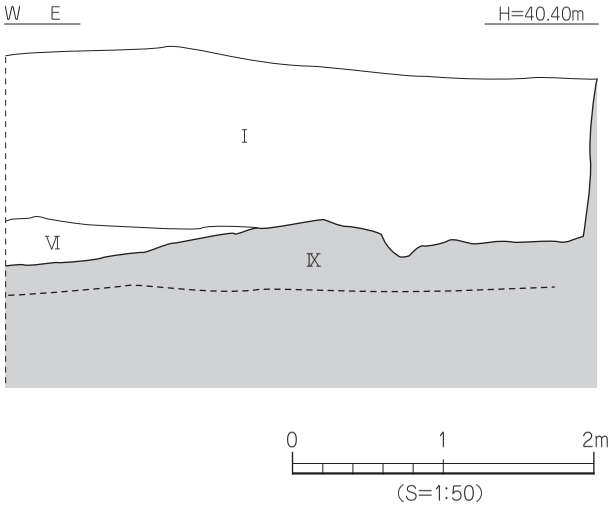


第Ⅰ層：造成土
第Ⅲ層：にぶい黄褐色土［10YR 4/3］
第Ⅴ層：灰黄褐色土［10YR 6/2］
第Ⅵ層：暗褐色土［10YR 3/3］
第Ⅶ層：黒褐色土［10YR 3/1］
第Ⅸ層：黄橙色土［10YR 8/6］



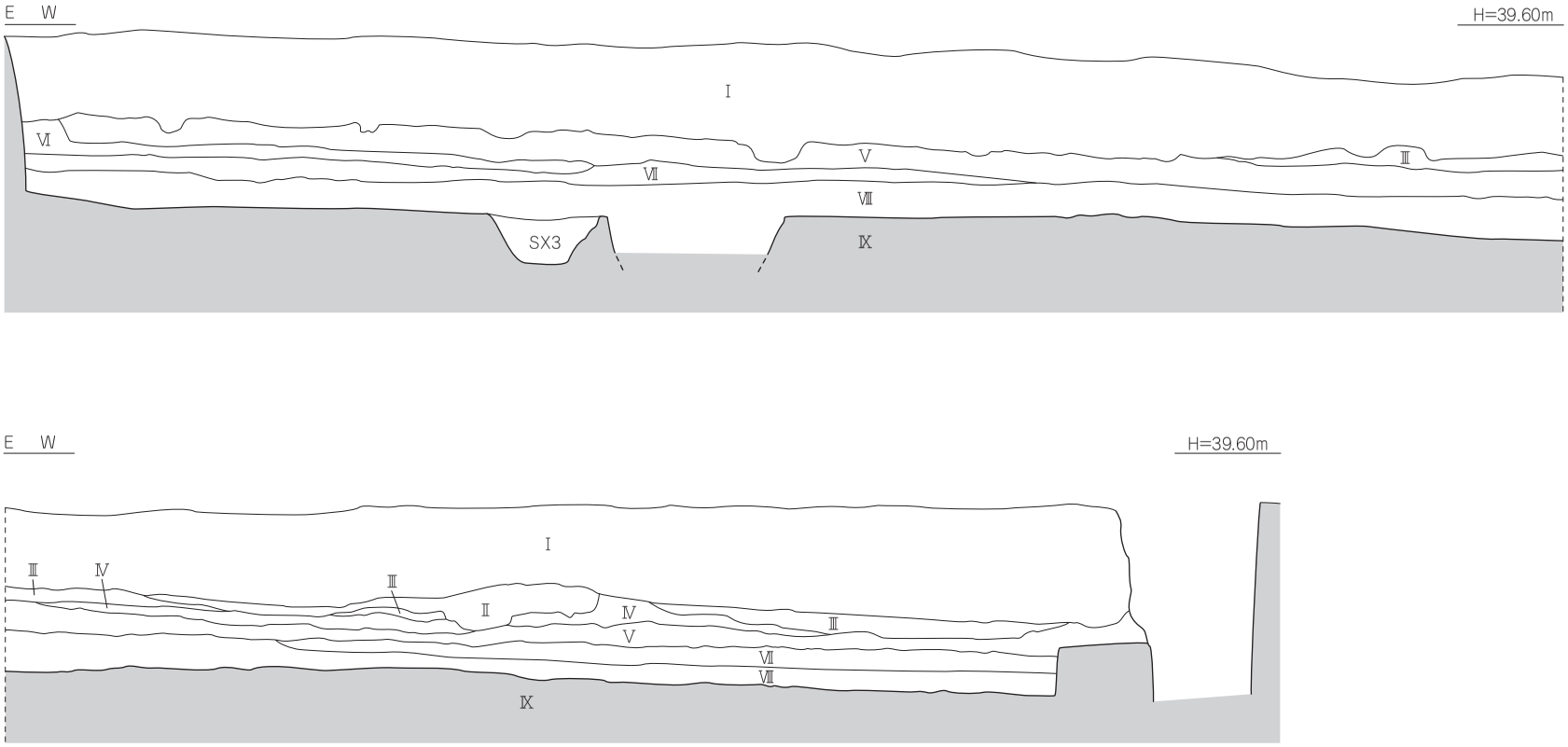
第３図　西壁土層図





第Ⅰ層： 造成土
第Ⅴ層： 灰黄褐色土［10YR 6/2］
第Ⅵ層： 褐灰色土［10YR 4/1］
第Ⅷ層： 黒褐色土［10YR 3/1］
第Ⅸ層： 黄橙色土［10YR 8/6］
A： 黒褐色土［10YR 3/1］に黄橙色土［10YR 8/6］がブロック状に少量混入
B： 黒褐色土［10YR 3/1］に黄橙色土［10YR 8/6］がブロック状に大量混入

第４図　　北壁土層図



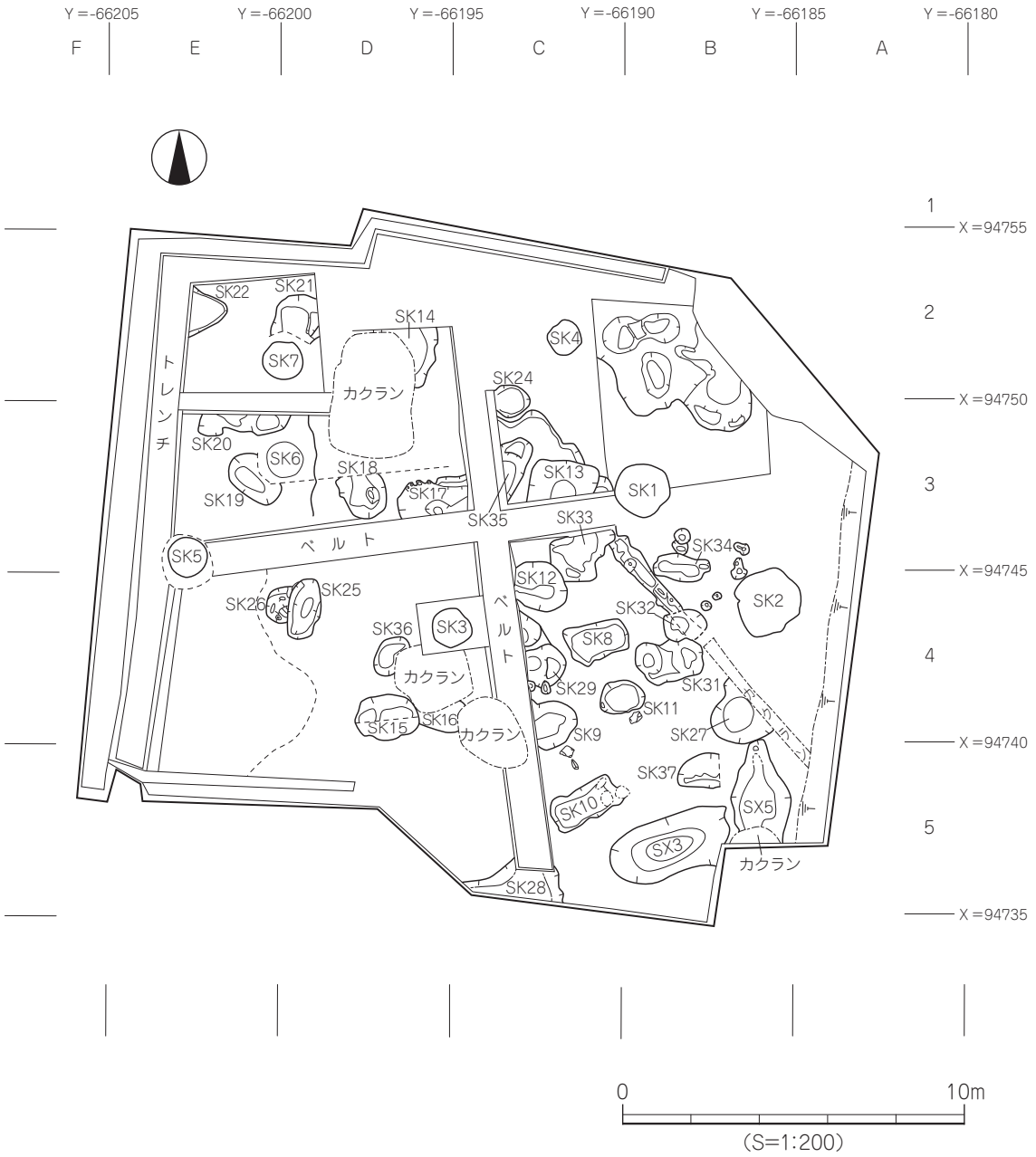
第Ⅰ層： 造成土
第Ⅱ層： 灰白色粘質土［7.5Y 7/1］
第Ⅲ層： にぶい黄褐色土［10YR 4/3］
第Ⅳ層： 灰白色土［10YR 7/1］
第Ⅴ層： 灰黄褐色土［10YR 6/2］
第Ⅵ層： 褐灰色土［10YR 4/1］
第Ⅶ層： 暗褐色土［10YR 3/3］
第Ⅷ層： 黒褐色土［10YR 3/1］
第Ⅸ層： 黄橙色土［10YR 8/6］

第５図　　南壁土層図

第２節　遺構と遺物

検出遺構は、土坑 34 基、溝 1 条、性格不明遺構 2 基、柱穴（小穴）10 基である。遺構の多くは北西部と南東部に分布しており、調査地では最も低い南西部で遺構の数が少ない傾向がある。

主要遺構については表 1 に列記したが、遺構には縄文時代（10 基）、弥生時代（9 基）、明治時代以降（7 基）、時期不明（8 基）があり、複合遺跡として当地が利用されていたことがわかる。ここでは縄文時代と弥生時代の遺構ごとに報告を行う。



第６図　　区割図・遺構配置図

1．土坑

縄文時代と弥生時代、時期不明、現代の土坑 34 基を検出した。平面形状が不整長方形･隅丸長方形･隅丸方形といった「四角形系統」と、楕円形や不整円形の「円形系統」とがあり、前者が主体を占めている。ここでは縄文時代と弥生時代、時期不明の 27 基の土坑について報告を行う。現代土坑（SK1 ～ 7）は攪乱とした。

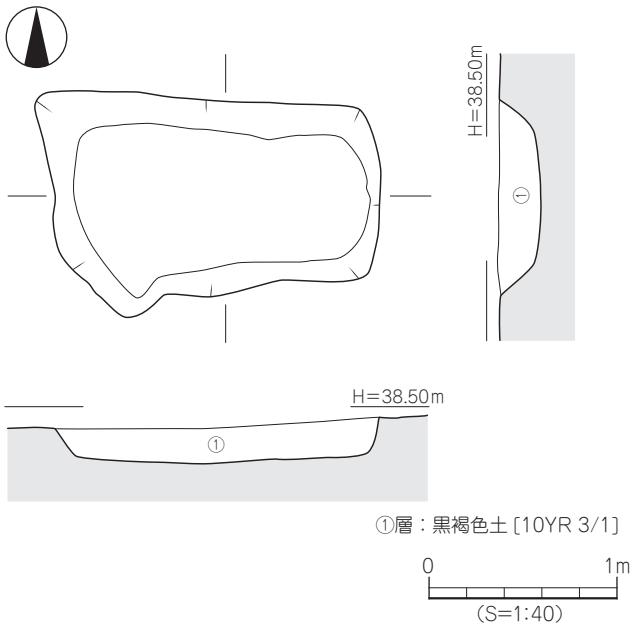
（1）縄文時代の土坑

縄文時代の土坑は 10 基を確認した。

ＳＫ８（第７図）

SK8 は調査地南東部 C4 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）上面で検出した。平面形態は不整長方形で、規模は長さ 1.74 m、幅 0.95 ～ 1.05 m、深さ 20cm を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は黒褐色土（10YR 3/1）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中からは礫が数点出土したが、実測可能な遺物はない。

時期：検出面と埋土より、縄文時代後～晩期の土坑とする。

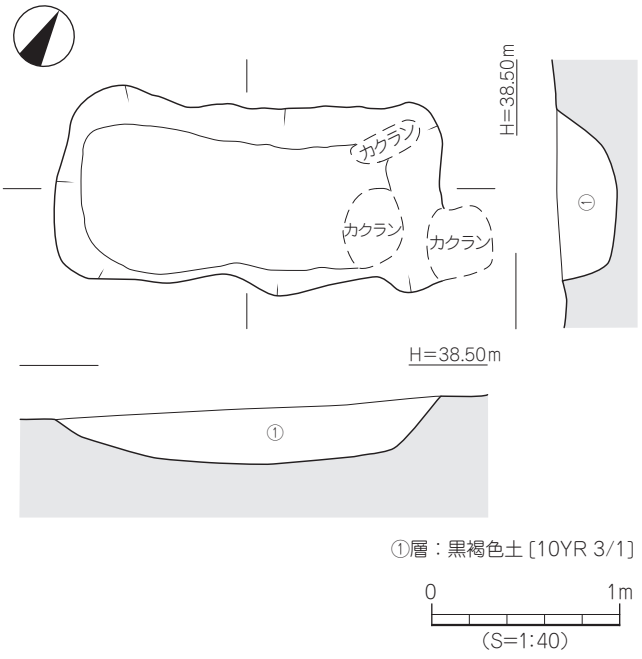


第７図　　SK８測量図

ＳＫ１０（第８図）

SK10 は調査地南東部 C5 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）上面で検出した。東側 3 カ所でカクランに切られる。平面形態は不整長方形で、規模は長さ 2.05 m、幅 0.90 ～ 1.05 m、深さ 30cm を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は黒褐色土（10YR 3/1）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中からは縄文土器の小片と礫が数点出土したが、実測可能な遺物はない。

時期：検出面と埋土より、縄文時代後～晩期の土坑とする。

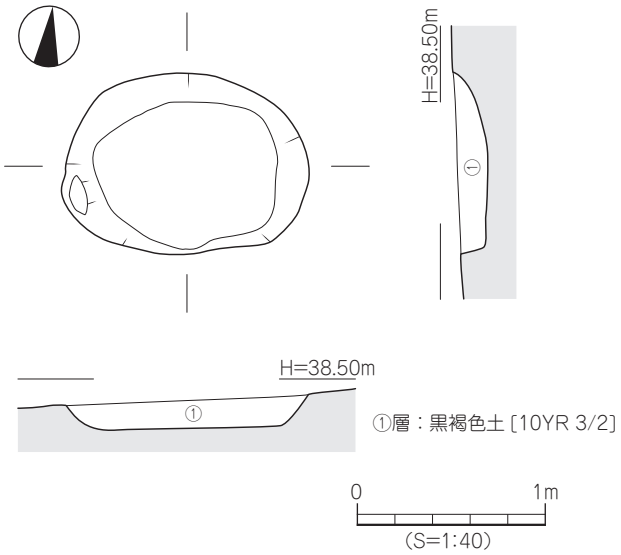


第８図　　SK10 測量図

ＳＫ１１（第９図）

SK11 は調査地南東部 B4 ～ C4 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）上面で検出した。平面形態は隅丸方形で、規模は長さ 1.30 m、幅 0.98 m、深さ 19cm を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中からは縄文土器の小片と礫、上層から須恵器の小片が出土したが、実測可能な遺物はない。

時期：検出面と埋土より、縄文時代後～晩期の土坑とする。



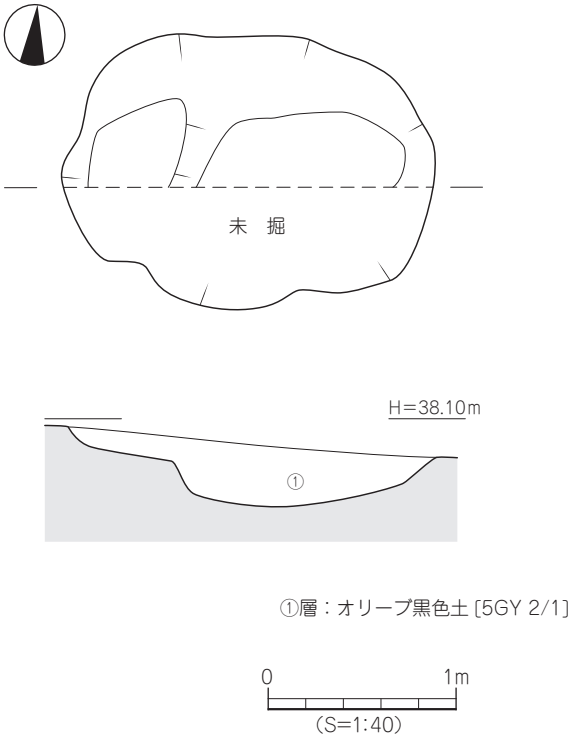
第９図　　SK11 測量図

ＳＫ１５（第 10・11 図）

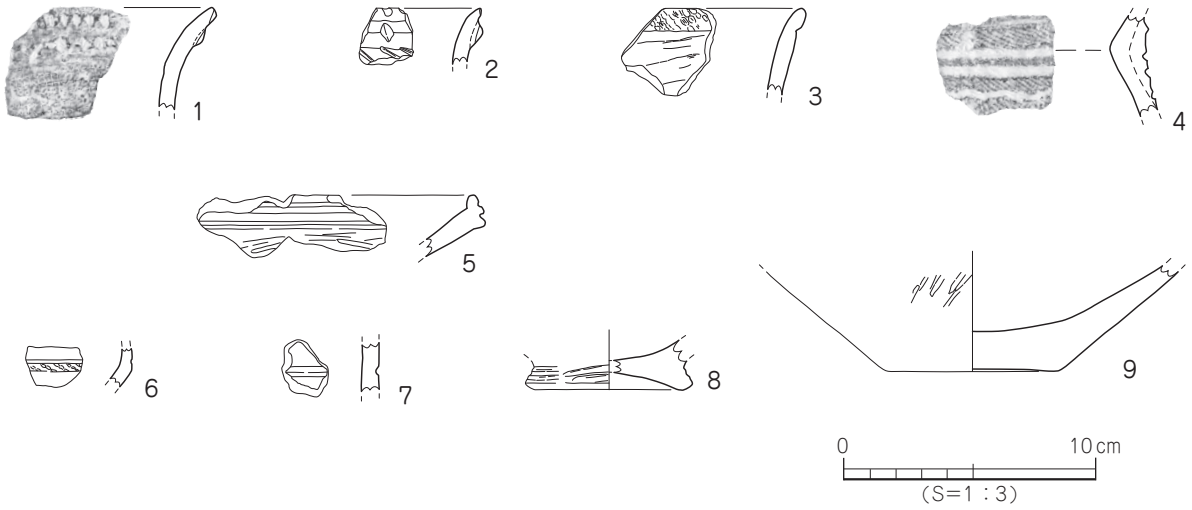
SK15 は調査地南西部 D4 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）上面で検出した。平面形態は楕円形で、規模は長さ 2.00 m、幅 1.40 m、深さ 32cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土はオリーブ黒色土（5GY 2/1）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中からは縄文土器と弥生土器の小片や礫が数点出土した。

出土遺物　1 ～ 9 は縄文土器。1 ～ 4・7 は深鉢。1 は外反する口縁部。端部は刻目を施し口縁下部に刻目凸帯文を持つ。2 は口縁部に刻目、口縁下部に刻目凸帯文を持つ。4 は頸部に 2 条の沈線文と 1 条の波状沈線文を施す。5・6 は浅鉢。5 は口縁部端面に 2 条の沈線文を施す。6 は胴部外面に 1 条の沈線文。7 は胴部外面に 1 条の沈線文。8 は凹み底。9 は平底。

時期：出土遺物（1・2）の特徴より、縄文時代晩期後半の土坑とする。



第 10 図　　SK15 測量図



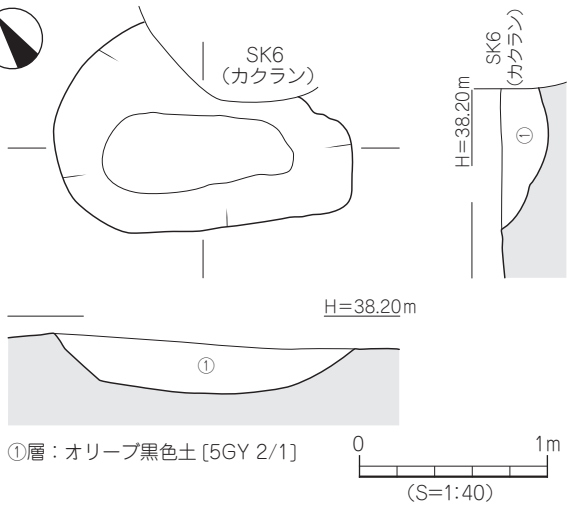
第 11 図　　SK15 出土遺物実測図

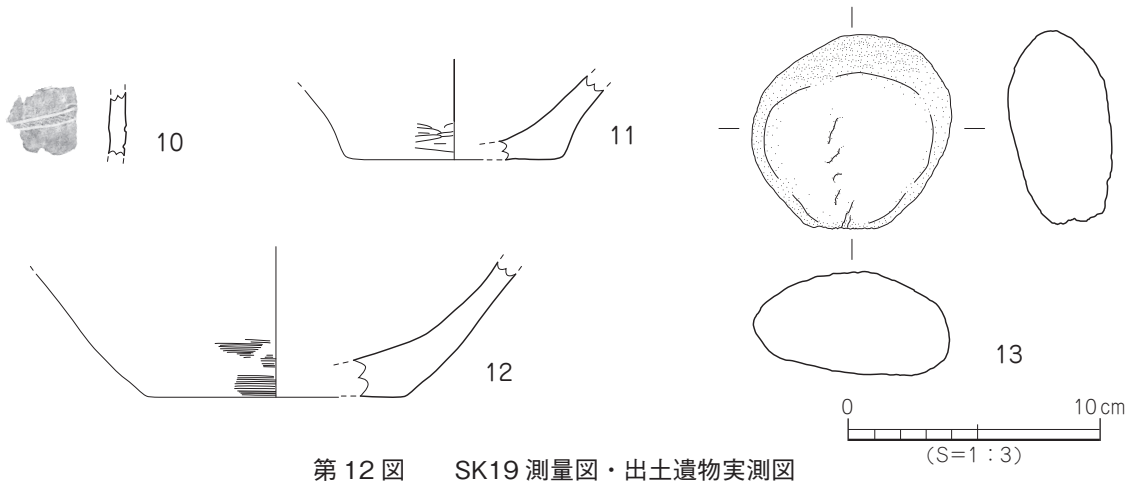
ＳＫ１９（第 12 図）

SK19 は調査地北西部 E3 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）上面で検出した。北側はカクラン（SK6）に切られる。平面形態は楕円形で、規模は長さ 1.60 m、幅 1.10 m、深さ 24cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土はオリーブ黒色土（5GY 2/1）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中からは縄文土器、弥生土器と石製品が出土した。

出土遺物　10 ～ 12 は縄文土器の深鉢。10 は胴部外面に文様。11 は平底。12 は平底。13 は敲石。敲打痕が認められる。

時期：出土遺物の形態と埋土から、縄文時代後期の土坑とする。



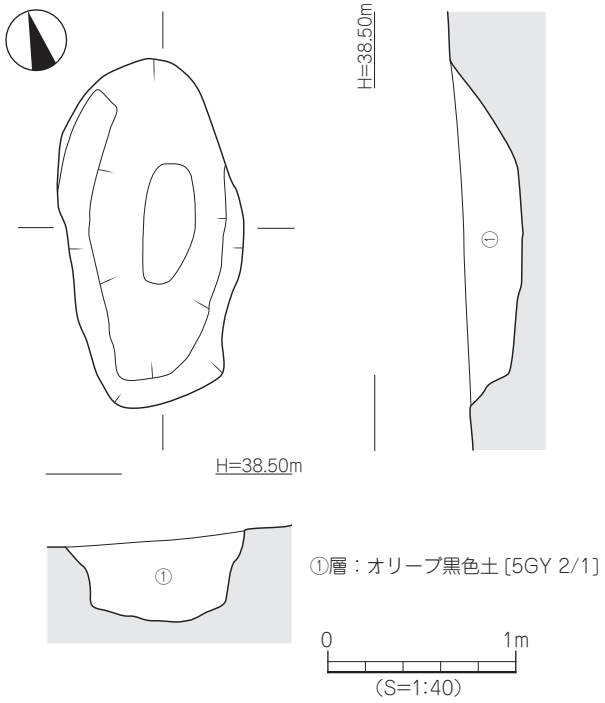


第 12 図　　SK19 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ２５（第 13 図）

SK25 は調査地南西部 D4 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）上面で検出した。西側で SK26 を切る。平面形態は不整長方形で、規模は長さ 1.80 m、幅 1.00 m、深さ 47cm を測る。断面形態は逆台形状である。埋土はオリーブ黒色土（5GY 2/1）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中からは縄文土器や弥生土器、石製品の小片が出土したが、実測可能な遺物はない。

時期：埋土から、縄文時代後～晩期の土坑とする。

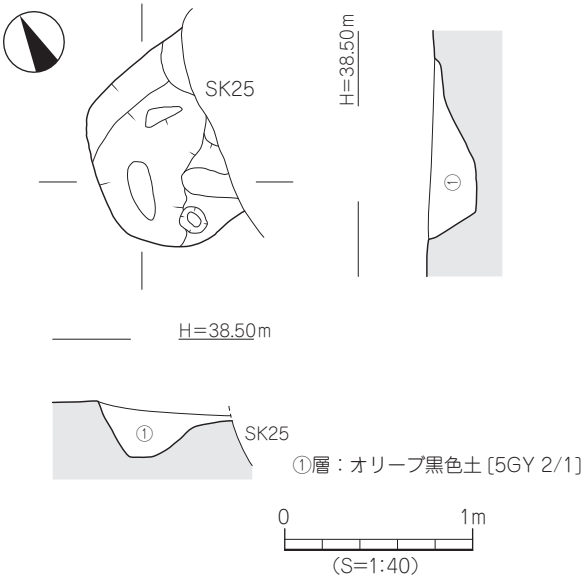


第 13 図　　SK25 測量図

ＳＫ２６（第 14 図）

SK26 は調査地南西部 D4 ～ E4 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）上面で検出した。東側を SK25 に切られる。平面形態は不整長方形で、規模は検出長 0.64 m、幅 1.00 m、深さ 29cm を測る。断面形態は「U」字状である。埋土はオリーブ黒色土（5GY 2/1）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中には縄文土器の小片があるが、実測可能な遺物はない。

時期：埋土と出土遺物から、縄文時代後～晩期の土坑とする。



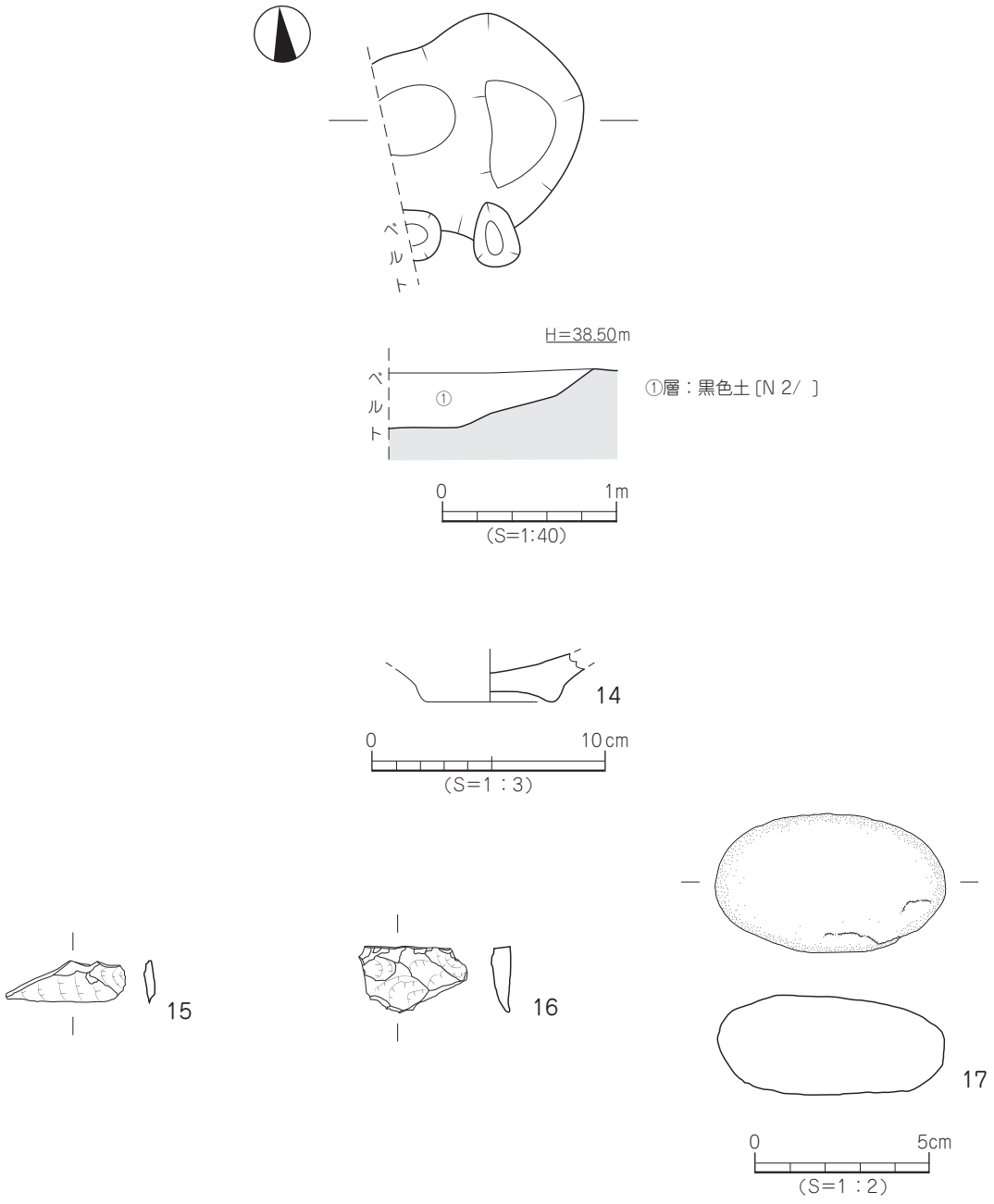
第 14 図　　SK26 測量図

ＳＫ２９（第 15 図）

SK29 は調査地南東部 C4 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、南北大ベルトの観察で第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）から掘られていることを確認した。西側はベルトで未掘である。平面形態は不整形で、規模は検出長 1.30 m、幅 1.20 m、深さ 15 ～ 30cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒色土（N 2/ ）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中からは礫が数点出土した。出土遺物は、縄文土器と石器がある。

出土遺物　14 は縄文土器の深鉢。凹み底。15・16 は剝片。材質はサヌカイトである。17 は擦石。

時期：検出面と埋土、出土遺物から縄文時代晩期の土坑とする。

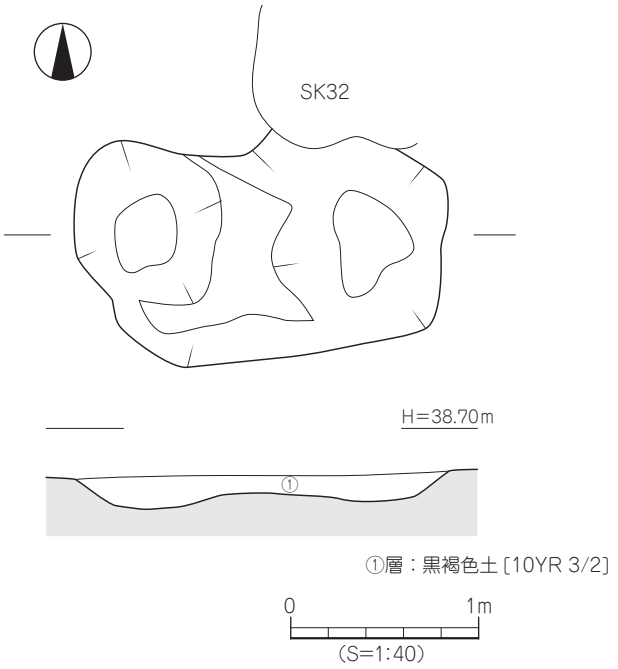


第 15 図　　SK29 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ３１（第 16 図）

SK31 は調査地南東部 B4 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）上面で検出した。北側を SK32 に切られる。平面形態は隅丸長方形で、規模は長さ 2.00 m、幅 1.20 m、深さ 16cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中からは、礫が数点出土した。

時期：埋土と検出面から、縄文時代後～晩期の土坑とする。

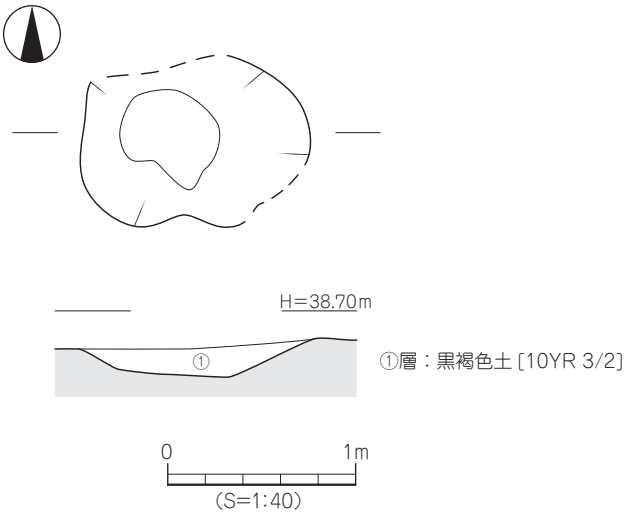


第 16 図　　SK31 測量図

ＳＫ３２（第 17 図）

SK32 は調査地南東部 B4 区に位置し、SK31 を切る。検出面は第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、ベルトの観察で第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）から掘られていることを確認した。平面形態は隅丸長方形で、規模は長さ 1.20 m、幅 0.80 m、深さ 14cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）で 2 ～ 3㎜大の長石の砕片を含み、硬く締まっている。埋土中からは、礫が数点出土した。

時期：埋土と検出面から、縄文時代後～晩期の土坑とする。



第 17 図　　SK32 測量図

（2）弥生時代の土坑

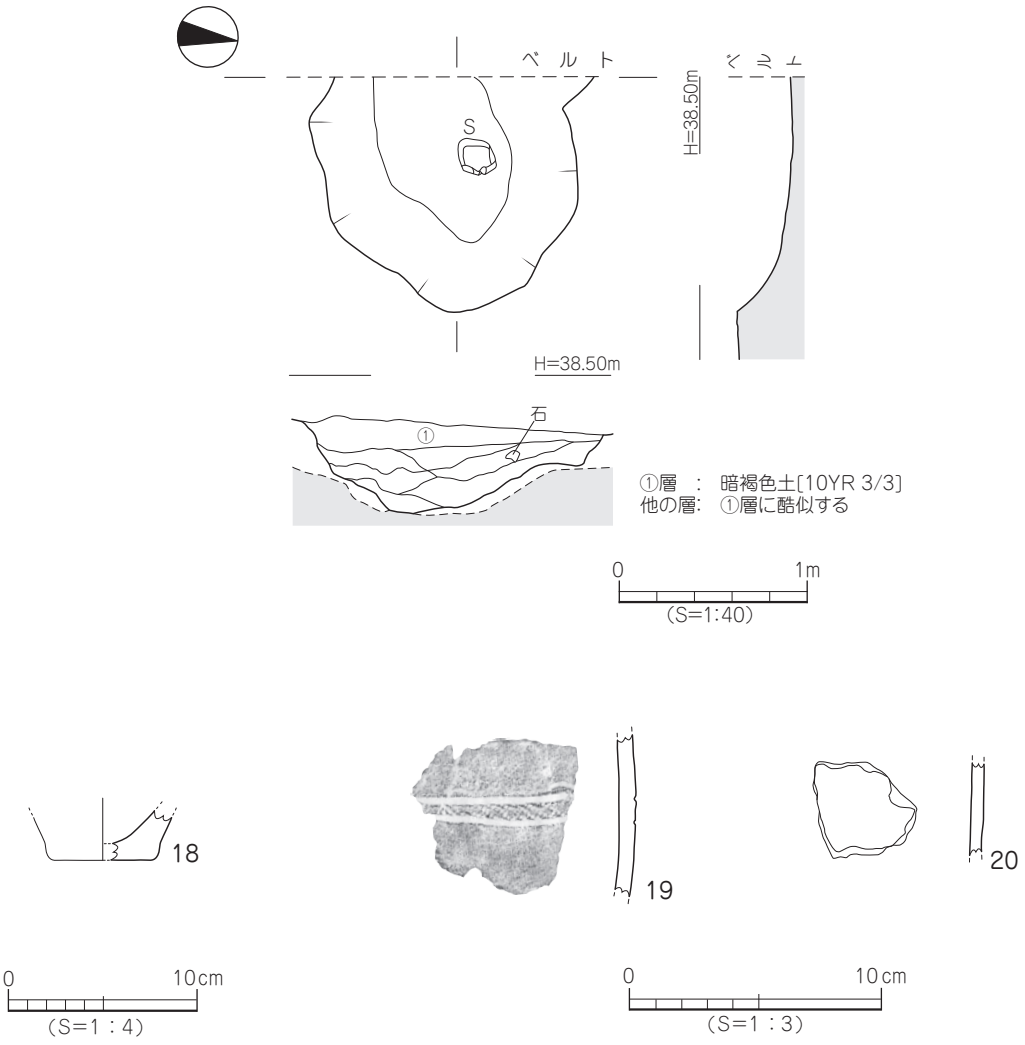
弥生時代の土坑は、9基を検出した。

ＳＫ９（第18図）

SK9は調査地南東部C4・5区に位置する。南北大ベルトの観察で第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面から掘られていることを確認した。平面形態は長楕円形とみられ、規模は検出長1.20ｍ、幅1.30ｍ、深さ50cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は6層で、最上層が2～4㎜大の長石等を多く含む暗褐色土（10YR 3/3）で、大ベルトの断面を削るとガチガチした質感がある。他の5層も同様な色調であるが、断面を削った時の感触の差異等で辛うじて分層できた。出土遺物には縄文土器、弥生土器、石製品がある。

出土遺物　18は弥生土器の甕形土器。19･20は縄文土器の深鉢。19の胴部に2条の沈線文を施す。

時期：検出面と埋土、出土遺物より弥生時代前期末～中期初頭の土坑とする。



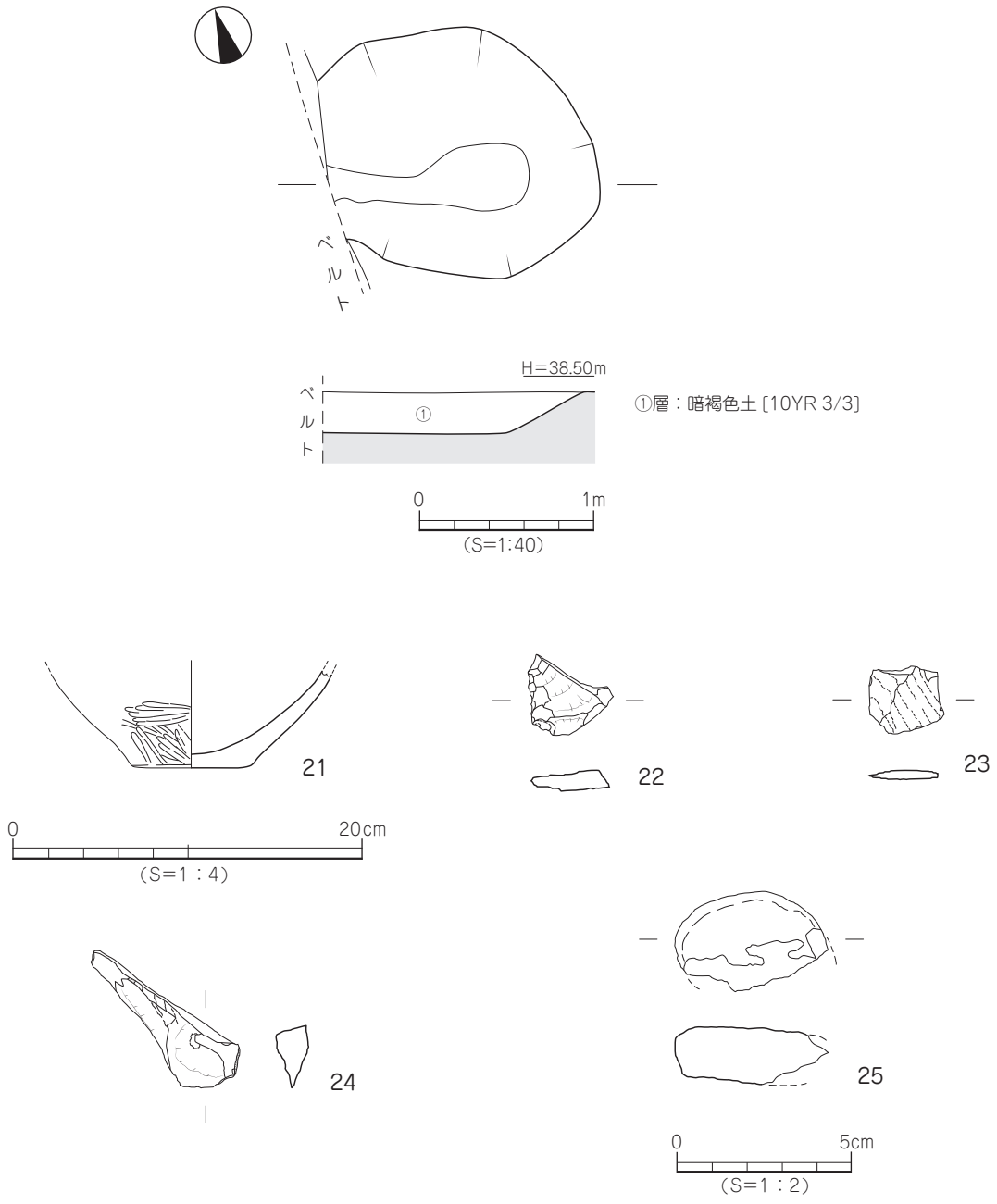
第18図　　SK9測量図・出土遺物実測図

ＳＫ１２（第 19 図）

SK12 は調査地南東部 C3・4 区に位置する。ベルト観察から第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面から掘られていることを確認したが、西側はベルトで未掘である。SK33 を切る。平面形態は楕円形で、規模は検出長 1.48 m、幅 1.45 m、深さ 24cm を測る。断面形態は逆台形状であり、埋土は暗褐色土（10YR 3/3）である。出土遺物には、弥生土器と石器がある。

出土遺物　21 は弥生土器の壺形土器。平底。22 ～ 24 は剝片。25 は軽石。

時期：出土遺物から弥生時代中期前葉の土坑とする。



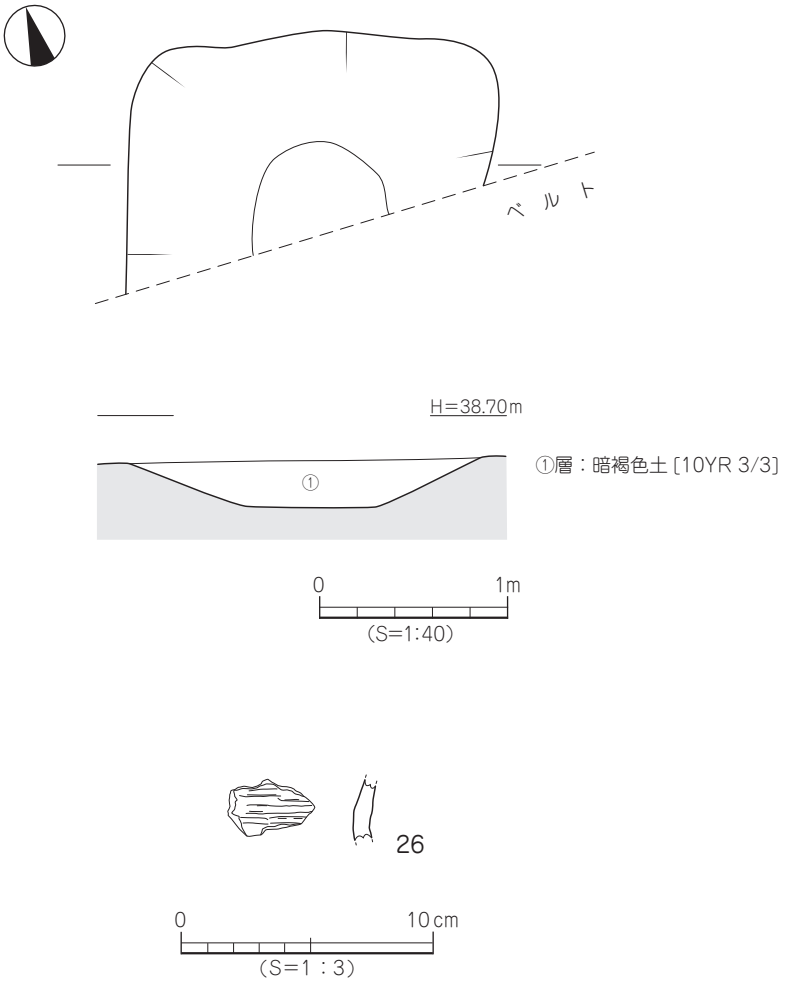
第 19 図　　SK12 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ１３（第 20 図）

SK13 は調査地北東部 C3 区に位置する。東西大ベルトの観察から第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面から掘られていることを確認したが、南側はベルトにより未掘である。平面形態は隅丸方形とみられ、規模は検出長 1.08 m、幅 1.90 m、深さ 24cm を測る。断面形態はレンズ状であり、埋土は暗褐色土（10YR 3/3）である。出土遺物には、縄文土器の小片がある。

出土遺物　26 は縄文土器の深鉢。胴部の小片。

時期：検出面と埋土から、弥生時代前～中期の土坑とする。



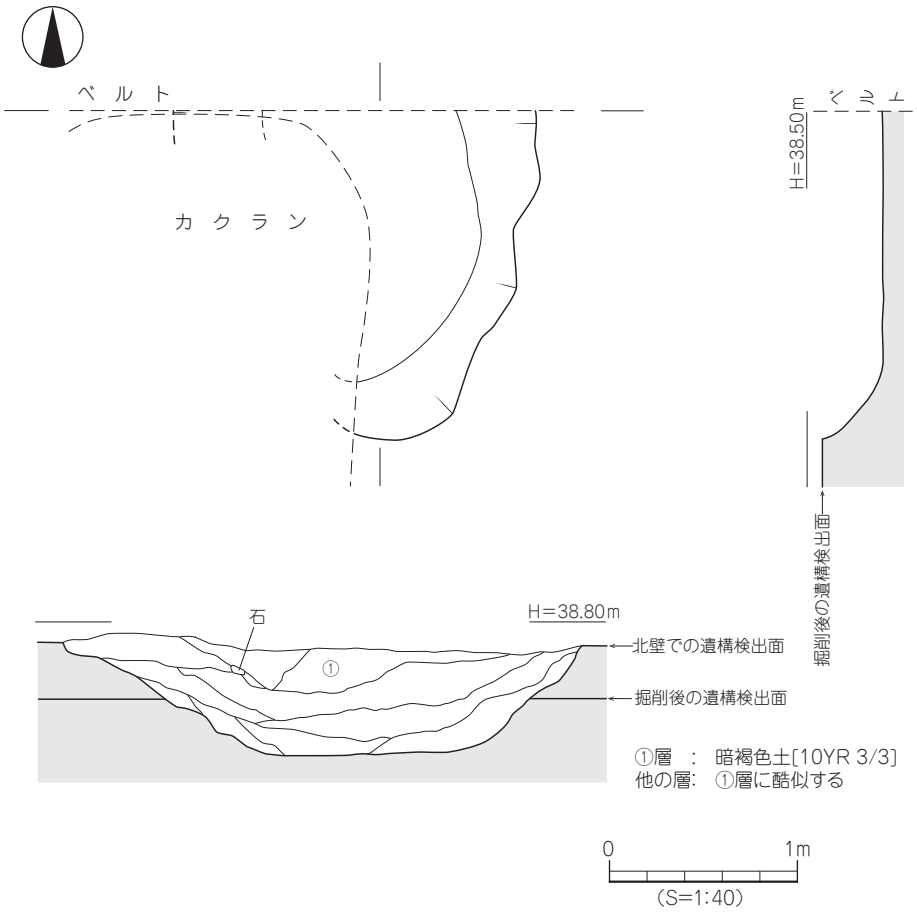
第 20 図　　SK13 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ１４（第 21・22 図）

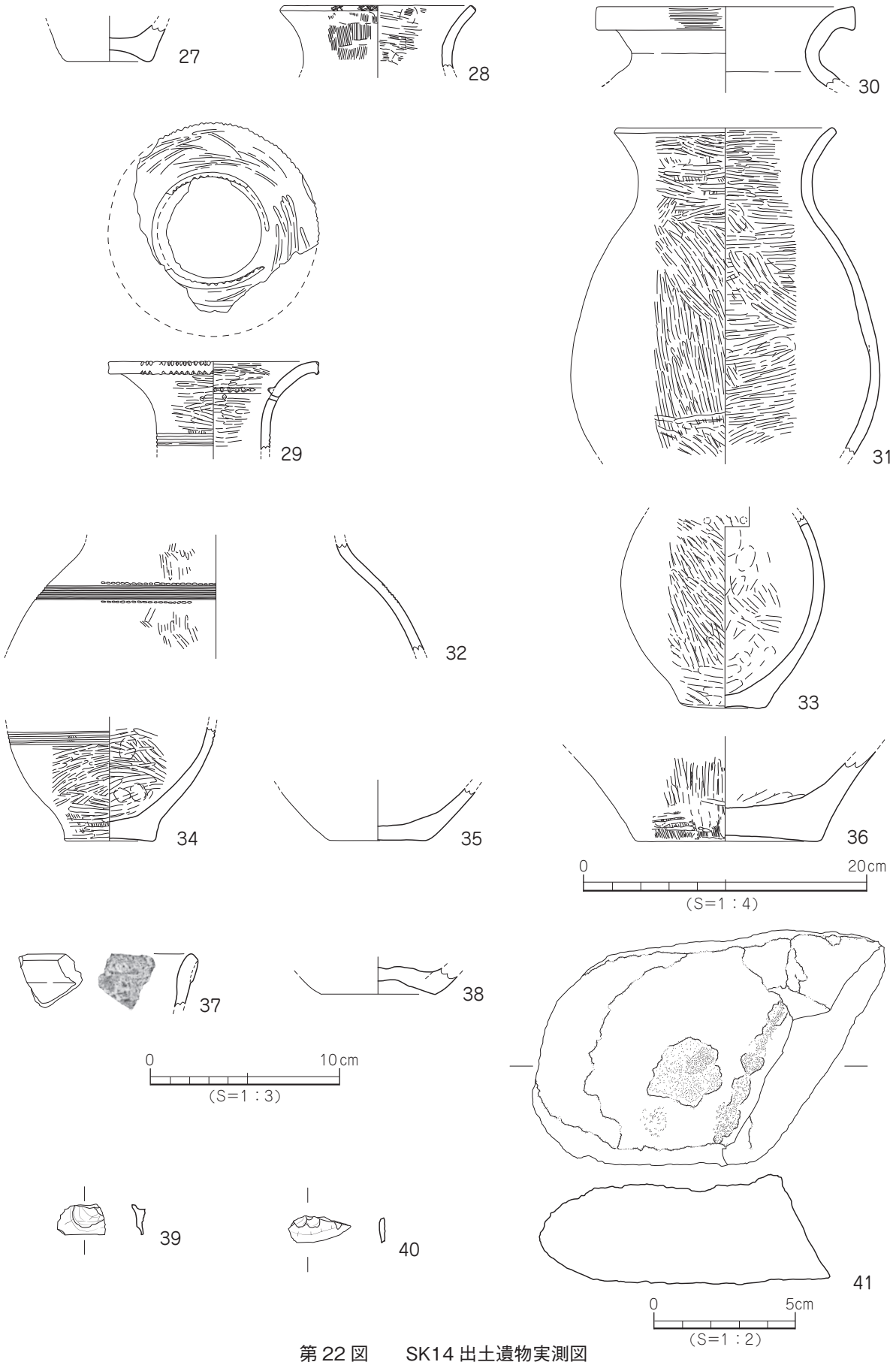
SK14 は調査地北西部 D2 区に位置する。東西ベルトの観察から第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面から掘られていることを確認した。北側はベルトにより未掘である。平面形態は楕円形とみられ、規模は検出長 2.75 m、検出幅 1.74 m、深さ 32cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は、最上層が 2 ～ 4㎜大の長石等を多く含む暗褐色土（10YR 3/3）で、大ベルトの断面を削るとガチガチした質感がある。他の層も同様な色調であるが､断面を削った時の感触の差異等で辛うじて分層できた。出土遺物には縄文土器、弥生土器、石製品がある。

出土遺物　27 ～ 36 は弥生土器。27 は甕形土器。上げ底の底部。28 ～ 36 は壺形土器。28 は外反する口縁部。端面に格子状の刻目文を施す。29 は口縁端部の上下に刻目文､口縁部内面に刻目を持つ凸帯文を巡らす｡頸部外面に3条のヘラ描き沈線文と2個一組の円孔を2ヶ所に施す｡30 は広口壺。短い頸部と口縁部。31 は外反する口縁部の端部が丸みをもつ｡32 は肩部に櫛状工具による6条の沈線文｡沈線文の上下に刺突文を施す｡33は無頸壺か？口縁部欠損｡肩部に2ヶ所の円孔｡34はわずかに上げ底で胴部外面にヘラ状工具による3条の沈線文が残る｡35 は平底。36 はわずかに上げ底。37・38 は縄文土器。37 は深鉢の口縁部で端部は肥厚される。38 は凹み底。39・40 は剝片。39 の材質は姫島産黒曜石。40 はサヌカイト。41 は台石。作業台として使用されたものか。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代中期前葉の土坑とする。



第 21 図　　SK14 測量図



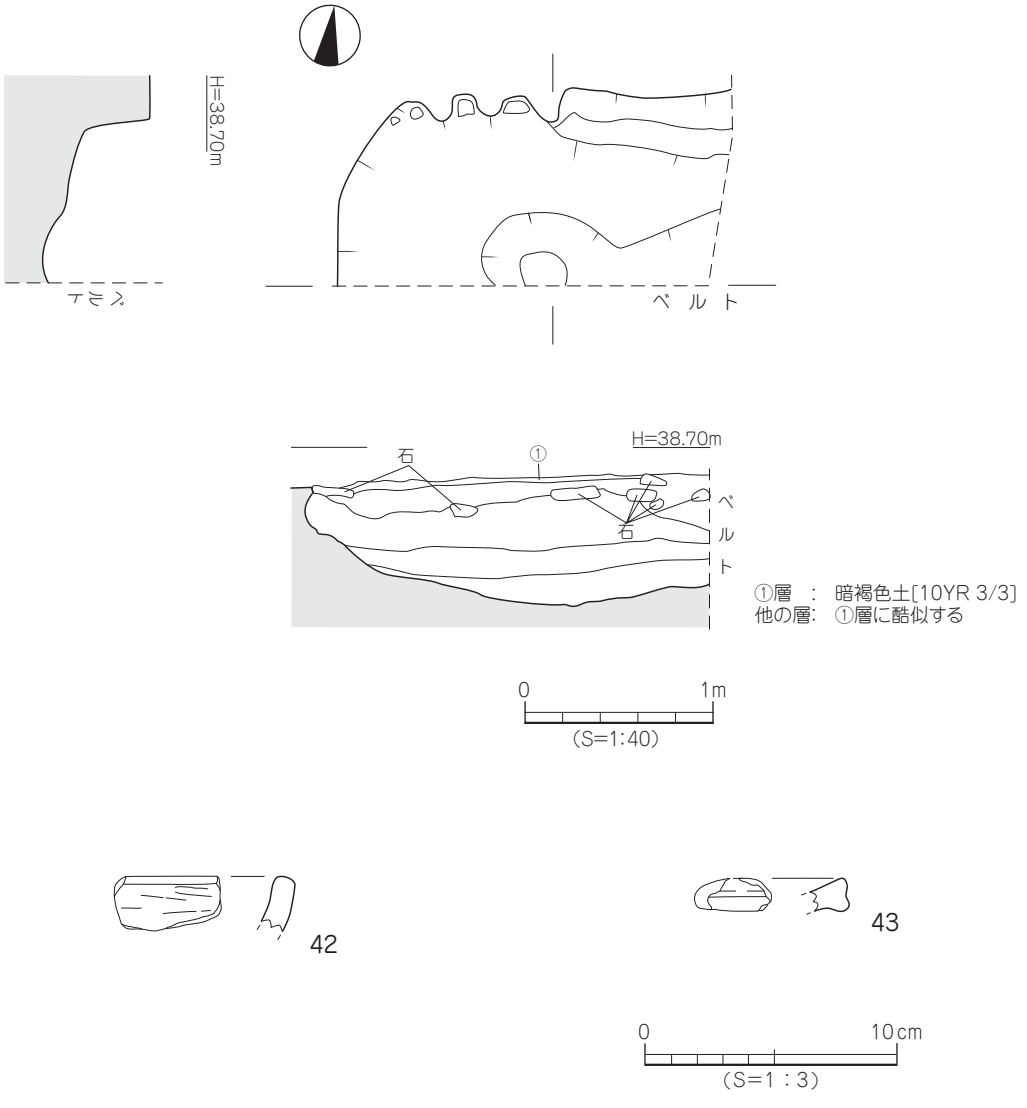
第 22 図　　SK14 出土遺物実測図

ＳＫ１７（第 23 図）

SK17 は調査地北西部 C3 ～ D3 区に位置する。南北大ベルトの観察から第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面から掘られていることを確認したが、南側と東側はベルトにより未掘である。平面形態は隅丸長方形とみられ、規模は検出長 2.17 m、検出幅 1.04 m、深さ 67cm を測る。断面形態は舟底状である。埋土は 5 層で、最上層が 2 ～ 4㎜大の長石等を多く含む暗褐色土（10YR 3/3）で、大ベルトの断面を削るとガチガチした質感がある。他の 4 層も同様な色調であるが、断面を削った時の感触の差異等で辛うじて分層できた。出土遺物には、弥生土器と縄文土器がある。

出土遺物　42・43 は縄文土器。2 点とも浅鉢の口縁部の小片である。

時期：埋土と検出面から弥生時代前～中期の土坑とする。



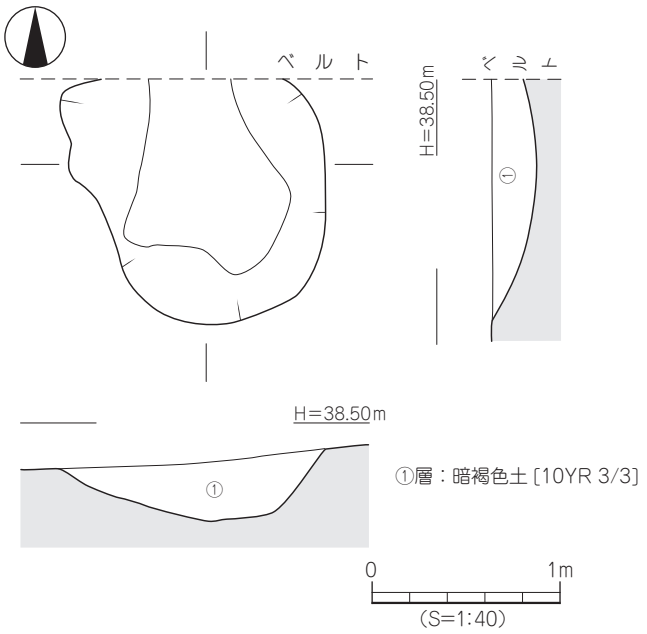
第 23 図　　SK17 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ１８（第 24 図）

SK18 は調査地北西部 D3 区に位置する。ベルト観察から第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面から掘られていることを確認したが、北側はベルトにより未掘である。平面形態は隅丸方形とみられ、規模は検出長 1.30 m、幅 1.20 m、深さ 26cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は暗褐色土（10YR 3/3）である。

出土遺物には弥生土器があるが、小片のため実測可能な遺物はない。

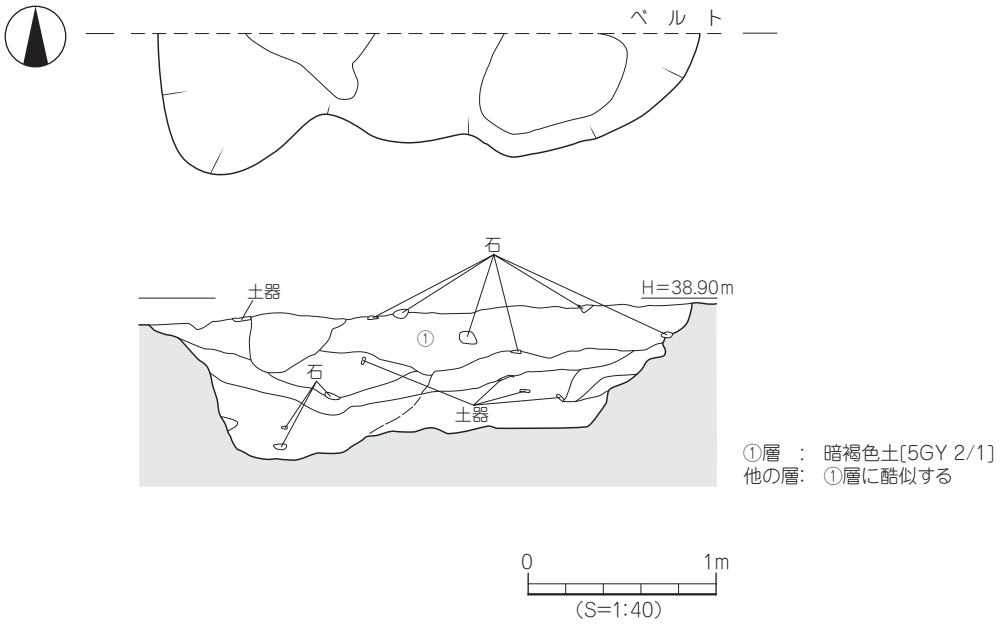
時期：検出面や埋土から、弥生時代前～中期の土坑とする。



第 24 図　　SK18 測量図

ＳＫ２０（第 25・26 図、図版 6）

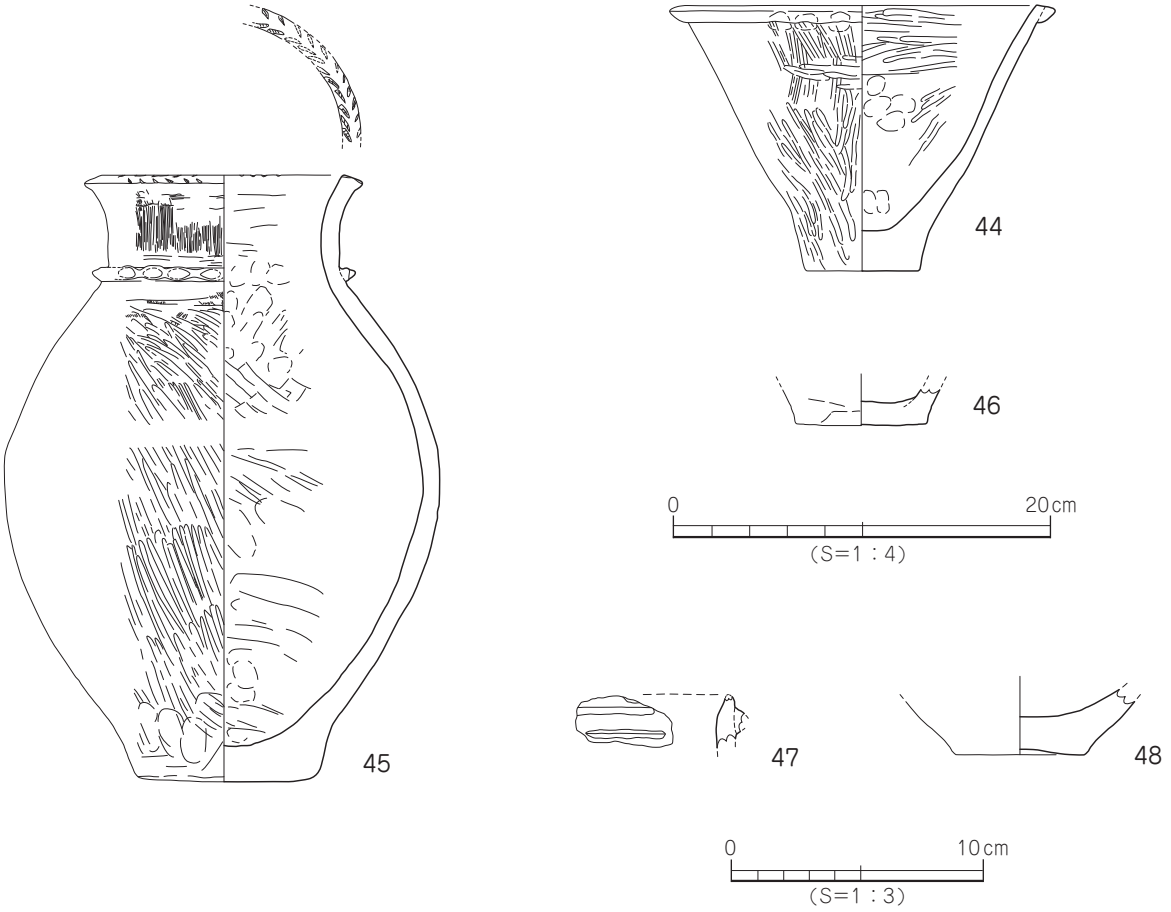
SK20 は調査地北西部 E3 区に位置する。東西ベルトの観察から第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面から掘られていることを確認したが、北側はベルトにより未掘である。平面形態は長楕円形とみられ、規模は長さ 2.88 m、検出幅 0.72 m、深さ 0.60 ～ 0.77cm を測る。埋土は暗褐色土（5GY 2/1）で、大ベルトの断面を削るとガチガチした質感がある。他の 5 層も同様な色調であるが、断面を削った時の感触の差異等で辛うじて分層できた。出土遺物には縄文土器と弥生土器がある。



第 25 図　　SK20 測量図

出土遺物　44 ～ 46 は弥生土器。44 は甕形土器。底部は平底。口縁部は貼り付け口縁。45･46は壺形土器。45 は外反する短い口縁部の端面上下に刻目を施し、頸部には押圧された突帯文を張り付ける。46 は平底。47・48 は縄文土器。47 は深鉢の口縁部の小片。外面に 1 条の突帯文が残る。48 は浅鉢の凹み底。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代中期前葉の土坑とする。



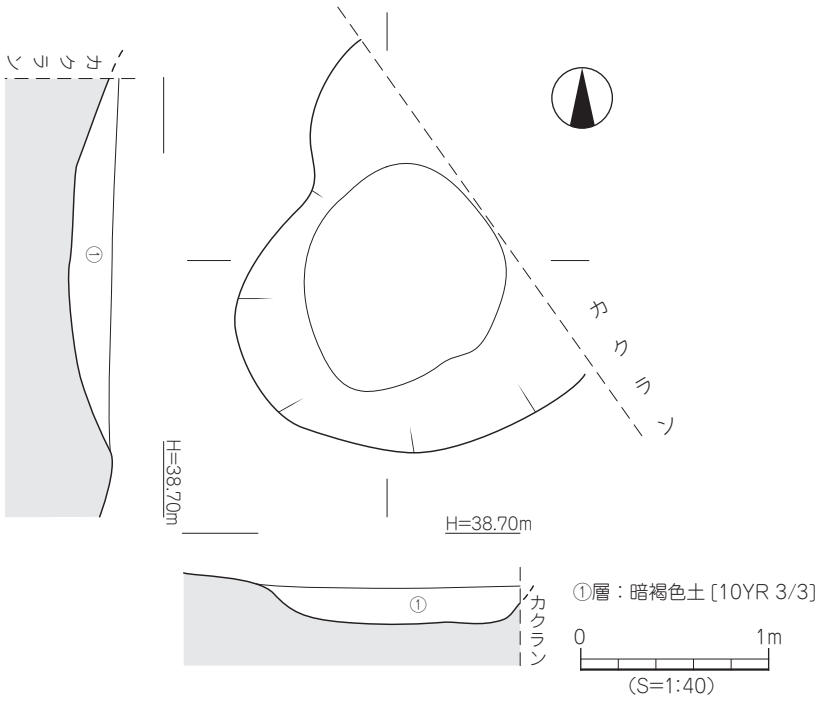
第 26 図　　SK20 出土遺物実測図

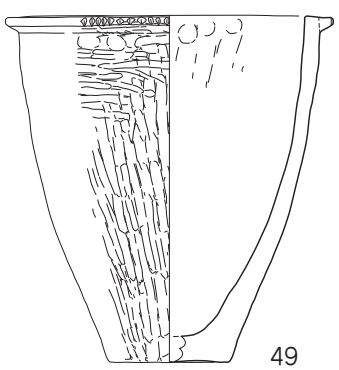
ＳＫ２７（第 27 図、図版 6）

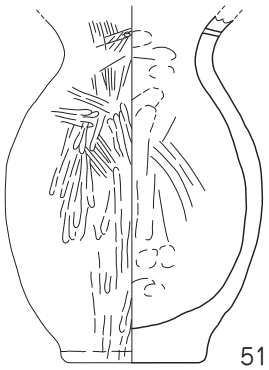
SK27 は調査地南東部 B4 区に位置する。第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面から掘られていると思われる。北東部はカクランに切られる。平面形態は不整円形とみられ、規模は検出長 1.60 m、幅 2.10 m、深さ 19cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は暗褐色土（10YR 3/3）で、大ベルトの断面を削るとガチガチした質感がある。他の 5 層も同様な色調であるが、断面を削った時の感触の差異等で辛うじて分層できた。出土遺物には、弥生土器と縄文土器がある。

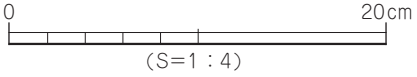
出土遺物　49 ～ 51 は弥生土器。49・50 は甕形土器。49 は口縁部は貼り付け口縁で刻目を施す。底部は平底。50 はわずかに上げ底。51 は壺形土器。頸部上に1ヶ所の穿孔がある。底部は平底。52～54は縄文土器の深鉢。52 は外面に沈線文。53 は外面に沈線文と渦巻き状の沈線文。54 は平底の楕円形状の底部を持つ。

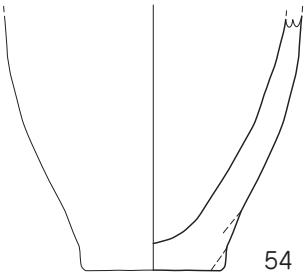
時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代前期末～中期初頭の土坑とする。

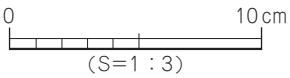












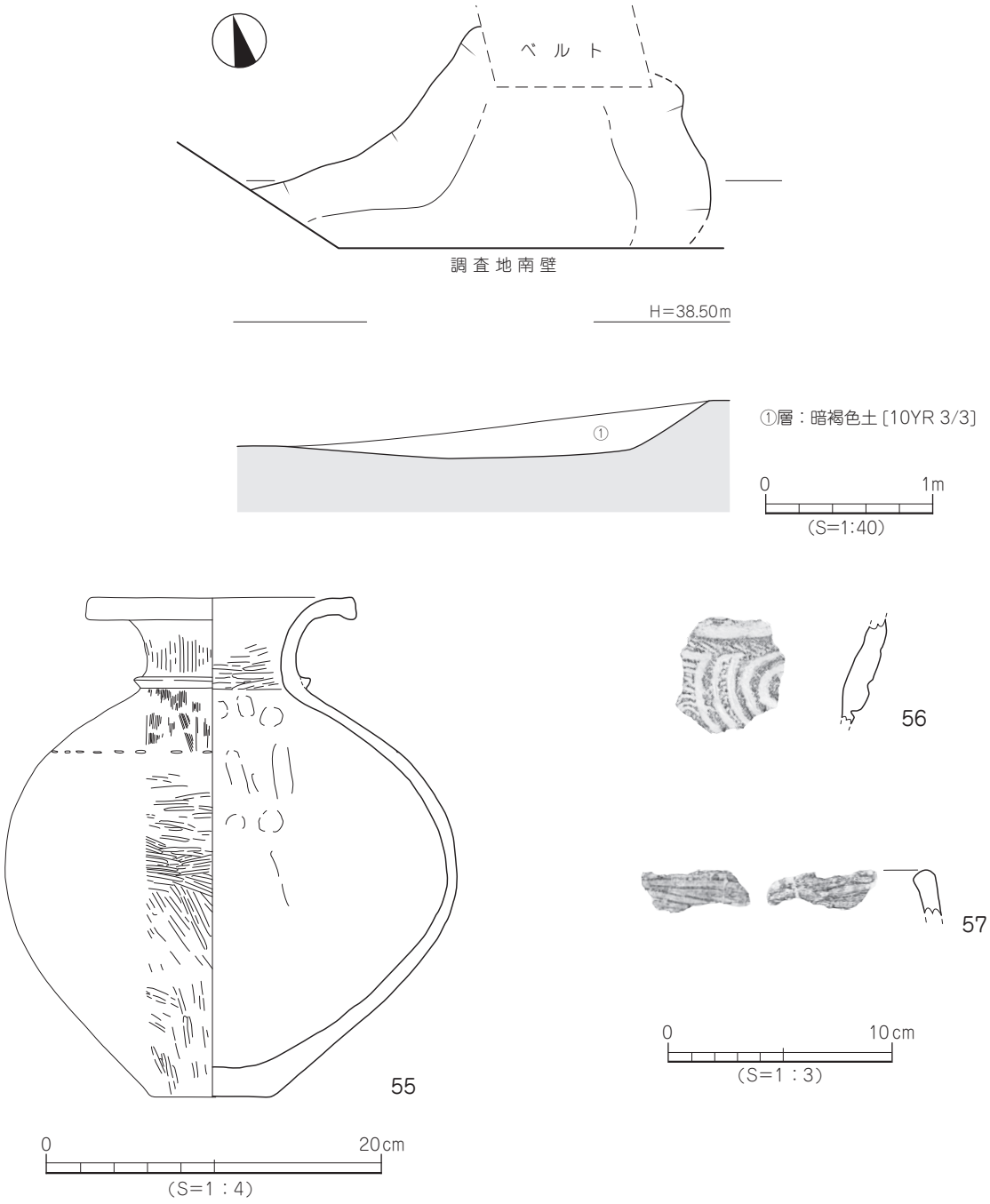
第 27 図　　SK27 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ２８（第 28 図、図版 4・6）

SK28 は調査地南部 C5 区に位置する。第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面から掘られていると思われる。北側はベルトにより未掘で南側は調査区外につづく。平面形態は不整形で、規模は長さ 2.64 m、検出幅 1.28 m、深さ 24㎝である。断面形態はレンズ状である。埋土は暗褐色土（10YR 3/3）である。出土遺物には、弥生土器と縄文土器がある

出土遺物　55 は弥生土器の壺形土器。短く外反する口縁部。頸部に張り付け突帯文を1条、肩部に刺突列点文を1条施す。56・57 は縄文土器の深鉢。56 は外面に沈線文。57 は口縁部の小片。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代中期中葉の土坑とする。



第 28 図　　SK28 測量図・出土遺物実測図

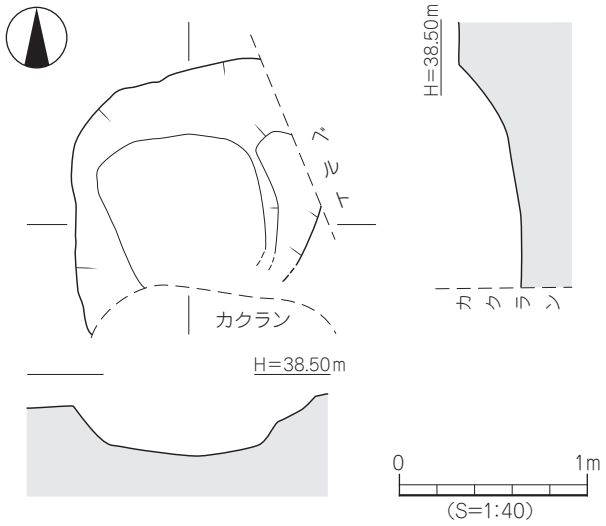
（3）時期不明土坑

時期不明土坑は8基を検出した。

ＳＫ２１（第29図）

SK21は調査地北西部D2～E2区に位置する。南側はカクランに切られ、東側はベルトにより未掘である。平面形態は不整形で、規模は検出長1.26 m、検出幅1.15 m、深さ34cmを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は不明である。出土遺物には、縄文土器がある。小片のため実測可能な遺物はない。

時期：埋土が不明で出土遺物も小片のため、時期は特定できない。



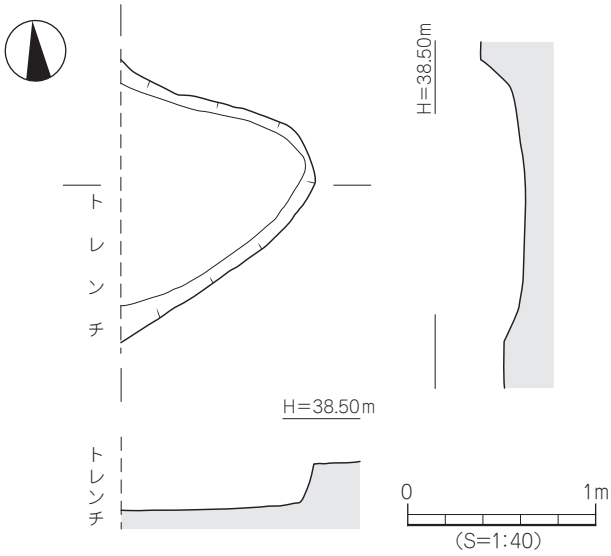
第29図　　SK21 測量図

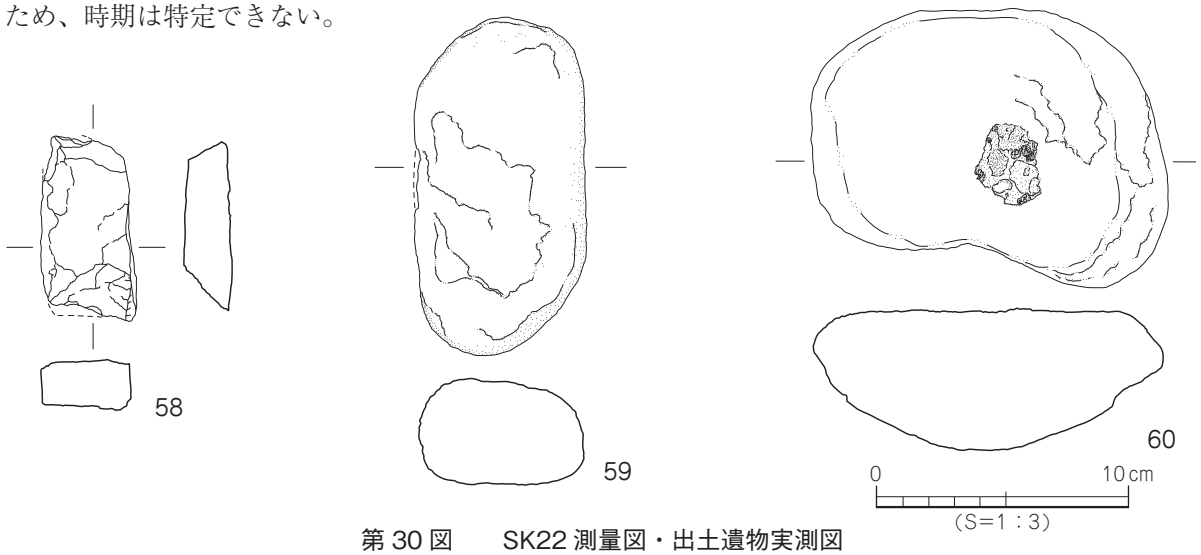
ＳＫ２２（第30図）

SK22は調査地北西部E2区に位置する。西側はトレンチに切られる。平面形態は不整形で、規模は検出長1.50 m、検出幅1.14 m、深さ24cmを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は不明である。出土遺物は、石製品がある。

出土遺物　58～60は石製品。58は楔形石器。断面長方形の大型品。59は敲石。片面に使用痕が認められる。60は台石。平坦面に作業痕が認められる。

時期：埋土が不明で出土遺物も石製品のため、時期は特定できない。



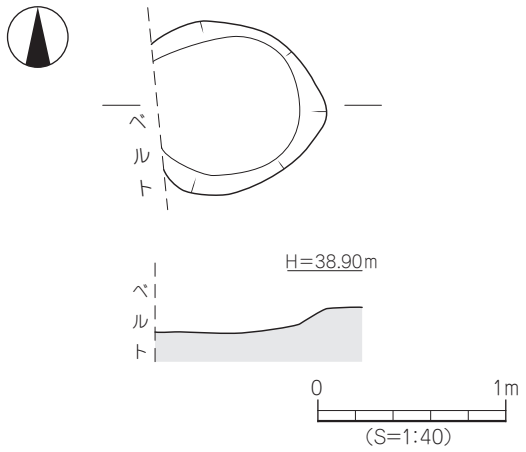


第30図　　SK22 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ２４（第 31 図）

SK24 は調査地北東部 C2・3 区に位置する。第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）上面で検出した。西側はベルトで未掘である。平面形態は円形で、規模は検出長 1.00 m、幅 1.00 m、深さ 12㎝を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は不明である。出土遺物には、石材があるが、実測可能な遺物はない。

時期：埋土が不明で出土遺物も石材のため時期は確定できないが、検出面から縄文時代の土坑の可能性が考えられる。

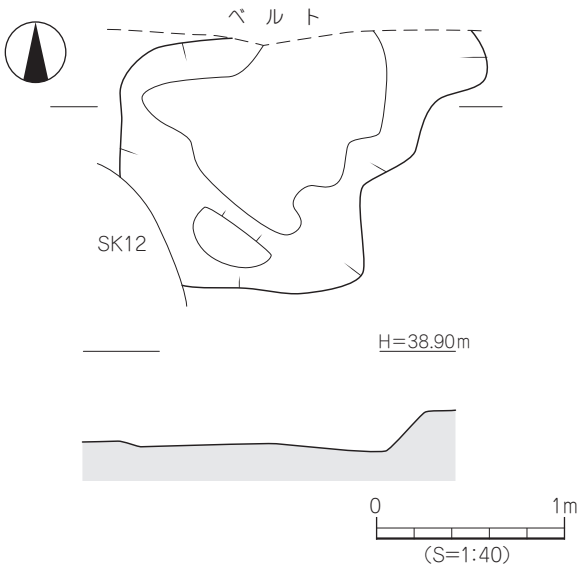


第 31 図　　SK24 測量図

ＳＫ３３（第 32 図）

SK33 は調査地南東部 C3・4 区に位置する。第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）上面で検出した。南西部は SK12 に切られ、北側はベルトにより未掘である。平面形態は不整形で、規模は長さ 1.88 m、検出幅 1.28 m、深さ 16㎝を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は不明である。出土遺物はない。

時期：埋土が不明で出土遺物もないため時期は確定できないが、検出面から縄文時代の土坑の可能性が考えられる。

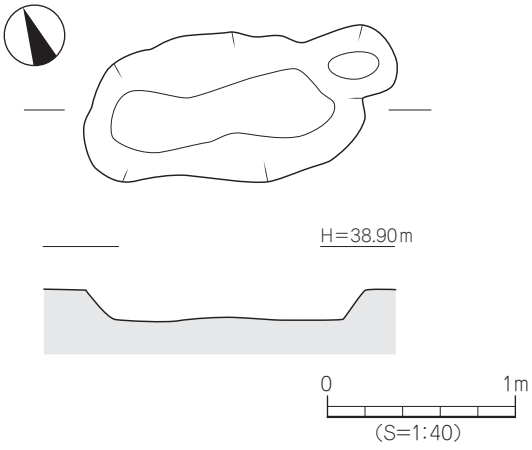


第 32 図　　SK33 測量図

ＳＫ３４（第 33 図）

SK34 は調査地南東部 B3・4 区に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長さ 1.70 m、幅 0.74 m、深さ 16㎝を測る。断面形態は逆台形状である。埋土は不明である。出土遺物はない。

時期：埋土が不明で出土遺物もないため、時期は特定できない。

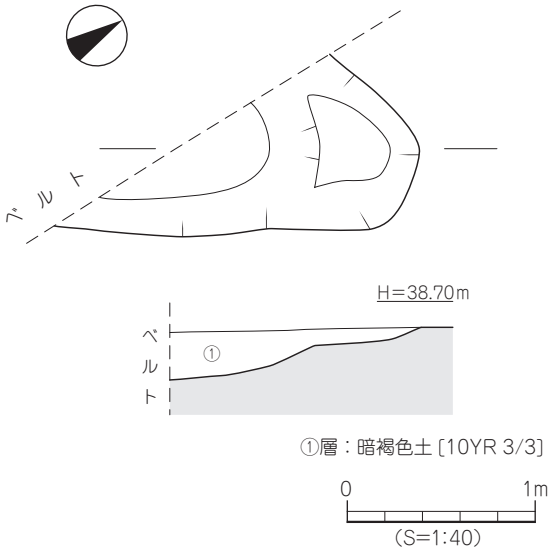


第 33 図　　SK34 測量図

ＳＫ３５（第 34 図）

SK35 は調査地北東部 C3 区に位置する。第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）上面で検出した。西側はベルトで未掘である。平面形態は楕円形で、規模は検出長 1.28 m、検出幅 0.98 m、深さ 10 ～ 28㎝を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は暗褐色土（10YR 3/3）である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がないため、埋土と検出面から、弥生時代の土坑の可能性が考えられる。

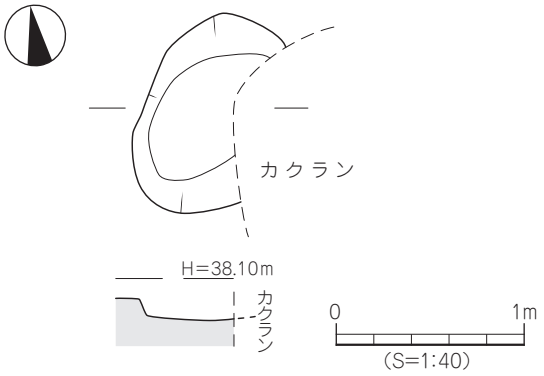


第 34 図　　SK35 測量図

ＳＫ３６（第 35 図）

SK36 は調査地南東部 D4 区に位置する。東側はカクランに切られる。平面形態は楕円形で、規模は長さ 1.12 m、幅 0.70 m、深さ 10㎝を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は不明である。出土遺物はない。

時期：埋土が不明で出土遺物もなく、時期は特定できない。

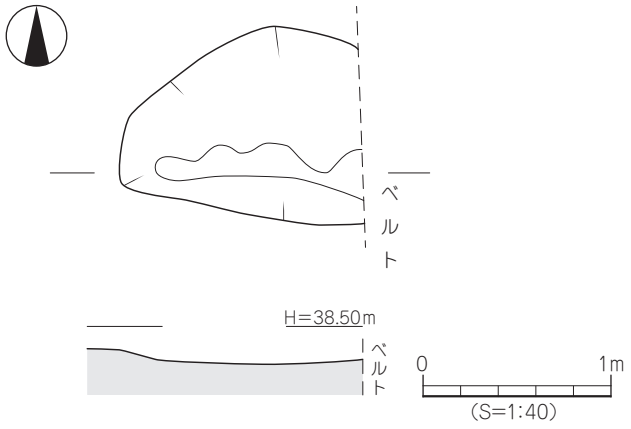


第 35 図　　SK36 測量図

ＳＫ３７（第 36 図）

SK37 は調査地南東部 B5 区に位置する。東側はベルトにより未掘である。平面形態は楕円形で、規模は検出長 1.30 m、幅 1.12 m、深さ 9㎝を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は不明である。出土遺物はない。

時期：埋土が不明で出土遺物もなく、時期は特定できない。



第 36 図　　SK37 測量図

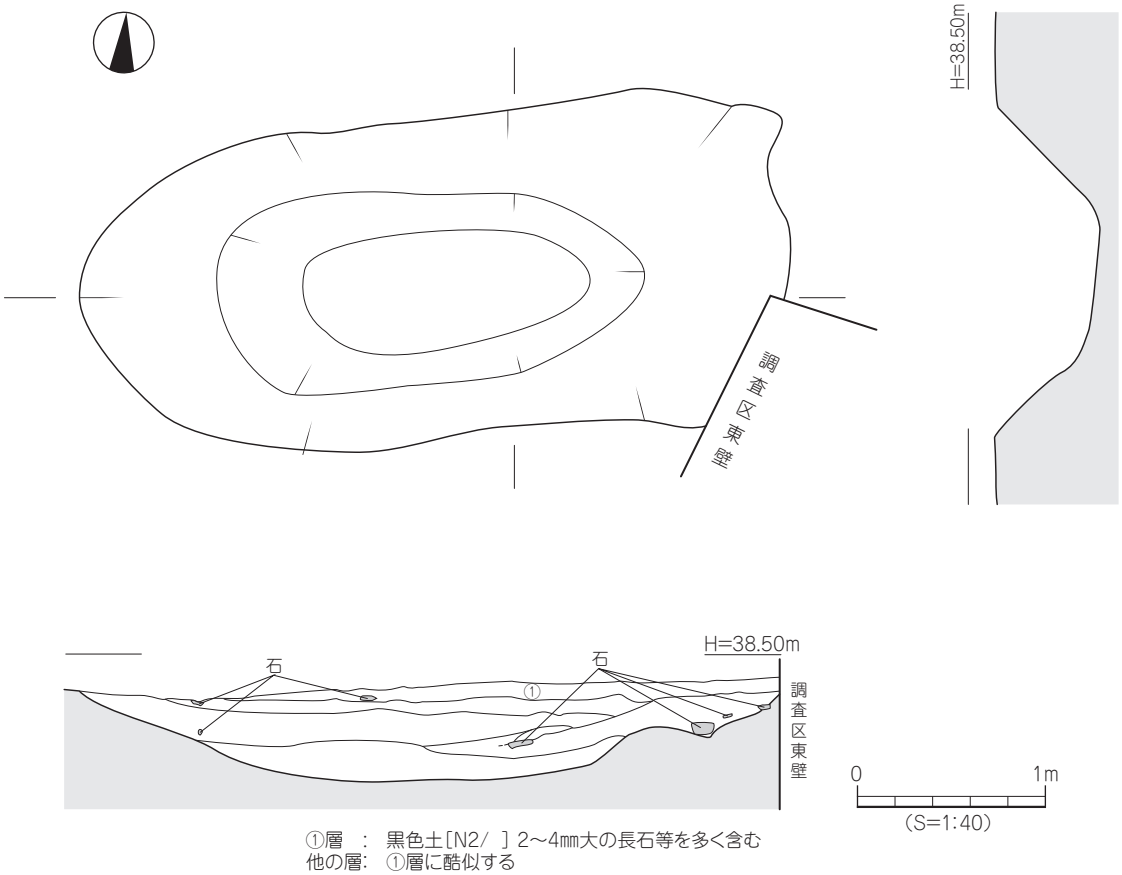
2　性格不明遺構

ＳＸ３（第 37・38 図、図版 4・5）

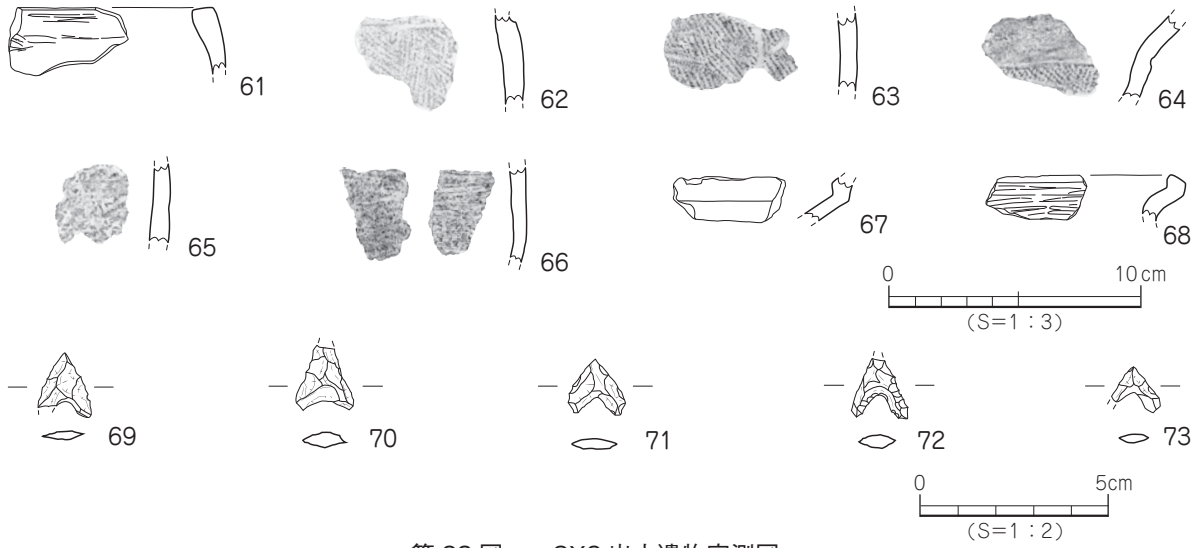
SX3 は調査地南東部 B5 ～ C5 区に位置し、第Ⅷ層黒褐色土（10YR 3/1）精査中には輪郭が認められず、調査区東壁の観察から第Ⅸ層黄橙色土（10YR 8/6）から掘られていることを確認した。南東部は調査区外に続く。平面形態は不整隅丸長方形で、規模は長さ 3.72 m、幅 1.70 m、深さ 50cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は 6 層に分層でき、①層が 2 ～ 4㎜大の長石等を多く含む黒色土（N2/ ）で、断面を削るとガチガチした質感がある。他の層もこれに酷似するが、わずかな色調等の違いで辛うじて分層できた。縦断面形態は二段掘り状を呈し、その高低差は 30cm 程度である。遺物は縄文土器の深鉢の胴部細片と浅鉢の口縁部細片、石器では花崗岩製の敲石、磨石と考えられる中小の礫、サヌカイト製の打製石鏃・楔形石器が出土している。遺構のほぼ南半分の埋土を水洗い選別した結果、サヌカイト、赤色珪質岩、姫島産黒曜石の各砕片（チップ）、焼けた獣骨砕片、3 ～ 5cm 大の礫片を数多く確認した。

出土遺物　61 ～ 66 は縄文土器の深鉢。61 は口縁部の小片。62･63 は胴部の小片。外面に縄文が残る。64 は外反口縁。縄文が残る。65・66 は胴部の小片。67・68 は浅鉢。67 は外反口縁の屈曲部。68 は屈曲する口縁部の小片。69 ～ 73 は石鏃。69 ～ 71 の石材はサヌカイト。

時期：検出面及び出土遺物の特徴より、縄文時代後期中葉とする。



第 37 図　　SX3 測量図



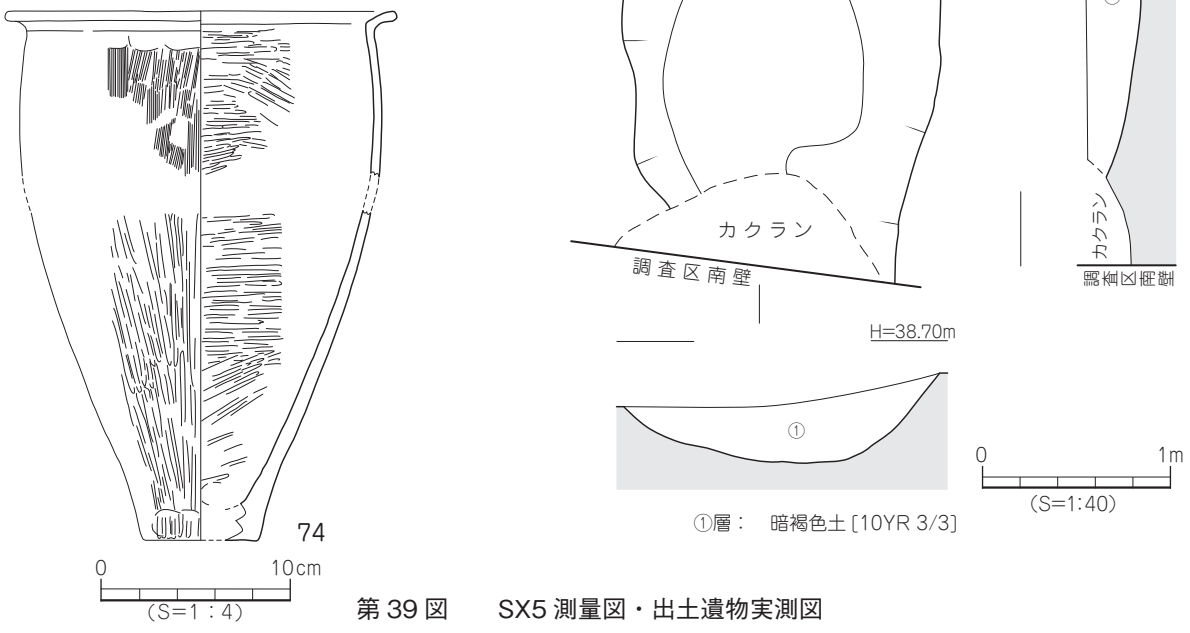
第 38 図　　SX3 出土遺物実測図

ＳＸ５（第 39 図）

SX5 は調査地南東部 B5 区に位置し、第Ⅶ層暗褐色土（10YR 3/3）上面で検出した。南側はカクランに切られる。平面形態は隅丸方形で、規模は検出長 3.00 m、幅 1.70 m、深さ 35cm を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は 2 ～ 4㎜大の長石等を多く含む暗褐色土（10YR 3/3）である。出土遺物には、弥生土器がある。

出土遺物　74 は弥生土器の甕形土器。口縁部は短く折り曲げ、底部は平底である。

時期：検出面と出土遺物の形態から、弥生時代中期中葉の遺構とする。祭祀土坑の可能性が考えられるか？

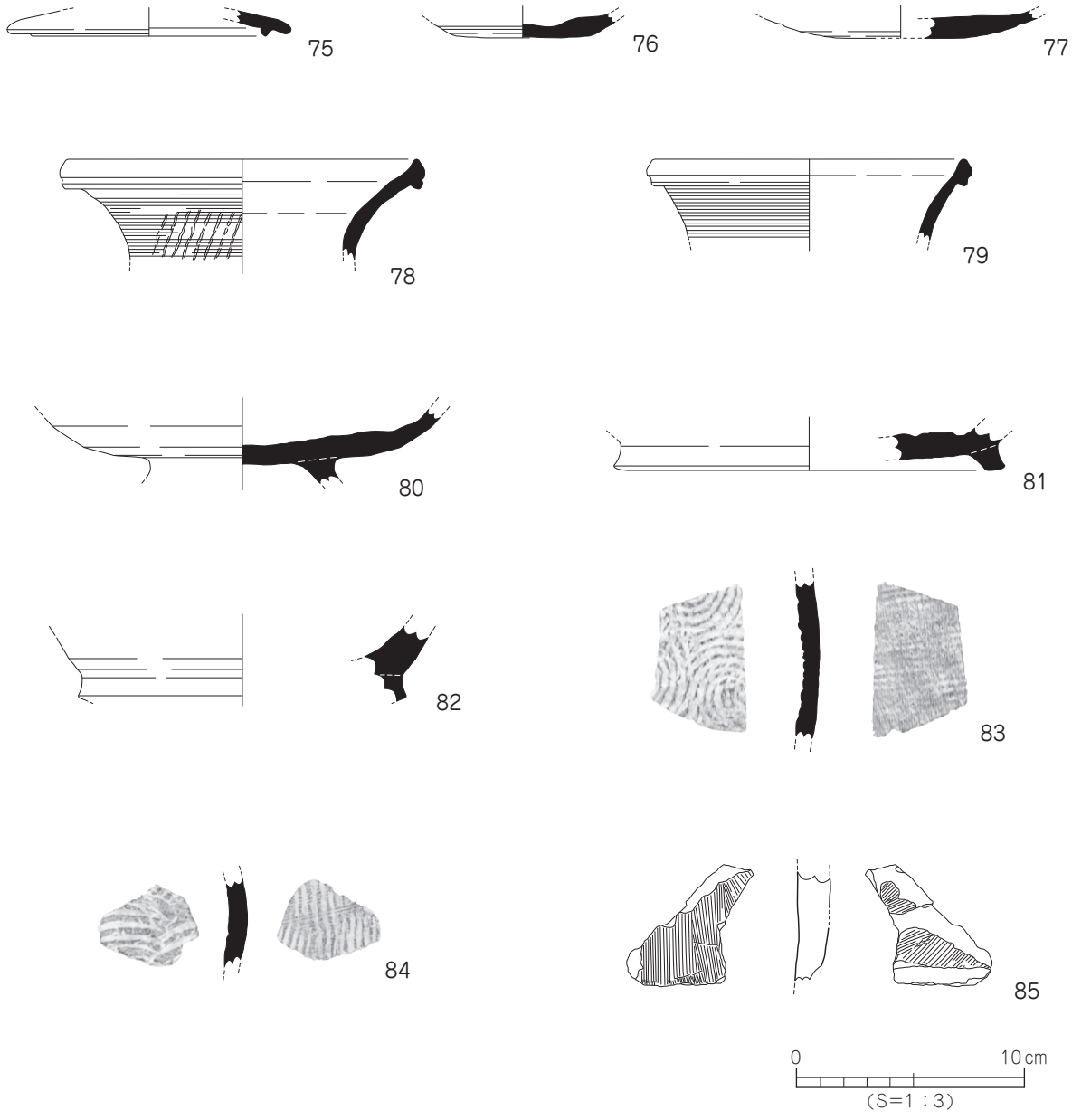


第 39 図　　SX5 測量図・出土遺物実測図

3．その他の出土遺物

（1）第Ⅶ層出土遺物（第 40 図、図版 7）

75 ～ 84 は須恵器。75 は坏蓋で、かえりは口縁端部より下がり、かえり端部は尖る。7 世紀後半。76・77 は坏身。底部片で、外面には回転ヘラケズリ調整がみられる。6 世紀。78・79 は広口壺。口縁部下に沈線状の凹みが巡り、78 の頸部外面には平行叩き後、回転カキメ調整がみられる。5 世紀後半～ 6 世紀前半。80 ～ 82 は脚付壺。81・82 は高台状の脚部をもち、81 の底部外面には回転ヘラケズリ調整がみられる。80 は 7 世紀、81・82 は 8 世紀。83・84 は甕の胴部片。外面には平行叩き、内面には同心円、円弧叩きがみられる。7 ～ 8 世紀。85 は土師質の円筒埴輪。柱部片で、円孔を看取する。6 世紀。



第 40 図　　第Ⅶ層出土遺物実測図

（2）第Ⅷ層（上層）出土遺物（第 41 ～ 45 図、図版 7 ～ 11）

縄文土器（86 ～ 115）

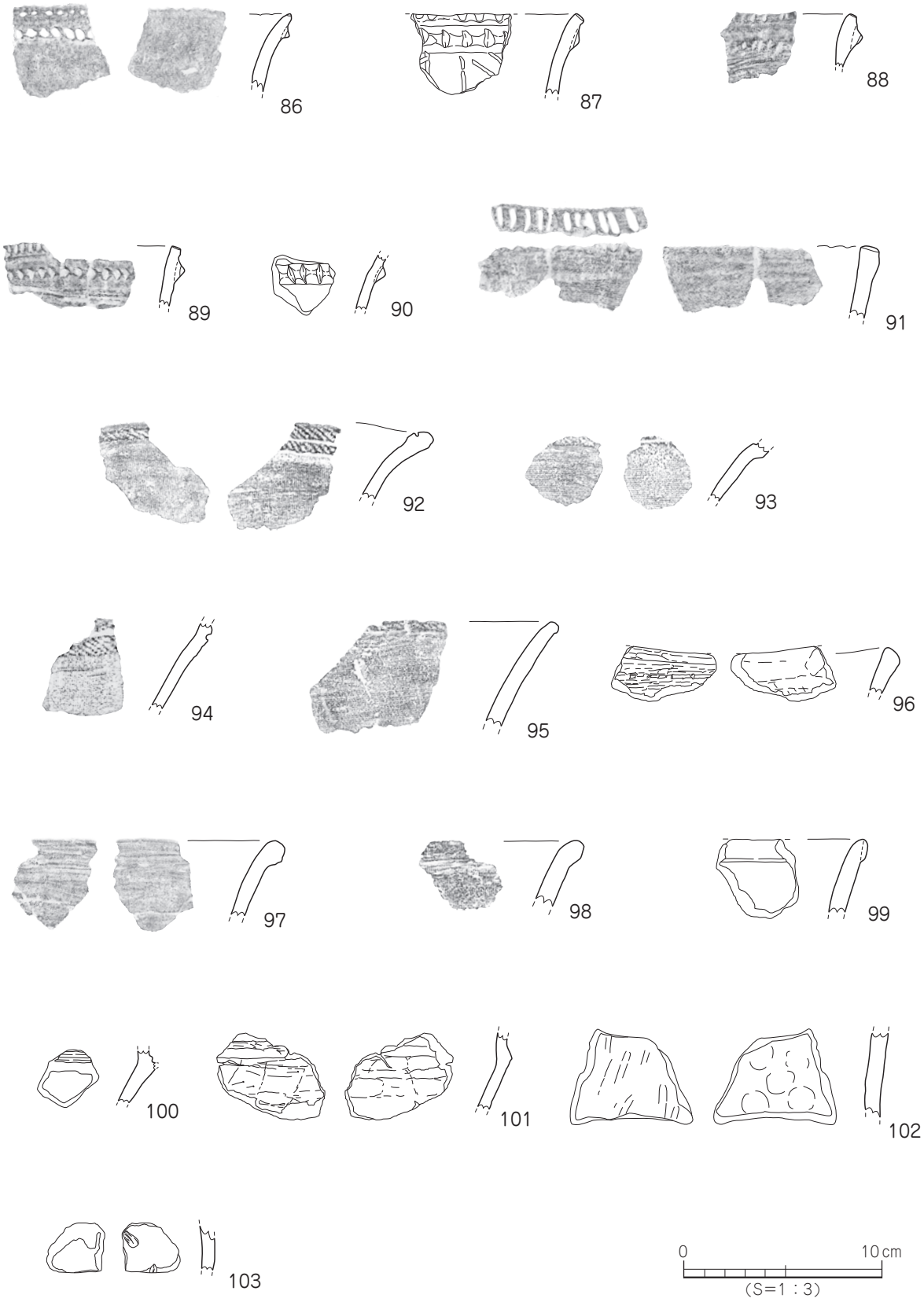
86 ～ 90 は突帯文を有する縄文時代晩期の深鉢。86 の口縁端部は丸く、87・88 は平坦面をなし、口唇部に刻目を施す。91 ～ 103 は縄文時代後・晩期の深鉢。91 は口縁部が僅かに肥厚し、口唇部に太目の刻目を施す。なお、91 の胎土中には石英や長石のほかに角閃石が少量含まれている。92 は口縁部が外反し、口縁部内外面には磨消縄文、内面には沈線 1 条が巡る。93 の内面には、沈線 1 条がみられる。92・93 の内外面には丁寧なヘラミガキを施す。94 の外面には、沈線 1 条と磨消縄文がみられる。95 ～ 99 は無文土器。97 ～ 99 の口縁部は僅かに肥厚し、97 の内外面には条痕が残る。100 ～ 103 は胴部片。100 の外面には沈線 1 条がみられ、103 は籾圧痕が 2 ヶ所看取される。104 ～ 106 は縄文時代後期の浅鉢。104 の口縁部は内方へ肥厚し、外面には条痕がみられる。105 は口縁部を上方に肥厚し、口縁端面に沈線 2 条と沈線間に磨消縄文を施す。106 は突帯を貼り付け、突帯上と口唇部に刻目を施す。107 ～ 114 は深鉢、115 は浅鉢の底部。107 ～ 113 は凹み底で、底端部から内側へ強いナデにより底部を凹めている。114・115 は平底で、114 の外面にはヘラミガキ調整がみられる。

弥生土器（116 ～ 120）

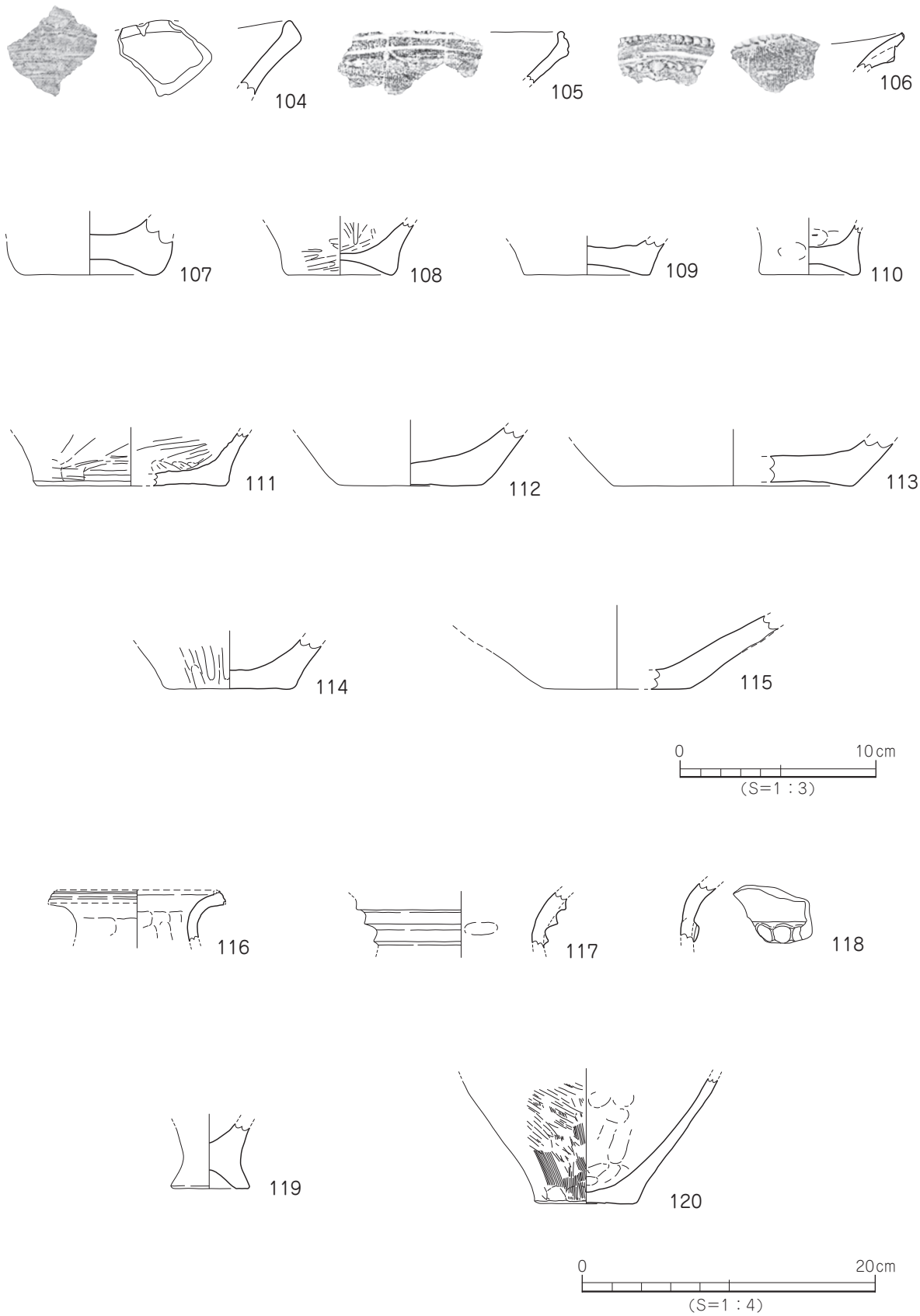
116 ～ 118 は壺形土器。116 は口縁部外面に凹線文 2 条を施し、117 は断面三角形状の突帯を 3 条貼り付ける。118 は突帯を貼り付け、突帯上に刻目を施す。119･120 は甕形土器の底部。119 は上げ底、120 は僅かに上げ底をなす。116・119・120 は弥生時代中期後半、117・118 は弥生時代中期中葉。

石器（121 ～ 161）

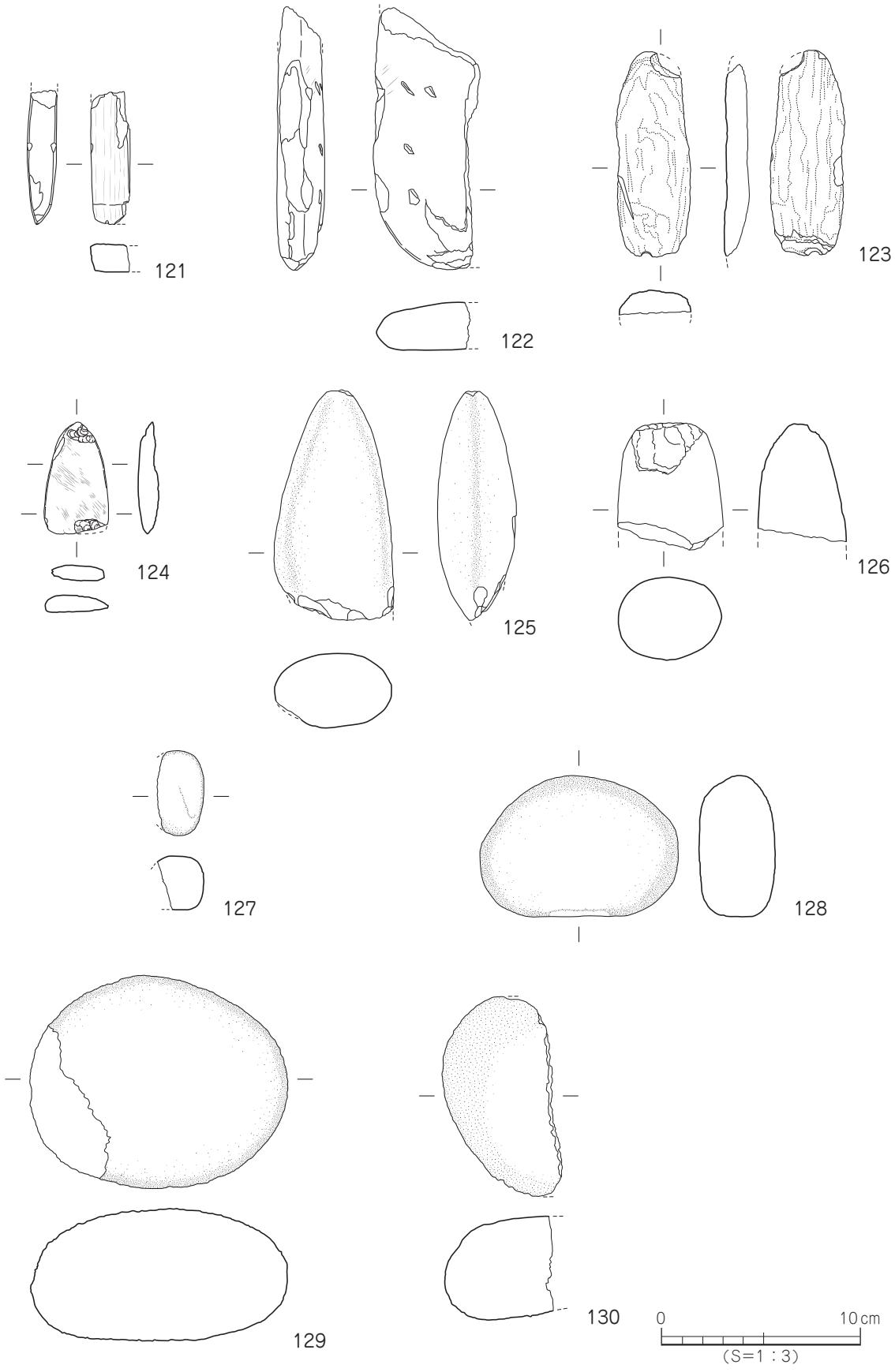
121 ～ 124 は加工斧。121 はノミ形石斧で、鏑はあまく、側面は僅かに膨らみをもつ（緑色片岩製）。122・123 は扁平片刃石斧で、122 の刃部には使用痕が残る（緑色片岩製）。123 は 1/2 の残存で、鏑は曖昧である（結晶片岩製）。124 は縄文系の加工斧で、頭部が狭く、刃部がやや広い作りとなっている。表面は自然面の丸みを保ち、裏面には剝離面の凹凸が残る（蛇紋岩製）。125・126 は伐採斧。125 は表面の風化が著しく、刃部には使用痕が残る（花崗岩製）。126 は全面に丁寧な研磨が認められる（火成岩製）。127 ～ 129 は磨石。127 は小型品で、片面のみを擦面として使用している（硬質の砂岩製）。128・129 は長軸の片面のみを機能面とし、使用石材は 128 が砂岩、129 は花崗岩である。130 は台石と思われ、右半部は欠損している（花崗岩製）。131 ～ 133 は敲石。131・132 は大型品で、131 は右寄りの部分に堅調な使用痕を残し、132 は下端部のみを使用している（花崗岩製）。133 は完存品で、断面形態は三角形状をなす（花崗岩製）。134・135 は砂岩製の石錘。134 は自然礫をそのまま使用し、縁辺には整形の痕跡はない。ただし、長軸方向の上下端には紐掛け用の抉りが両面からの剝離により作り出されている。135 は 134 と同様、礫の形をそのまま生かしており、整形の痕跡はない。なお、表面の風化が著しい。136 は緑色片岩製の石庖丁で、打製段階の未成品である。137・138 はサヌカイト製の凹基無頸式石鏃で、137 の裏面には広く初剝離面が残る。139 は楔形石器と思われる。140・141 はスクレイパーで、141 は片面の上半部に自然面を残す。142 ～ 150 は剝片。142 は石材の目に沿って、自然面が層をなしている。143 は分厚い剝片もしくは残核で、両端には新しい折れが顕著に残る。146 は縦長剝片で、右側面に自然面を残す。151 ～ 153 は砕片。154 ～ 158 は軽石。154 は表面の風化が著しく、156 は裏面の断面には気泡の穴が多数認められる。色調は 154 ～ 157 は赤橙色、158 は灰色である。159 ～ 161 は礫石器。159 は使用痕や加工痕は認められない（砂岩製）。160 は自然面を広く残し、161 は裏面と下端面に広く自然面が残る。



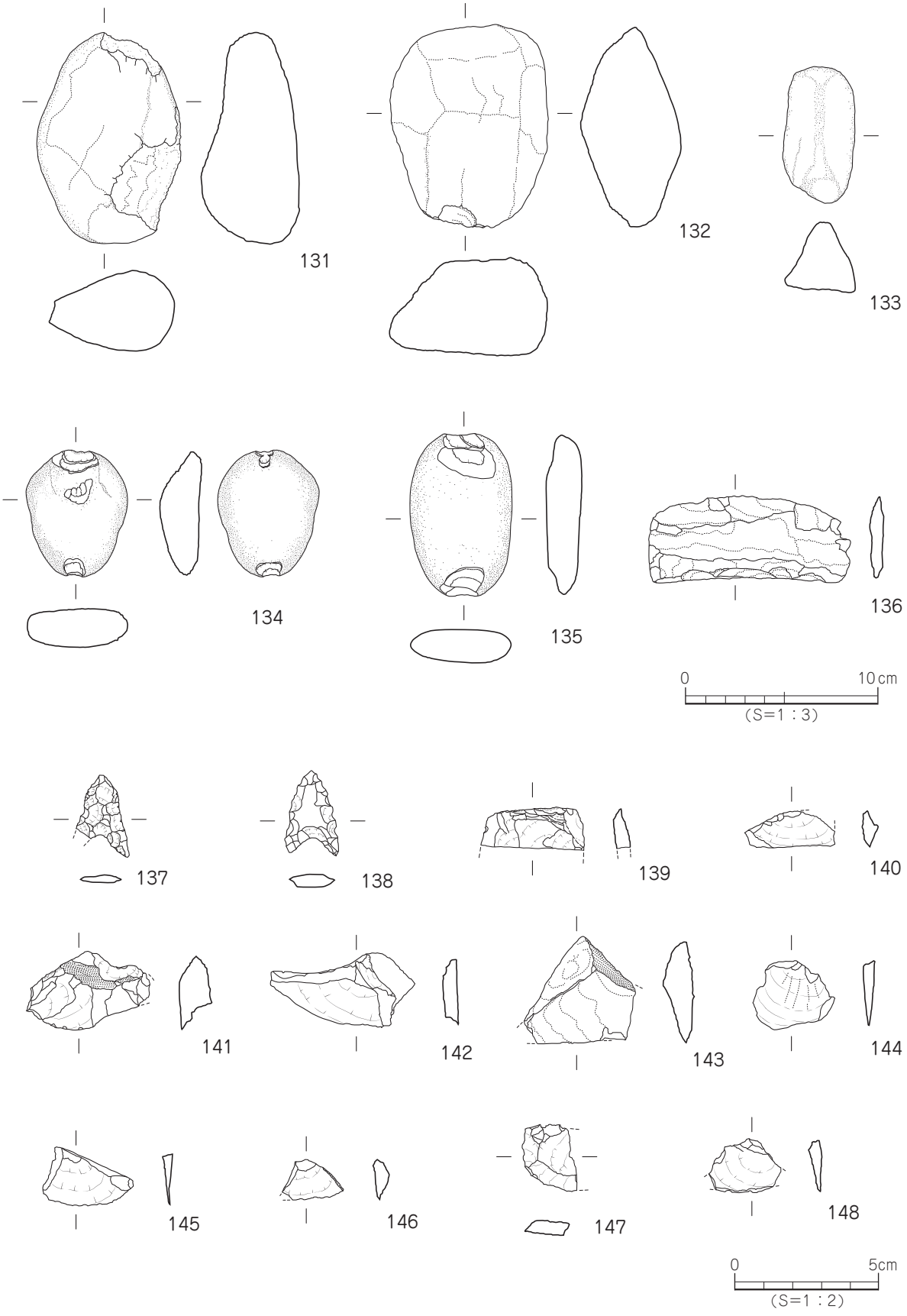
第 41 図　　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（１）



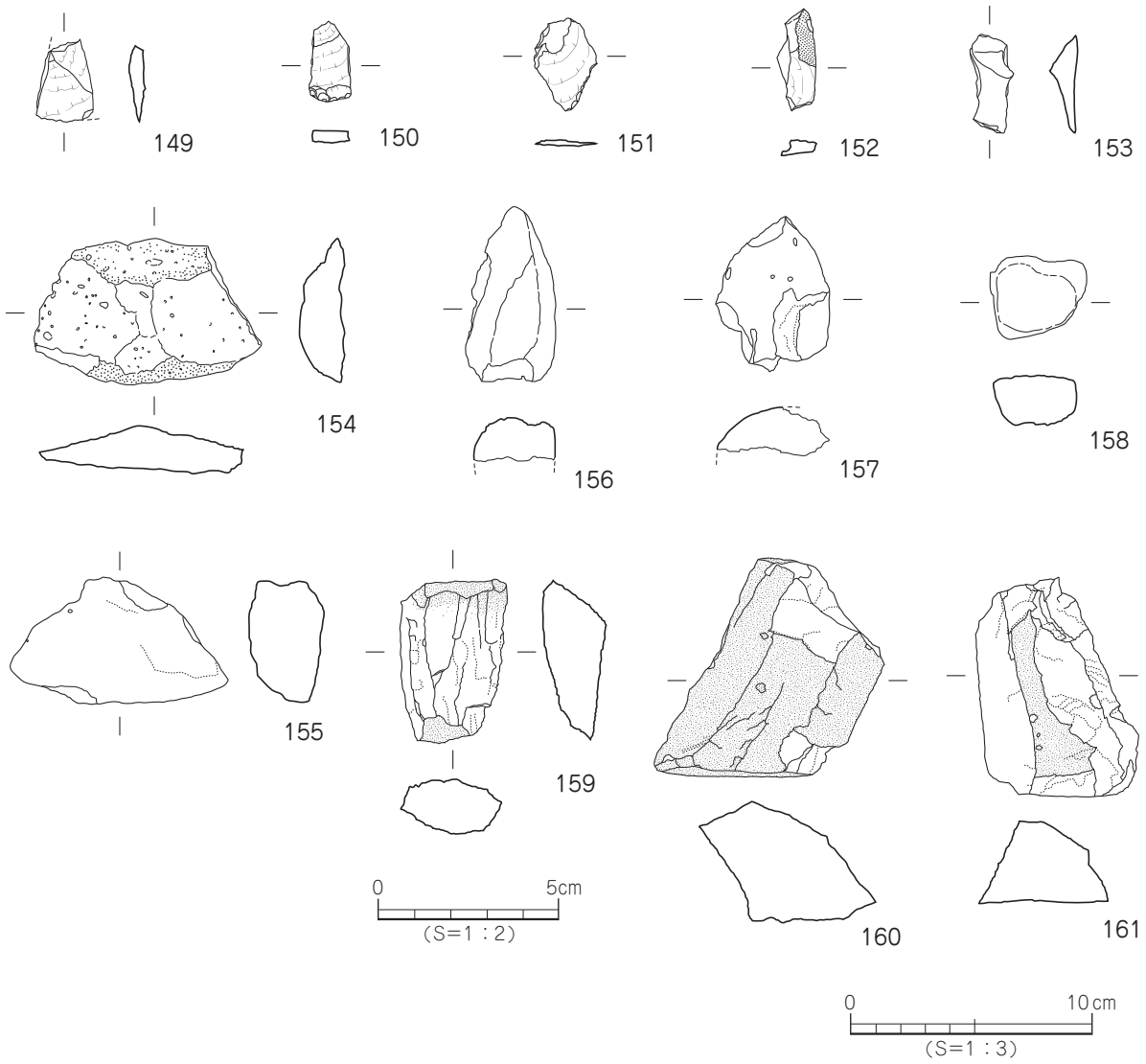
第 42 図　　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（2）



第 43 図　　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（3）



第 44 図　　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（４）



第 45 図　　第Ⅷ層（上層）出土遺物実測図（５）

（３）第Ⅷ層（下層）出土遺物（第 46 ～ 51 図、図版 12 ～ 18）

縄文土器（162 ～ 210）

162 ～ 166 は有文の深鉢。162 は口縁部を拡張し、口唇部に刻目、口縁部外面には多重の方形文が描かれている。163 の口縁部外面には磨消縄文、164 は口縁部内面に沈線 1 条、内外面に磨消縄文を施す。165 は口唇部に磨消縄文、口縁部外面には沈線 1 条と縄文を施す。166 は耳状の突起を口縁部に貼り付け、口縁部外面に磨消縄文を施す。なお、内面には貝殻腹縁による条痕がみられる。167 ～ 172 は無文土器。167・168・170 ～ 172 の外面、及び 168・170 の内面には条痕がみられ、167・171 の内面にはヘラミガキ調整が残る。173 ～ 199 は胴部片。173 の外面には渦巻き状の沈線と磨消縄文を施す。174 の胴部上端部には縄文がみられ、175 の外面には沈線 1 条と縄文を施す。177・179 は外面に縄文、178 の外面には沈線 1 条と縄文を施す。なお、175・176・179 の内外面にはヨコ方向の条痕が顕著に残る。180 は縄文と沈線による三角文が描かれている。181・182 は沈線と縄文が施され、

181 の内外面にはミガキ調整がみられる。183・185 は外面に縄文、184・186 の外面には沈線を施す。187 ～ 189 は外面に沈線と縄文が施され、190 にはタテ方向の沈線 2 条を施す。191 ～ 193 の外面には縄文がみられ、194 の内外面には二枚貝の腹縁による貝殻条痕が顕著に残る。また、195・197 の内外面と 196 の内面及び 198 の外面には条痕がみられる。

200 ～ 203 は浅鉢。200 の口縁部内面には、沈線 1 条と磨消縄文を施す。201 は無文で、内外面にはヘラミガキ調整がみられる。202 は波状口縁、203 は口縁部を上方に拡張する。

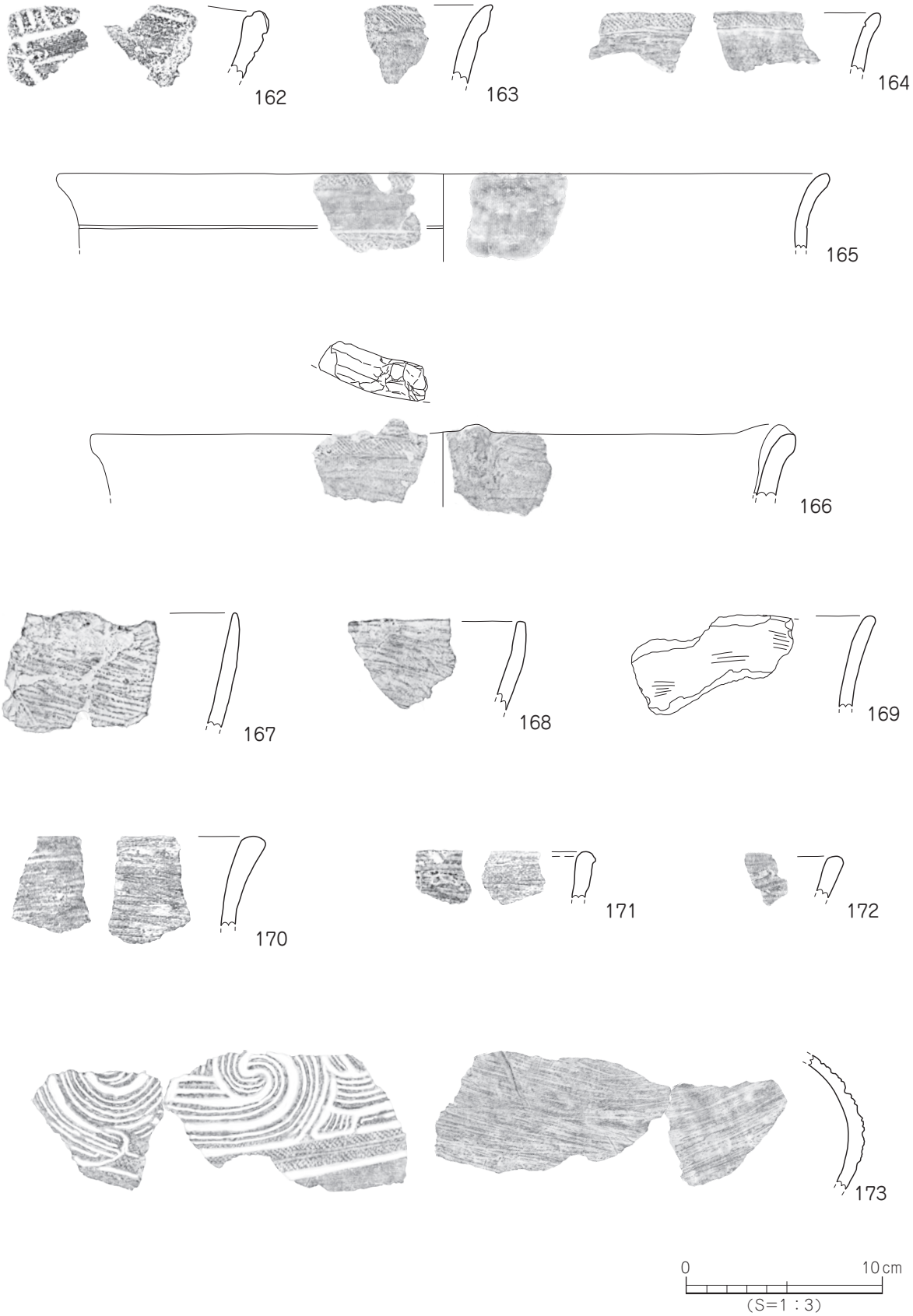
204 ～ 209 は深鉢、210 は浅鉢の底部。204 ～ 206 は凹み底、207 は僅かに凹む底部である。208 は高台状の底部で、外底の周囲に粘土帯を巡らせて高台状に作り上げている。209 は平底、210 は僅かに上げ底をなす。

弥生土器（211 ～ 214）

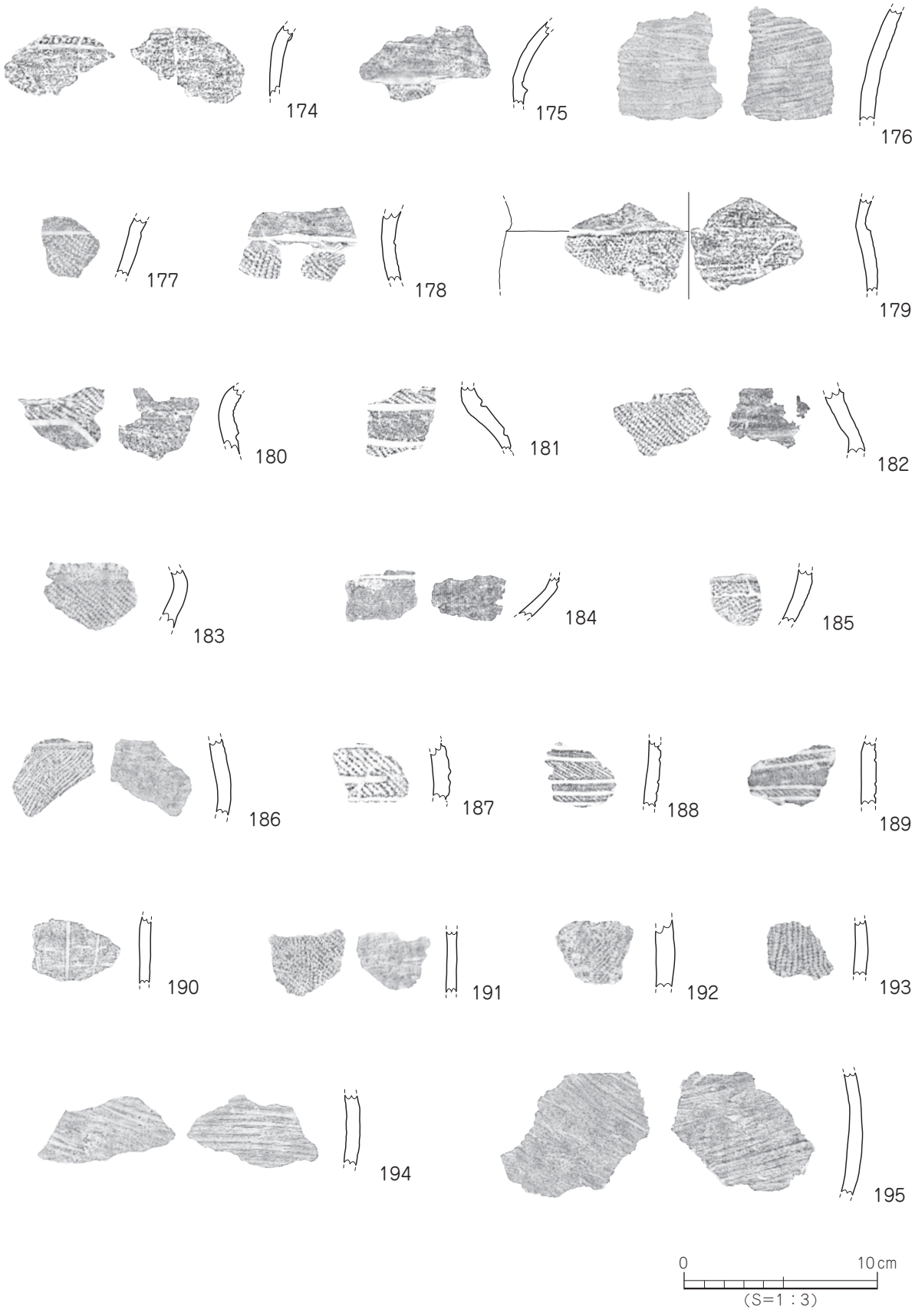
211・212 は壺形土器。211 は広口壺で、口縁端部は下方へ垂下する。頸部外面及び内面には、ヨコ方向の丁寧なヘラミガキを施す。212 は無頸壺で、口縁部にヘラ描き沈線文と刺突文 3 列、径 0.4cm 大の円孔を 2 ヶ所に穿つ。内外面共に、ヘラミガキ調整がみられる。213・214 は甕形土器で、僅かに上げ底をなす。外面には、タテ方向のヘラミガキ調整がみられる。

石器（215 ～ 259）

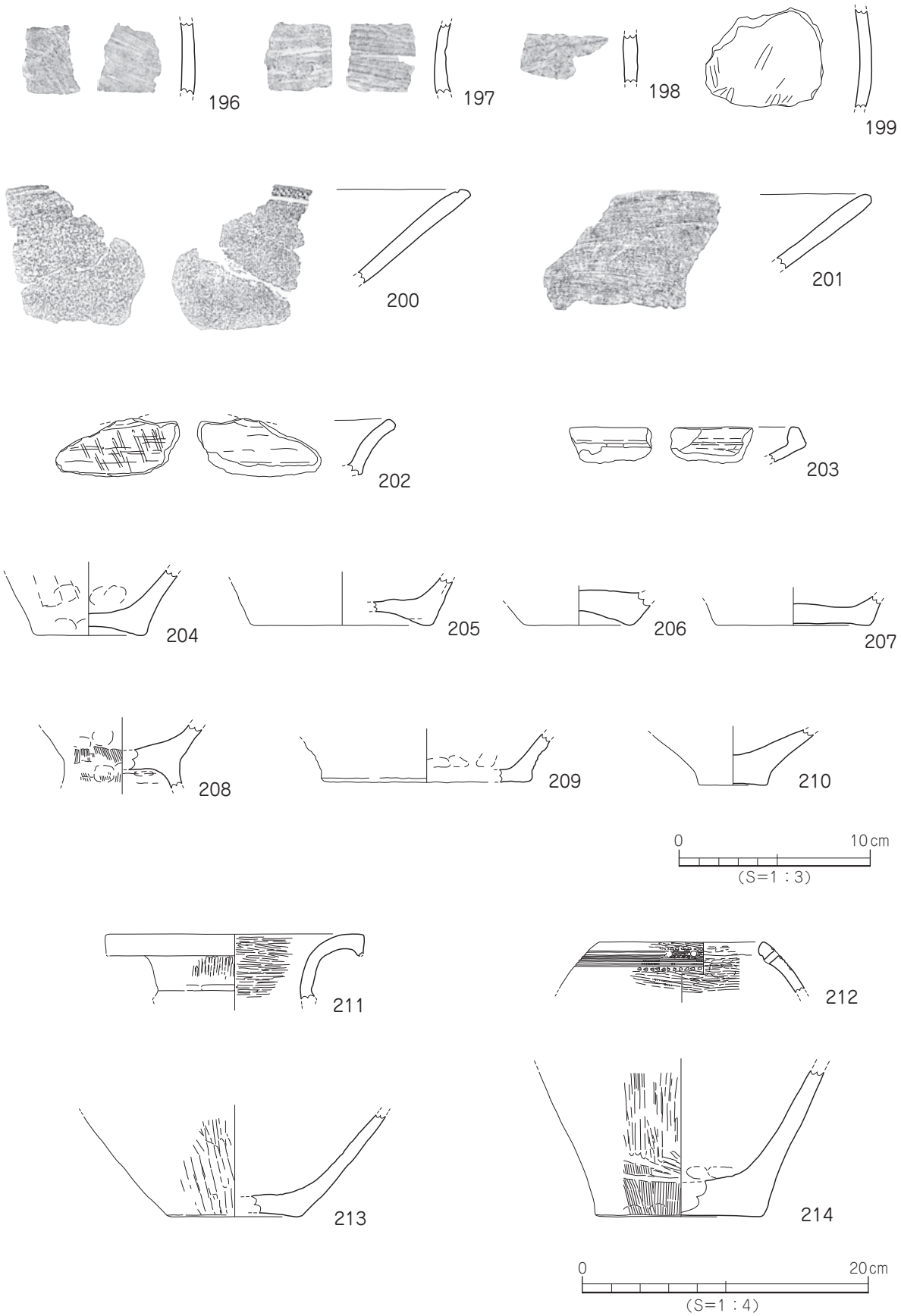
215 は扁平片刃石斧を意図した剝片で、両側縁や上端面には自然面が残ることから、分厚い自然礫が素材であると推測される（緑泥片岩製）。216 は自然の棒状礫を無加工で使用した石棒片と思われる（緑色片岩製）。217 ～ 222 は磨石。石材は全て砂岩で、217 は拳大の河原礫を素材とし、短軸下端のみ機能面として使用している。218 は短軸下端面を中心に擦った痕跡が顕著に認められる。219・220 は下端面、221 は短軸の下端面のみを利用している。222 は自然礫をそのまま利用したもので、下面のみを機能面としている。223 は凹石で、拳大の自然礫の片面中央部に使用痕を残す（砂岩製）。224・225 は敲石で、224 は下端部の一部が使用により 2 ～ 3㎜程度剝落している。225 は明確な使用痕は認められないものの、敲石の可能性がある石材である（花崗岩製）。226 は棒状のハンマーで、下半部が擦り部と思われる（緑色片岩製）。227・228 は砥石。227 は大型品で、片面のみを使用している。228 は表面の中央部に使用痕とみられる線状痕があり、小型の石器を対象とした研磨行為がなされたものと思われる（砂岩製）。229 は石錘で、自然礫を素材とし、長軸両端を打ち欠いて紐掛けを作成している（結晶片岩製）。230 ～ 232 は石庖丁。230 はサヌカイト製で、弧背直刃形に類似する。刃付けは片面側からであり、一部に刃こぼれが認められる。231・232 は打製段階の未成品で、231 の表面 1/2 と裏面は剝離面となり、232 は側面に礫面を残す（緑色片岩製）。233 はサヌカイト製の打製凹基無茎式石鏃で、細部の調整はほぼ全面に施され、初剝離面は残存しない。234 はサヌカイト製の楔形石器で、縦長剝片を素材とする。235 ～ 238 はスクレイパー、239 ～ 242 は剝片である。235・236 は分厚い横長剝片を素材とし、239 は背部に礫面を留める。241 は原石の表皮部分で、中央部に凹凸がみられる。242 は縦長剝片を素材とし、上下に使用痕が認められる。243 ～ 247 は砕片。243 は扁平礫の表皮部分で、表面の風化が著しい。244 は四角形状の原石から剝片を採取するための打割で生じたもの、245 は石核から板状剝片を獲得する際に生じたものである。247 はスパール状の砕片で、自然面が部分的に残る。248 ～ 250 は器種不明品。248・249 は軽石で、色調は 248 が灰色、249 は赤橙色をなす。250 は石英の原石で、片面全面に自然面を留めている。251 ～ 259 は礫石器。石材は 251・252・254・259 が花崗岩、その他は硬質の砂岩である。



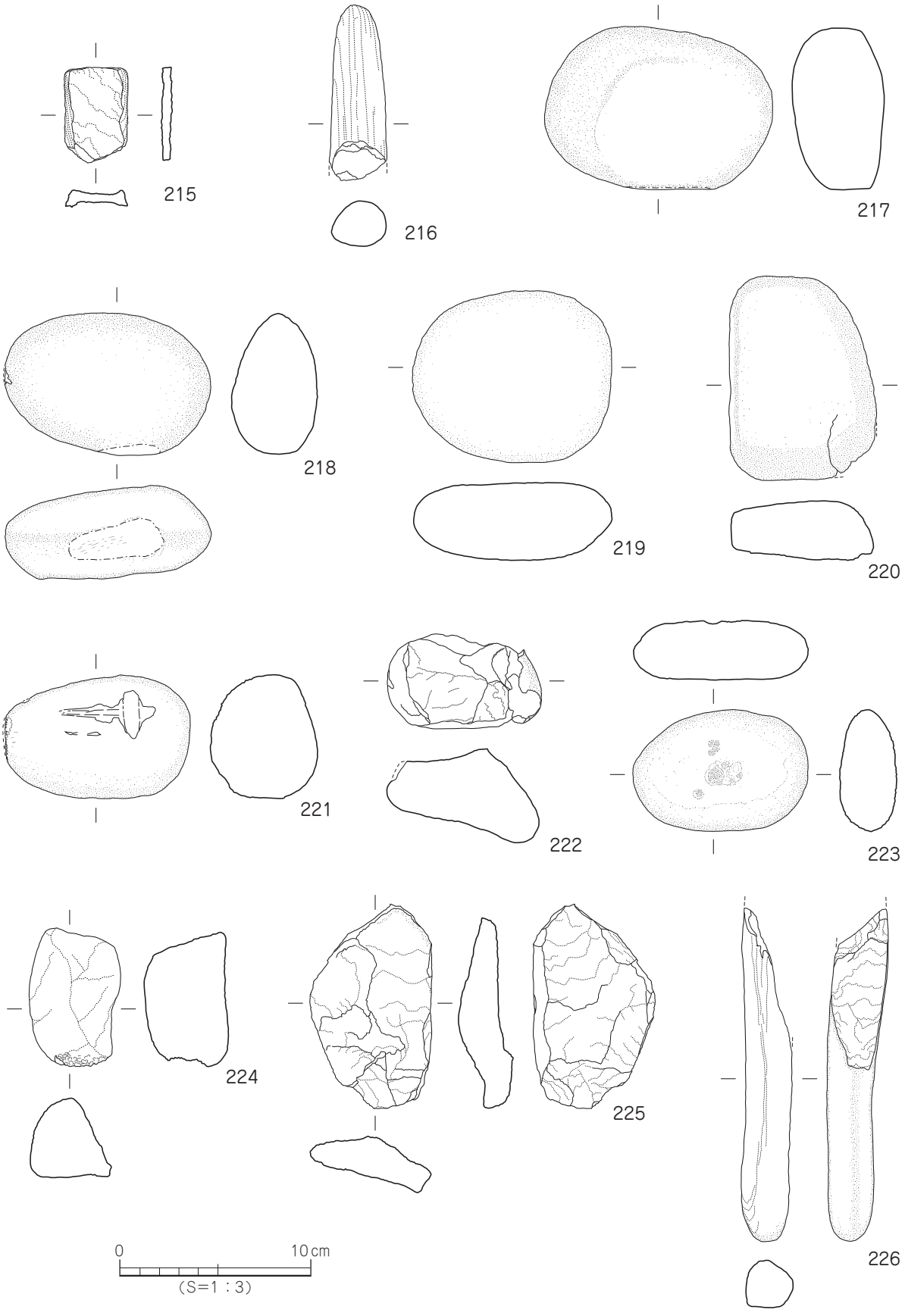
第 46 図　　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（１）



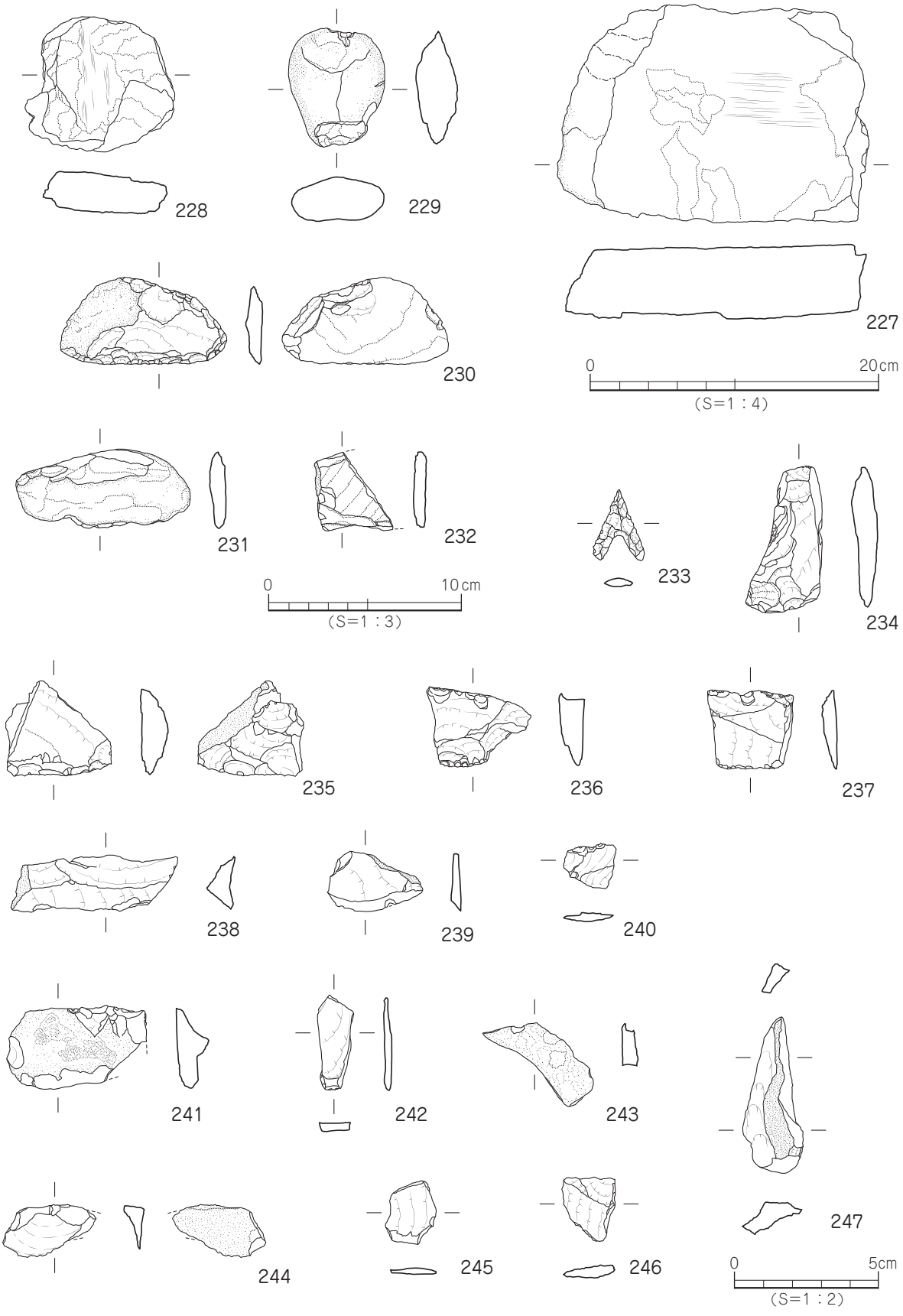
第 47 図　　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（２）



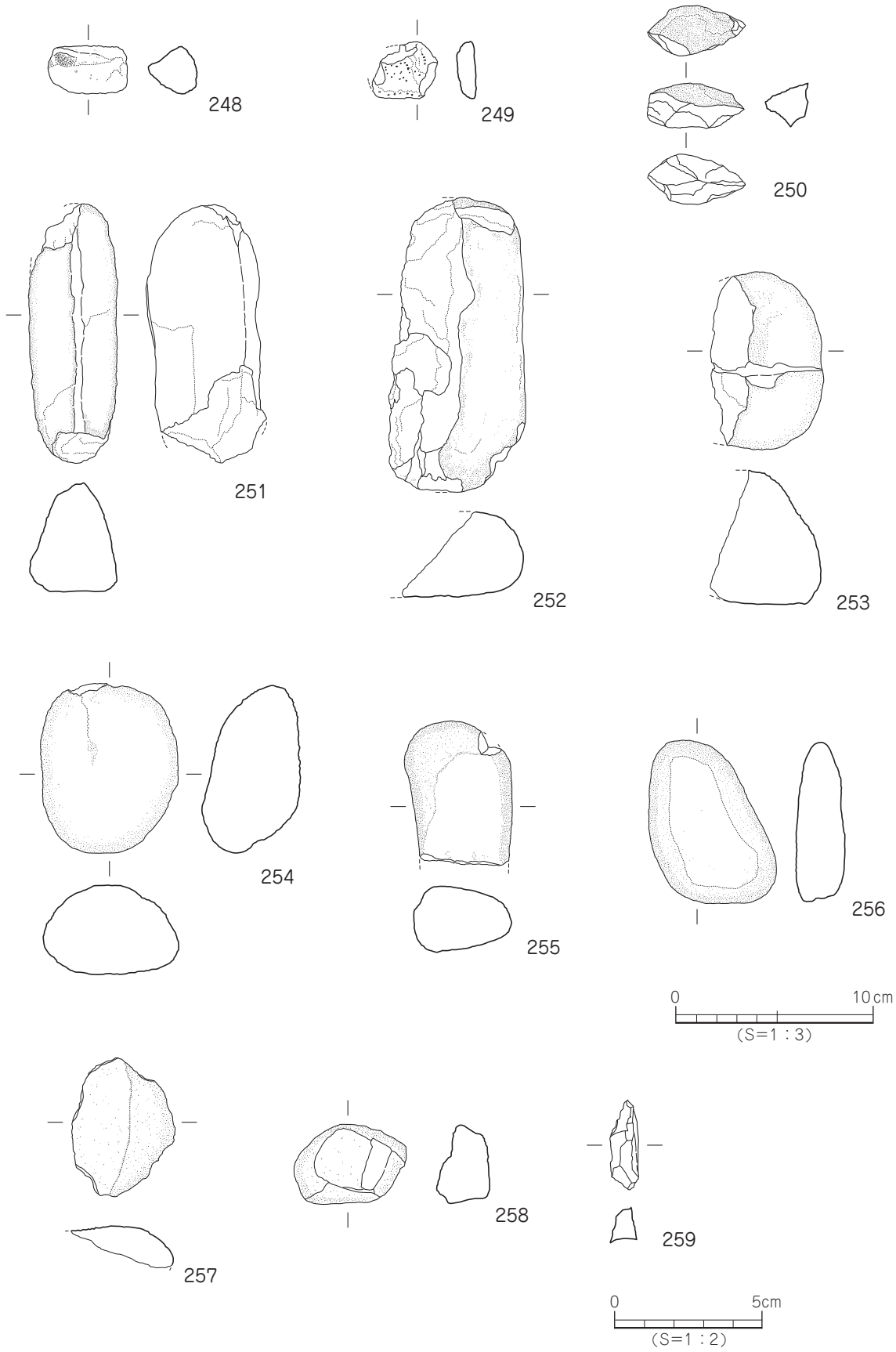
第 48 図　　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（3）



第 49 図　　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（4）



第 50 図　　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（5）



第 51 図　　第Ⅷ層（下層）出土遺物実測図（6）

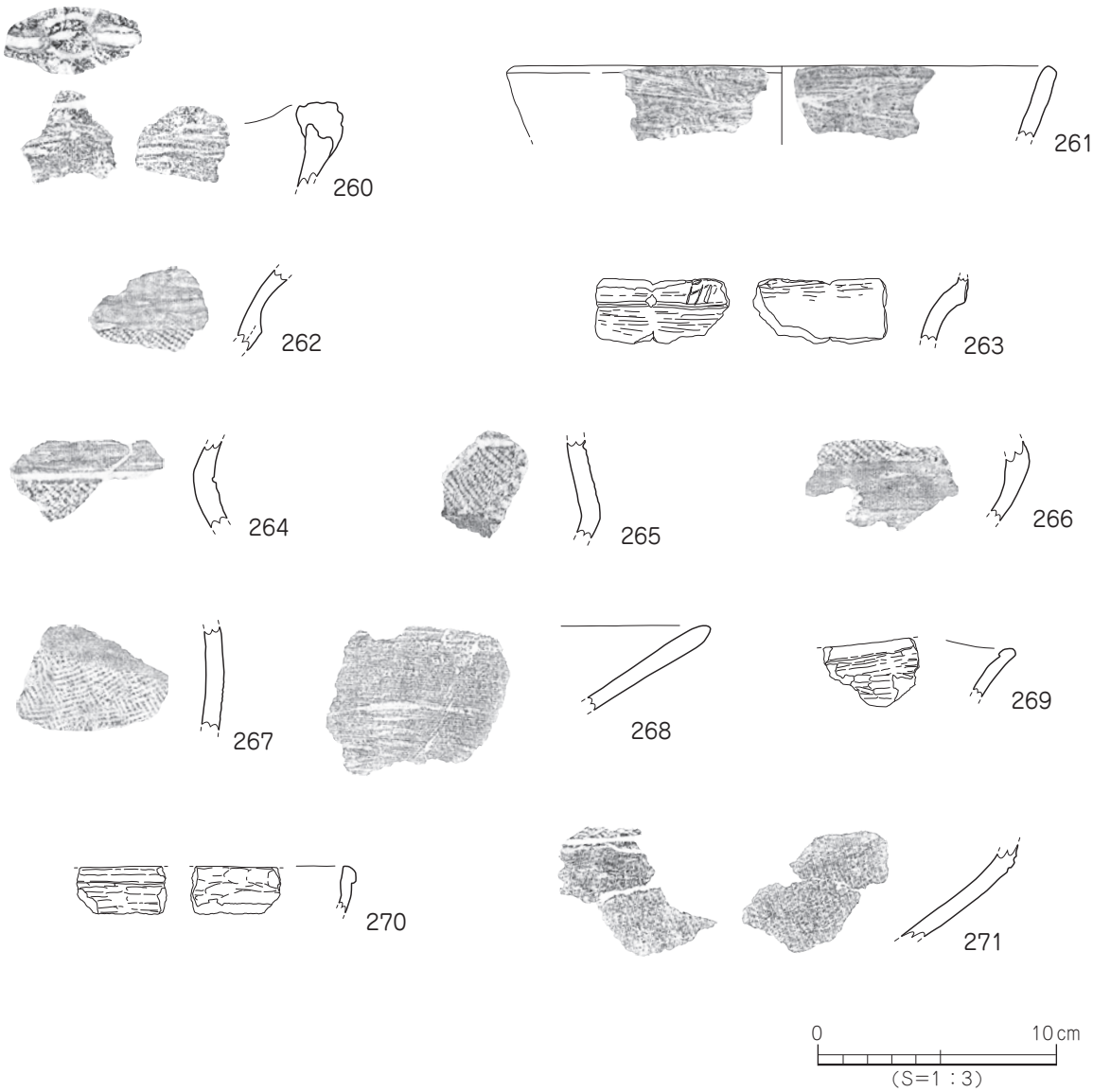
（4）ベルト・トレンチ出土遺物（第 52・53 図、図版 18・19）

縄文土器（260 ～ 271）

260 ～ 267 は深鉢。260 は波状口縁で、口縁部に瘤状の突起を貼り付け、突起上及び波頂部に沈線が巡る。261 は無文土器、262 は外面に縄文、263 は沈線 1 条を施す。なお、260・261 の内外面には条痕、262 にはミガキ調整がみられる。264・265 は沈線と縄文、266・267 の外面には縄文を施す。268 ～ 271 は浅鉢。269 は波状口縁で、口縁部内面に沈線 1 条が巡る。271 の外面には、沈線と縄文を施す。

弥生土器（272 ～ 278）

272・273 は甕形土器。272 は逆「L」字状口縁で、胴部に突帯を貼り付ける。弥生時代中期中葉。273 は口縁部が短く外反し、底部は僅かに上げ底をなす。胴部及び底部外面はヘラケズリ、内面にはヘラミガキ調整がみられる。弥生時代前期末～中期初頭。274・275 は広口壺。274 の口縁部内面には

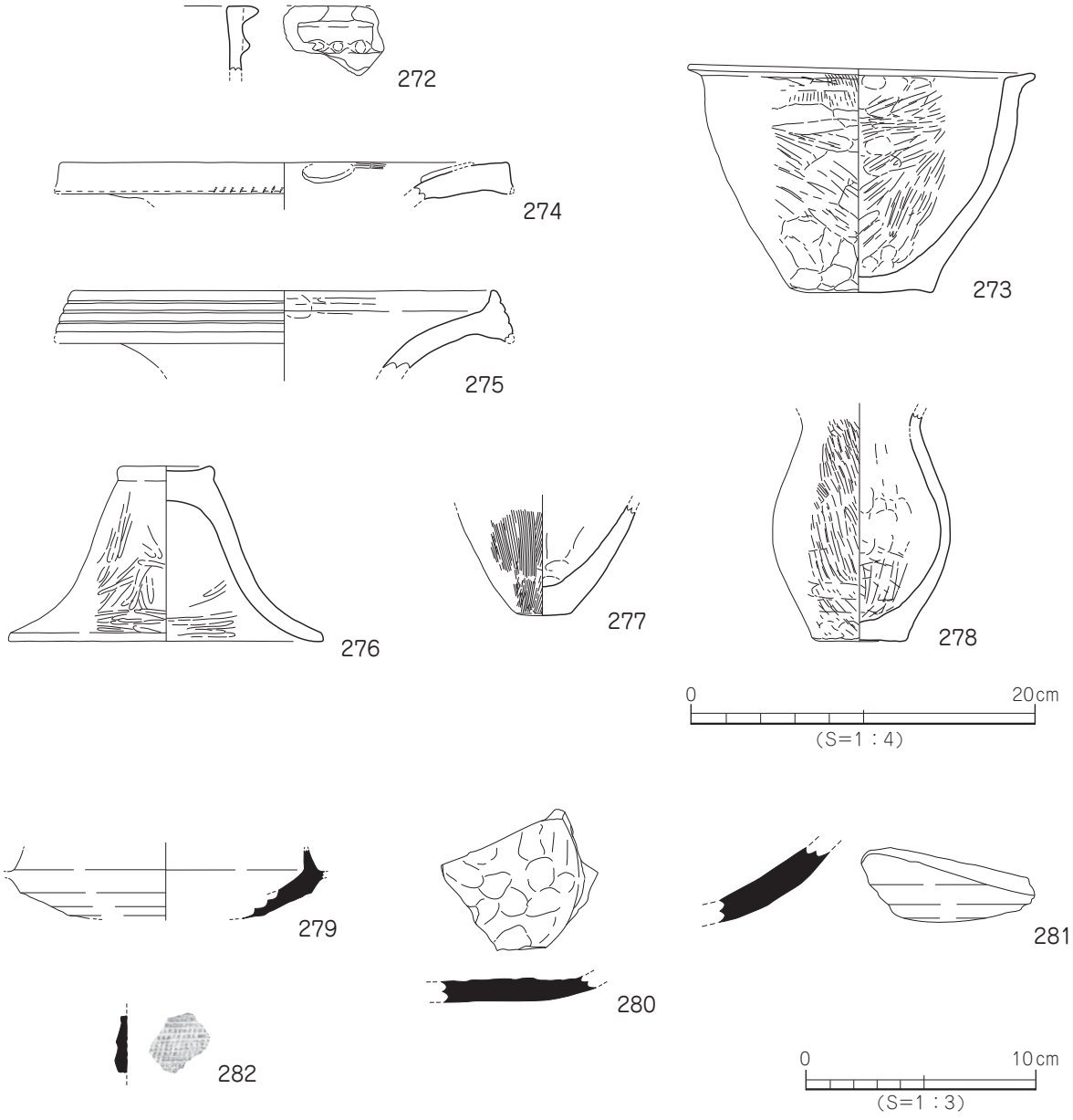


第 52 図　　ベルト・トレンチ出土遺物実測図（1）

径 3.3cm大の円形浮文を貼り付け、口縁部下端に刻目を施す。弥生時代中期前半。275 は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文 4 条を施す。弥生時代中期後半。276 は甕形土器の蓋で、つまみ上部は凹む。内外面には、丁寧なヘラミガキ調整がみられる。弥生時代前期末。277 は甕形土器の底部片で、平底である。弥生時代後期。278 は壺形土器の胴部～底部で、僅かに上げ底をなす。弥生時代前期末。

須恵器（279 ～ 282）

279・280 は坏身。279 のたちあがりと受部は、一部欠損している。281 は壺の胴部～底部片で、外面には回転ヘラケズリ調整がみられる。282 は甕の胴部片で、外面には平行叩き後、カキメ調整がみられる。



第 53 図　　ベルト・トレンチ出土遺物実測図（2）

（5）グリッド出土遺物（第 54 図、図版 20・21）

弥生土器（283 ～ 296）

283 ～ 285 は甕形土器。283 の口縁部は短く外反し、底部は上げ底をなす。胴部内外面には、ヘラミガキ調整がみられる。弥生時代前期末。284 は口縁部に粘土紐を貼り付け、胴部には櫛状工具による沈線文 7 条を施す。弥生時代中期前半。285 の口縁部は、逆「L」字状をなす。弥生時代中期中葉。286 ～ 291 は壺形土器。286 はほぼ完形品で、頸部に突帯を貼り付け、突帯上に刻目を施す。さらに突帯の上下には刺突文を施し、胴部下半部には打ち欠きによる孔がみられる。弥生時代中期中葉。287 ～ 289 は広口壺で、287 の頸部には断面三角形状の突帯を貼り付け、289 は頸部に突帯、肩部には刺突文 2 列を施す。弥生時代中期中葉。290 は無頸壺で、口縁部に径 0.6㎝大の円孔を 2 ヶ所穿つ。完形品。291 は頸～肩部片で、頸部に沈線文 3 条と刺突文 2 列、肩部には沈線文 4 条と刺突文 1 列を施す。弥生時代中期後半。292 は器台形土器の柱部片で、円孔を看取する。弥生時代後期後半。293・294 は甕形土器、295・296 は壺形土器の底部で、293 ～ 295 は上げ底、296 は平底である。293 は弥生時代後期、294 ～ 296 は中期後半。

須恵器（297）

297 は坏蓋。宝珠状のつまみをもち、かえりは口縁部より下がる。7 世紀後半。

土師器（298）

298 は土釜の脚部で、断面形態は円形をなす。室町時代。

縄文土器（299）

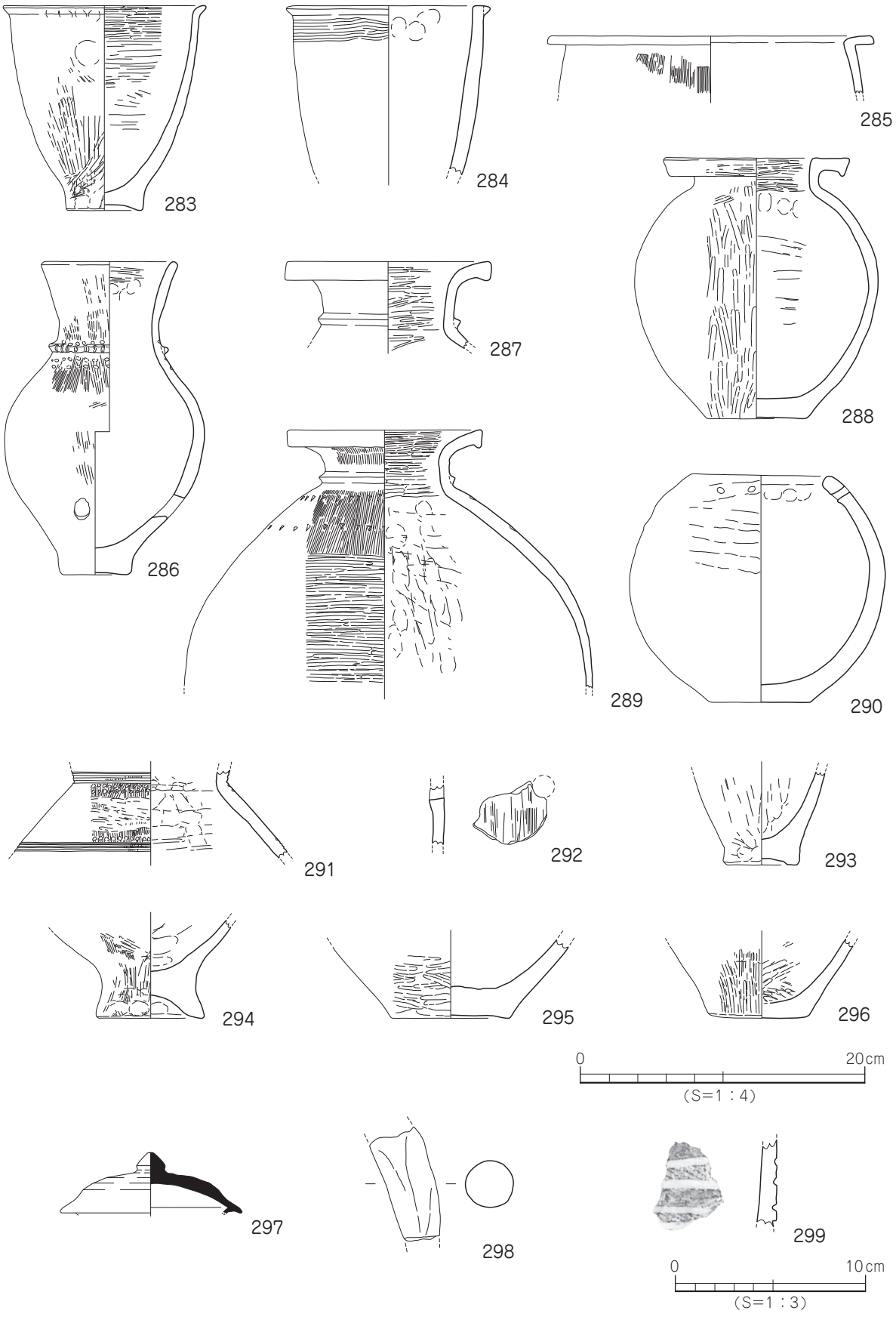
299 は有文の深鉢で、外面には平行沈線 3 条と沈線間に磨消縄文を施す。縄文時代後期。

（6）地点不明出土遺物（第 55・56 図、図版 21・22）

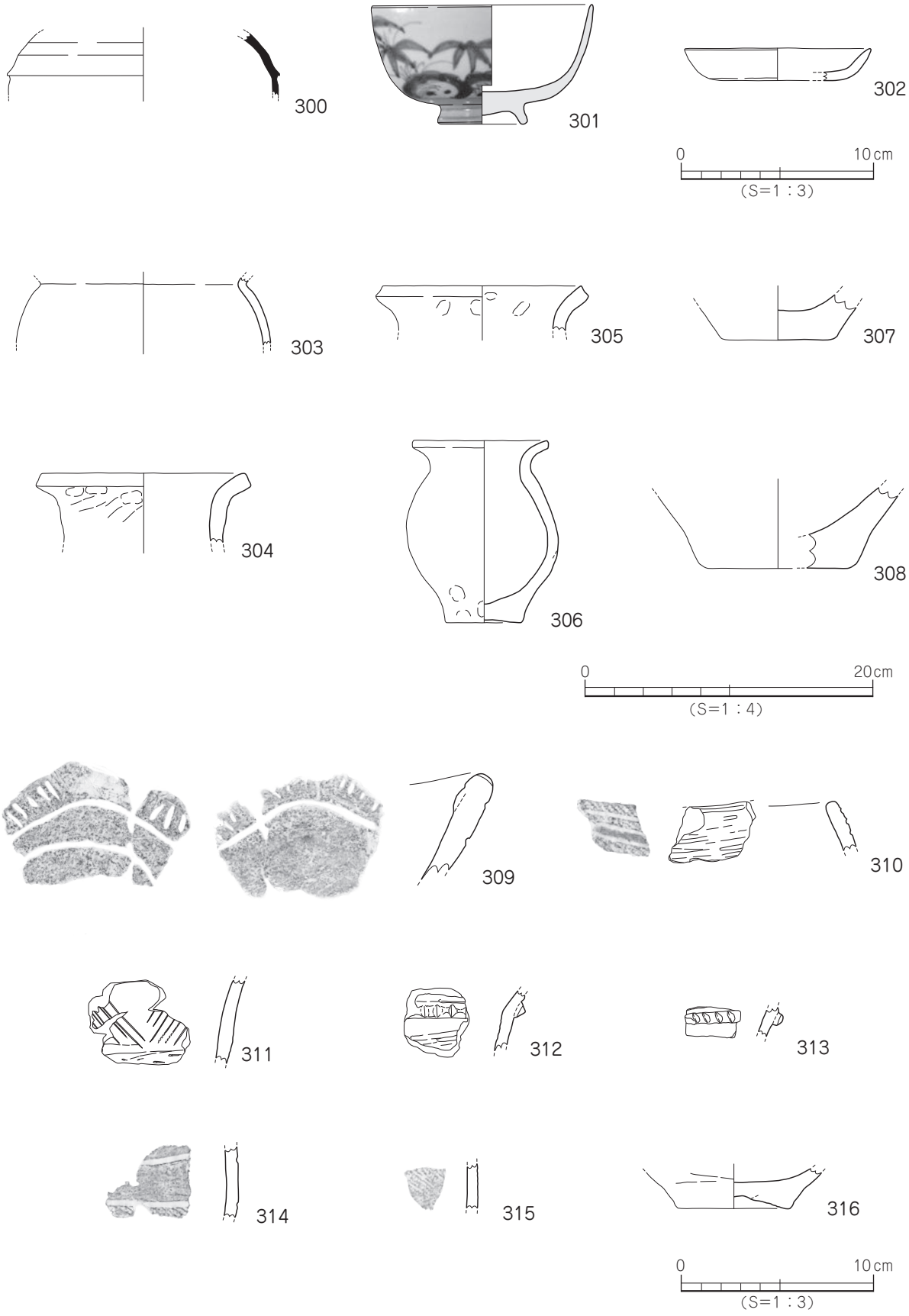
300 は須恵器坏蓋で、断面三角形状の稜をもつ。6 世紀前半。301 は染付碗で、体部外面には草花文、高台部分には 2 条の圏線が巡る。18 世紀。302 は土師器の皿で、口縁部外面に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。江戸時代。303 は甕形土器の胴部片、304・305 は壺形土器の口縁部片である。弥生時代後期。306 は小型壺で、口縁部は短く外反し、底部は上げ底をなす。弥生時代前期末。307・308 は壺形土器の底部で、厚みのある平底である。弥生時代後期。309 ～ 316 は縄文土器。309 は波状口縁で、口縁部内外面に沈線と刻目を施す。310 は外面に平行沈線 3 条と磨消縄文がみられる。縄文時代後期。311 には、ヘラ状工具による山形文と直線文が描かれている。312・313 は突帯を貼り付け、突帯上に刻目を施す。縄文時代晩期。314 は胴部片で、平行沈線 2 条と磨消縄文を施す。315 は胴部の小片で、外面には縄文がみられ、内面は貝殻条痕が残る。314・315 は縄文時代後期。316 は底部で、凹み底である。

石器（317 ～ 325）

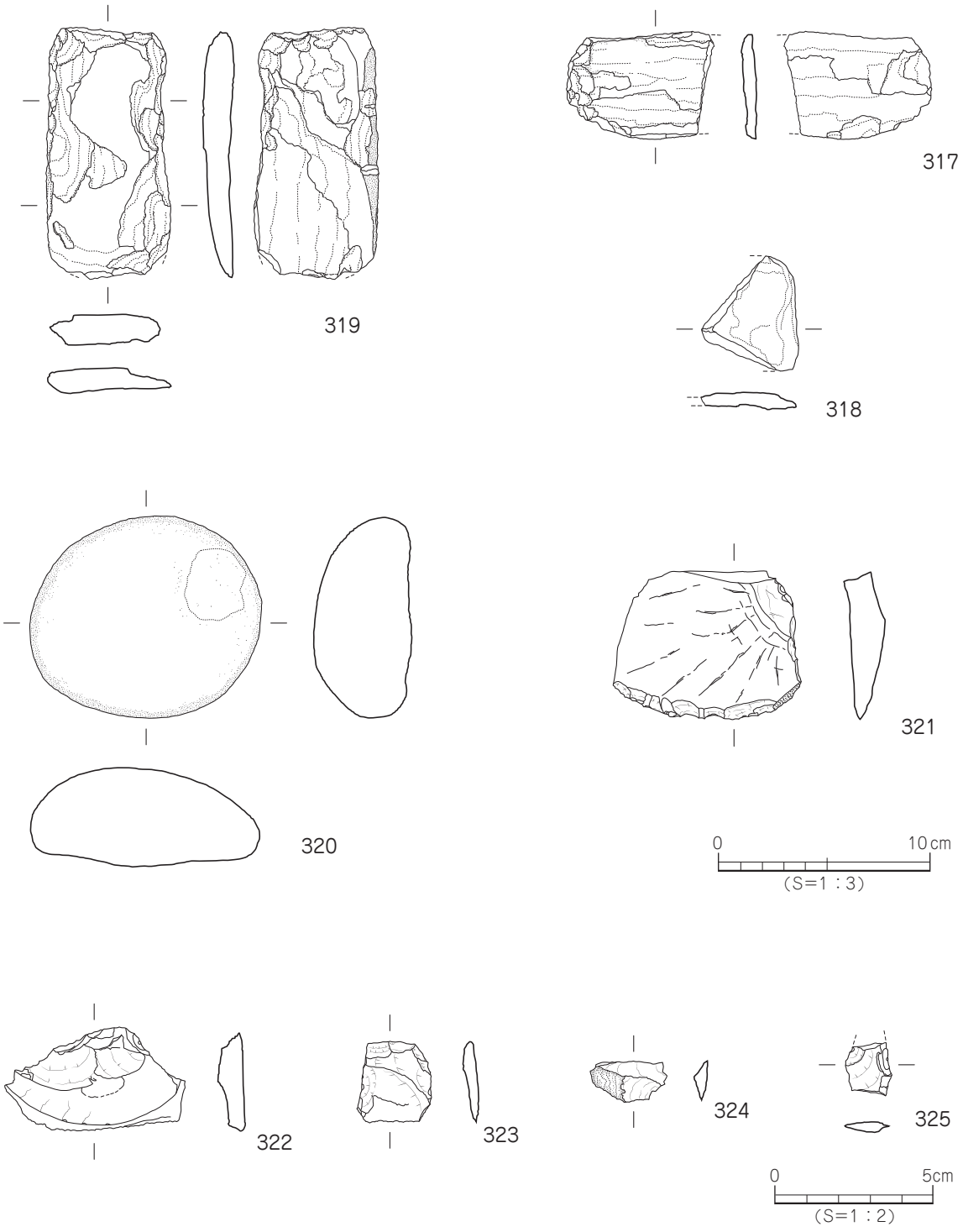
317 は打製の石庖丁で、研磨段階の未成品である。平面形態は直背弧刃形で、片面に自然面を残す。緑色片岩製。318 は石庖丁の素材で、表面は自然面、裏面は剝離面となる。結晶片岩製。319 は扁平片刃石斧。研磨段階の未成品で、平面形態は長方形を指向している。緑色片岩製。320 は敲石。完存品で、重量 639.6 ｇである。砂岩製。321 は大型のスクレイパーで、最大幅 7.0㎝、厚さ 1.5㎝を測る。サヌカイト製。322・323 はサヌカイトの剝片。322 は分厚い横長剝片を素材とし、323 の左側部は折り取ることにより整形されている。324・325 は砕片。324 の表面には一部、礫面が残る。



第 54 図　　グリッド出土遺物実測図



第 55 図　　地点不明出土遺物実測図（1）



第 56 図　　地点不明出土遺物実測図（2）

第３章　調査の成果と課題

本調査は、道後地区における集落様相解明と調査地近隣に所在する道後温泉に関連する資料確認を主目的として実施した。調査の結果、縄文時代や弥生時代の遺構と、縄文時代から近世までの遺物を確認した。ここでは、集落の構造や変遷と出土した縄文土器についてまとめを行う。

１．集落構造と変遷

調査では第Ⅷ層（黒褐色土）や第Ⅸ層（黄橙色土）上面にて、縄文時代や弥生時代の遺構を検出した。検出した遺構以外にも、縄文時代や弥生時代の遺物が多数出土している。とりわけ、第Ⅸ層掘り下げ時に比較的多くの土器や石器が出土した。縄文土器は後期中葉から後葉期と、晩期後半期のもので、第Ⅸ層上層からは晩期、第Ⅸ層下層からは後期の遺物がまとまって出土している。一方、弥生土器は前期末から中期後半期までのものである。

縄文時代の遺構は後期から晩期のもので、土坑 10 基と性格不明遺構 1 基を確認した。後期では、土坑 1 基（SK19）と性格不明遺構（SX3）が挙げられる。このうち、SX3 からは磨消縄文や羽状縄文を施す深鉢片が出土したほか、サヌカイト製の石鏃やチップなどが数多く出土している。出土状況から、これらの遺物が一括廃棄されたものと推測される。出土した縄文土器の特徴より、SX3 は縄文時代後期中葉頃の遺構と考えられる。このほか、第Ⅸ層中からは縄文時代後期中葉から後半に時期比定される土器や石器が数多く出土している。

晩期の遺構には、土坑 1 基（SK15）がある。後期の土器も数点含まれているが、刻目凸帯文をもつ深鉢の口縁部片や浅鉢片が出土しており、晩期後半段階の土坑と考えられる。なお、第Ⅸ層上層中からも該期の遺物が出土している。これらの遺構以外にも、検出層位や出土土器より縄文時代と思われる土坑が検出されているが、時期特定は難しく、本稿では後～晩期の土坑として報告している。

以上の結果より、調査地や近隣地域には縄文時代後・晩期における集落の存在が明らかになった。周辺では、調査地南西部にある道後町遺跡からは後～晩期の土器を含む自然流路などが検出されている。

次に、弥生時代の遺構は土坑 9 基を確認した。これらの土坑は、前期末から中期中葉に時期比定されるものである。前期末から中期初頭では、2 基の土坑（SK9・27）がある。このうち、SK27 からは口縁部を欠損する壺形土器のほか大型の破片が出土している。中期前葉では、3 基の土坑（SK12・14･20)が挙げられる。とりわけ､SK14･20 からは完形品を含む数多くの土器片が出土している。また、中期中葉では SK28 より、口縁部を欠損するものの、ほぼ完形品に復元できる壺形土器が出土している。前期から中期にかけては、調査地周辺にて数多くの遺跡が発見されている。調査地西方に広がる祝谷丘陵上では、祝谷大地ヶ田遺跡や祝谷畑中遺跡から中期中葉を主体とする土坑群が確認されており、本調査で検出した土坑も、それらの一部である可能性が考えられる。おそらくは、丘陵上に存在する土坑群が調査地や近隣地域まで拡大していたものと推測される。なお、出土状況から、検出された土坑は遺物の廃棄坑として利用されたものと考えられる。

なお、土坑や包含層からは土器のほかに比較的多くの石器が出土した。この中には未成品や剝片、砕片なども数多く含まれており、近隣地域には石器製作に携わる集団の存在が伺われる。

古墳時代以降では明確な遺構は検出されなかったが、第Ⅶ層のほか出土地点は不明であるが、古墳時代から古代に時期比定される遺物が出土している。この中には、7 世紀第 3 四半期頃の須恵器坏蓋（75・297）や 8 世紀代の須恵器（80 ～ 82）などが含まれている。調査地東方、道後温泉本館東側で実施された道後湯月町遺跡の調査では、池址が検出されている。池址下層部の土壌からはイオウ成分が検出されており、池址自体が温泉に関連する施設の可能性をもつ。なお、池址からは飛鳥時代の暗文土師器や須恵器が出土しており、これらは古代の道後温泉を復元する貴重な資料と考えられている。前述した須恵器は、古代における道後温泉や来住廃寺と同時期の建立とされる湯之町廃寺などと何らかの関連性が高い資料のひとつといえよう

2．道後湯之町遺跡 2 次調査出土の縄文土器

調査では、遺構内や包含層中などから数多くの縄文土器が出土した。ここでは、出土した縄文土器について、まとめを行う。

〔後期〕 後期の土器は、SX3 のほか第Ⅷ層やベルト・トレンチ、グリッドで取り上げた遺物に含まれている。これらは後期中葉から後葉段階のもので、後期中葉が主体をなす。口縁部片の出土数は多くはないが、口唇部に刻目を施すもの（91）や口縁部に刻目と沈線を施すもの（162・309）、口縁部に沈線と縄文を施すもの（92 ～ 94・163 ～ 165・310）がある。また、166・260 には口縁部に突起が貼り付けられている。このほか、口縁端部が肥厚するもの（97 ～ 99）がある。胴部には屈曲部をもつ、いわゆるボール状の深鉢片が多数みられ、沈線や曲線文、縄文などが施されている。なお、267 の外面には羽状縄文が施されている。施文をみると、口縁部や胴部に施される縄文は縁帯文成立期にくらべ、縄目が非常に小さいことが特徴である。また、胎土をみると、第Ⅷ層出土の胴部片（173）には角閃石が数多く含まれており、さらに、2 点の土器（162・309）には角閃石のほかに結晶片岩が数多く混入している。

本来、在地の縄文土器にはあまり見られない特徴であり、他地域からの搬入品の可能性もあるが、産地の特定には至っていない。

〔晩期〕 晩期では刻目突帯文を有する土器が主体であり、SK15 や第Ⅸ層中などから該期の土器が少量出土している。これらは形態の特徴より、晩期後半段階の土器と思われる。

今回の調査では、古代の道後温泉に関わる直接的な資料は得られなかったが、縄文時代や弥生時代の生活関連遺構や遺物を多数確認した。このことは、道後地区における集落構造や変遷を解明するうえで貴重な成果といえよう。今後は地区内の調査・研究を進め、古代はもとより、様々な時代の様相を明らかにすることが急務となろう。

最後になりましたが、調査にあたり道後温泉事務所をはじめ、関係各位には多大なるご理解とご協力を頂いた。記して、感謝申し上げます。

遺構一覧

遺構・遺物一覧　　－ 凡例 －

（1） 以下の表は、本調査地検出の遺構と出土遺物の計測値及び観察一覧である。

（2） 遺物観察表の各掲載について

法量欄　　（ ）：推定復元値

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、密→精製土、金→金雲母、赤→赤色酸化土粒。

（ ）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 4）→「1mm ～ 4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。

例）◎→良好、○→良。

表 1　土坑一覧　（1）

土坑 SK	地　区	平面形態	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B3 ～ C3	扁円形	1.60 × 1.45 × 0.35 + α	灰色土（10Y 6/1）	土師器・須恵器 瓦・陶器	明治以降	石組の井戸か
2	A4 ～ B4	不整円形	1.84 × 1.80 × 0.80 + α	灰色土（10Y 6/1）	土師器・瓦 陶器	明治以降	平瓦伴う井戸
3	C4 ～ D4	扁円形	1.25 × 1.06 × 0.65 + α	灰オリーブ色土（7.5Y 5/1）	土師器・瓦 陶器	明治以降	井戸か
4	C2	扁円形	1.00 × 1.00 × 0.05	灰色土（10Y 6/1）	土師器・瓦 石	明治以降	
5	E3・4	扁円形	1.10 × 1.10 × 0.75	浅黄色砂質土（7.5Y 5/1）	瓦	明治以降	井戸か
6	D3 ～ E3	円形	1.05 × 1.05 × 0.80 + α	浅黄色砂質土（7.5Y 5/1）	瓦	明治以降	井戸か
7	D2 ～ E2	ほぼ円形	1.15 × 1.10 × 1.08 + α	灰白色砂礫（10Y 8/1）	瓦・陶器 貝殻	明治以降	井戸か
8	C4	不整長方形	1.74 × 0.95 ～ 1.05 × 0.20	黒褐色土（10YR 3/1）	石	縄文後～晩期	
9	C4・5	長楕円形	（1.20） × 1.30 × 0.50	暗褐色土（10YR 3/3）	縄文土器 弥生土器・石	弥生前期末～ 中期初頭	廃棄土坑か
10	C5	不整長方形	2.05 × 0.90 ～ 1.05 × 0.30	黒褐色土（10YR 3/1）	縄文土器 石	縄文後～晩期	カクランに切られる
11	B4 ～ C4	隅丸方形	1.30 × 0.98 × 0.19	黒褐色土（10YR 3/2）	縄文土器 須恵器・礫	縄文後～晩期	
12	C3・4	楕円形	（1.48） × 1.45 × 0.24	暗褐色土（10YR 3/3）	弥生土器 石	弥生中期前葉	廃棄土坑か
13	C3	隅丸方形	（1.08） × 1.90 × 0.24	暗褐色土（10YR 3/3）	縄文土器	弥生前期末～ 中期初頭	廃棄土坑か
14	D2	楕円形	（2.75） ×（1.74） × 0.32	暗褐色土（10YR 3/3）	縄文土器 弥生土器・石	弥生中期前葉	
15	D4	楕円形	2.00 × 1.40 × 0.32	オリーブ黒色土（5GY 2/1）	縄文土器 弥生土器・石	縄文晩期後半	
16	欠番						
17	C3 ～ D3	隅丸長方形	（2.17） ×（1.04） × 0.67	暗褐色土（10YR 3/3）	縄文土器 弥生土器	弥生前～中期	
18	D3	隅丸方形	（1.30） × 1.20 × 0.26	暗褐色土（10YR 3/3）	弥生土器	弥生前～中期	
19	E3	楕円形	1.60 × 1.10 × 0.24	オリーブ黒色土（5GY 2/1）	縄文土器 弥生土器・石	縄文後期	カクランに切られる
20	E3	長楕円形	2.88 ×（0.72） × 0.60 ～ 0.77	暗褐色土（5GY 2/1）	縄文土器 弥生土器	弥生中期前葉	貯蔵穴か
21	D2 ～ E2	不整形	（1.26） ×（1.15） × 0.34	不明	縄文土器	不明	カクランに切られる
22	E2	不整形	（1.50） ×（1.14） × 0.24	不明	石	不明	
23	欠番						
24	C2・3	円形	（1.00） × 1.00 × 0.12	不明	石	縄文か？	

遺構一覧

土坑一覧 （2）

土坑 SK	地　区	平面形態	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
25	D4	不整長方形	1.80 × 1.00 × 0.47	オリーブ黒色土（5GY 2/1）	縄文土器 弥生土器･石	縄文後～晩期	SK26 を切る
26	D4 ～ E4	不整長方形	（0.64）× 1.00 × 0.29	オリーブ黒色土（5GY 2/1）	縄文土器	縄文後～晩期	SK25 に切られる
27	B4	不整円形	（1.60）× 2.10 × 0.19	暗褐色土（10YR 3/3）	縄文土器 弥生土器	弥生前期末～中期初頭	祭祀土坑か
28	C5	不整形	2.64 ×（1.28）× 0.24	暗褐色土（10YR 3/3）	縄文土器 弥生土器	弥生中期中葉	祭祀土坑
29	C4	不整形	（1.30）× 1.20 × 0.15 ～ 0.30	黒色土（N 2/ ）	縄文土器･石	縄文晩期	
30	欠番						
31	B4	隅丸長方形	2.00 × 1.20 × 0.16	黒褐色土（10YR 3/2）	石	縄文後～晩期	SK32 に切られる
32	B4	隅丸長方形	1.20 × 0.80 × 0.14	黒褐色土（10YR 3/2）	石	縄文後～晩期	SK31 を切る
33	C3・4	不整形	1.88 ×（1.28）× 0.16	不明		縄文か？	SK12 に切られる
34	B3・4	楕円形	1.70 × 0.74 × 0.16	不明		不明	
35	C3	楕円形	（1.28）× 0.98 × 0.10 ～ 0.28	暗褐色土（10YR 3/3）		弥生か？	
36	D4	楕円形	1.12 × 0.70 × 0.10	不明		不明	カクランに切られる
37	B5	楕円形	（1.30）× 1.12 × 0.09	不明		不明	

表２　性格不明遺構一覧

性格不明遺構 SX	地　区	平面形態	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	欠番						
2	欠番						
3	B5～C5	不整隅丸長方形	3.72 × 1.70 × 0.50	黒色土（N 2/ ）	縄文土器･石	縄文後期	廃棄土坑
4	欠番						
5	B5	隅丸方形	（3.00）× 1.70 × 0.35	暗褐色土（10YR 3/3）	弥生土器	弥生中期中葉	祭祀土坑か カクランに切られる

表３　SK15 出土遺物観察表（土製品） （1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
1	深鉢	残高　4.1	外反する口縁部の端部に刻目を施す。口縁下部に刻目突帯文をもつ。	条痕	ミガキ 条痕	黒色 にぶい黄橙色	石･長（1～4） 金 ◎		
2	深鉢	残高　2.2	口縁部の小片。口縁端部に刻目、口縁下部に刻目突帯文。	施文	ミガキ	橙色 褐灰色	石･長（1～2） ◎		
3	深鉢	残高　3.4	口縁部外面に縄目。	条痕	条痕	暗灰黄色 浅黄色	石･長（1～3） 金 ◎		
4	深鉢	残高　4.0	頸部に２条の沈線文､1条の波状沈線文を施す。	施文	ナデ	にぶい赤褐色 橙色	石･長（1） 金 ◎		
5	浅鉢	残高　2.4	口縁端面に2条の沈線文。	ミガキ	ミガキ	橙色 灰黄褐色	石･長（1～2） 金 赤 ◎		
6	浅鉢	残高　1.5	外面に１条の沈線文。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石･長（1～3） ◎		

遺物観察表

SK15 出土遺物観察表（土製品）　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
7	深鉢	残高 1.5	外面に1条の沈線文。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	◎		
8	浅鉢	底径 (6.0) 残高 2.0	凹み底。	ナデ	ナデ	黄褐色 浅黄色	石・長(1～2) ◎		
9	浅鉢	底径 6.8 残高 4.2	平底。	ミガキ	ナデ	黄褐色 黒色	石・長(1～5) ◎		

表４　SK19 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
10	深鉢	残高 2.5	外面に渦巻文。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 橙色	密 ◎		
11	深鉢	底径 (10.2) 残高 5.4	平底。	ハケ ナデ	ナデ	にぶい橙色 灰白色	石・長(1～4) 赤 ◎		
12	深鉢	底径 (8.6) 残高 3.3	平底。	ミガキ 指頭痕	ナデ	橙色 灰白色	石・長(1～3) ◎		

表５　SK19 出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
13	敲石	完形		7.7	8.0	3.9	312.88		

表６　SK29 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
14	深鉢	底径 (5.4) 残高 2.1	凹み底。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～4) 金 ◎		

表７　SK29 出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
15	剥片	完形	サヌカイト	3.4	1.2	0.32	1.43		
16	剥片	完形	サヌカイト	3.0	1.9	0.585	3.71		
17	擦石	完形		6.6	4.0	2.7	102.53		

表８　SK9 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
18	甕	底径 (5.4) 残高 2.6	平底。	ナデ	ナデ	橙色 灰白色	石・長(1～3) 金 ◎		
19	深鉢	残高 6.5	胴部に2条の沈線文。RL縄文。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 灰褐色	砂 密 金 ◎		
20	深鉢	残高 3.6	胴部の小片。	ナデ	ミガキ	褐灰色 褐灰色	石・長(1) ◎		

表 9　SK12 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	壺	底径　7.0 残高　5.6	平底。	ナデ ミガキ	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		

表 10　SK12 出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
22	剥片	完形	サヌカイト	5.2	1.9	1.37	9.25		
23	剥片	完形	サヌカイト	2.4	2.3	0.54	2.80		
24	剥片	完形	サヌカイト	2.1	2.0	0.28	1.53		
25	軽石	4/5	安山岩質か	4.4	(2.9)	1.8	16.63		

表 11　SK13 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
26	深鉢	残高　2.5	胴部小片。	条痕	ナデ	褐灰色 黒褐色	石・長(1～2) ◎		

表 12　SK14 出土遺物観察表（土製品）　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
27	甕	底径　6.0 残高　2.6	上げ底。	ナデ	マメツ	にぶい橙色 灰黄褐色	石・長(1～2) 金 ○		
28	壺	口径　(13.0) 残高　4.4	外反する口縁部、口縁端面に格子状の刻目を施す。	ハケ(10本/cm) ナデ	ハケ(10本/cm) ナデ	明茶色 灰褐色	石・長(1～4) ◎		
29	壺	口径　(14.8) 残高　6.2	口縁部の端部の上下に刻目、口縁部内面に刻目を持つ突帯文を巡らす。頸部外面に3条のヘラ沈線文を施す。2個1組の円孔を2ヶ所に施す。	ヨコナデ ミガキ	ミガキ	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
30	壺	口径　(18.6) 残高　10.1	広口壺。短い頸部と口縁部。	ナデ ハケ(9本/cm)	ハクリ	橙色 橙色	石・長(1～2) ○		
31	壺	口径　(15.5) 残高　23.0	外反する口縁部の端部は丸みをもつ。	ミガキ	ナデ ミガキ	橙色 橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
32	壺	残高　7.6	肩部に櫛状工具による6条の沈線文。沈線文の上下に刺突文を施す。	ミガキ	ナデ	灰白色 浅黄橙色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
33	壺	底径　(6.1) 残高　13.6	無頸壺か？口縁部欠損。肩部に2ヶ所の円孔。	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
34	壺	底径　6.0 残高　8.0	わずかに上げ底。胴部外面にヘラ状工具による3条の沈線文が残る。	ハケ(6本/cm) →ミガキ ナデ	ミガキ	淡茶色 明茶色	石・長(1～5) 金 ◎	黒斑	
35	壺	底径　6.8 残高　3.7	平底。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 橙色	石・長(1～3) ○		
36	壺	底径　12.5 残高　6.3	わずかに上げ底。	ハケ(7～9本/cm)→ミガキ ナデ	ナデ	灰茶色 明茶色	長(1～4) ◎	黒斑	
37	深鉢	残高　2.8	口縁部は肥厚する。	条痕		灰白色 灰白色	石・長(1～2) ○		

遺物観察表

SK14 出土遺物観察表（土製品）　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
38	鉢	底径　(5.0) 残高　1.4	凹み底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 灰黄色	石･長(1～2) ◎		

表 13　SK14 出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
39	剥片	完形	姫島産黒曜石	1.1	1.7	0.49	0.61		
40	剥片	完形	サヌカイト	0.9	2.2	0.17	0.45		
41	台石		花崗岩か	12.5	8.3	4.9	596.71		

表 14　SK17 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
42	浅鉢	残高　2.2	口縁部の小片。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 灰白色	砂 金 ◎		
43	浅鉢	残高　1.3	口縁部の小片。	ナデ	マメツ	灰黄色 黒褐色	長･石(1～2) ◎		

表 15　SK20 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
44	甕	口径　6.0 底径　(18.4) 器高　14.1	底部は平底。口縁部は貼付け。	ハケ ミガキ	ナデ ミガキ	褐灰色 灰黄褐色	石･長(1～2) ◎		6
45	壺	口径　(14.4) 底径　9.2 器高　32.0	外反する短い口縁部。口端面には上下に刻目を施す。頸部には押圧された突帯文を貼り付ける。	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	灰茶色 灰茶色	石･長(1～3) ◎	黒斑	
46	壺	底径　(6.9) 残高　1.9	平底。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石･長(1～3) ◎	黒斑	
47	深鉢	残高　2.1	口縁部の小片。外面に 1 条の突帯文が残る。	ナデ	ミガキ	灰白色 黒色	石･長(1～2) ◎		
48	浅鉢	底径　5.0 残高　2.6	凹み底。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石･長(1～4) 金 ◎		

表 16　SK27 出土遺物観察表（土製品）　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
49	甕	口径　(16.9) 底径　(6.2) 器高　18.3	平底の底部。口縁部は貼付けで、刻目を施す。	ミガキ	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石･長(1～3) 金 ◎		
50	甕	底径　5.0 残高　2.0	わずかに上げ底。	ナデ ケズリ	ナデ	橙色 橙色	石･長(1～3) ◎		
51	壺	底径　7.4 残高　18.3	平底の底部。頸部上部に1ヶ所の穿孔がある。	ハケ(6本/cm) →ミガキ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石･長(1～5) ◎	黒斑	6
52	深鉢	残高　5.1	外面に沈線文。	条痕	ミガキ	褐灰色 黒色	石･長(1～2) 金 ◎		

SK27 出土遺物観察表(土製品)　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
53	深鉢	残高　3.3	外面に沈線文と渦巻き状の沈線文。	ナデ 施文	ミガキ	にぶい橙色 褐灰色	密 ◎		
54	深鉢	底径　5.4 残高　10.2	平底。楕円形状の底部。	ナデ	ナデ	橙色 灰白色	石・長(1～5) ◎		

表 17　SK28 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
55	壺	口径　(15.6) 底径　7.0 器高　29.8	短く外反する口縁部。頸部に貼付け突帯文を1条、肩部に刺突列点文を1条施す。	ハケ(5本/cm) →ナデ	ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) ◎		6
56	深鉢	残高　4.7	外面に沈線文。	条痕	ナデ	灰褐色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
57	深鉢	残高　2.0	口縁部の小片。	条痕	条痕	褐灰色 褐灰色	石・長(1～2) ◎		

表 18　SK22 出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
58	楔形石器			(7.7)	3.8	2.0	72.85		
59	敲石		花崗岩	13.5	6.9	4.5	650.70		
60	台石	完形	花崗岩	14.3	11.0	5.7	1270.60		

表 19　SX3 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
61	深鉢	残高　2.7	口縁部片。	ナデ	条痕	褐色 黒色褐	長・石(1～2) 金 ◎		
62	深鉢	残高　3.6	沈線1条とRL縄文あり。	ナデ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい黄褐色	長・石(1～3) 金 ◎		
63	深鉢	残高　3.1	RL縄文あり。	施文	ナデ	浅黄色 灰黄色	長・石(1～2) 金 ◎		
64	浅鉢	残高　3.2	外反口縁。縄文あり。	ナデ	ミガキ	褐色 黒色	長(1～2) ◎		
65	深鉢	残高　3.2	胴部の小片。	条痕	ナデ	褐色 褐色	石(1～3) 金 ◎		
66	深鉢	残高　3.8	胴部の小片。	条痕	条痕	暗灰黄色 黄灰色	石・長(1～2) 金 ◎		
67	浅鉢	残高　1.7	外反口縁の屈曲部。	ナデ	ミガキ	褐灰色 褐灰色	砂粒 密 ◎		
68	浅鉢	残高　1.8	屈曲する口縁部の小片。	ミガキ	ミガキ	明赤褐色 明赤褐色	砂 密 ◎		

遺物観察表

表 20　SX3 出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
69	石鏃	基部欠損	サヌカイト	（1.7）	（1.4）	0.2	0.33		
70	石鏃	先端欠損	サヌカイト	（1.7）	1.5	0.4	0.71		
71	石鏃	完形	サヌカイト	1.48	1.5	0.27	0.42	風化が激しい	
72	石鏃	先端欠損	サヌカイト	（1.6）	（1.5）	0.35	0.38	風化が激しい	
73	石鏃	基部欠損	サヌカイト	（1.2）	（1.3）	0.2	0.15	風化が激しい	

表 21　SX5 出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
74	甕	口径　（20.4） 底径　（5.9） 器高　（28.0）	折曲口縁。底部は平底。	ナデ ハケ（10本/cm）	ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長（1～3） ◎	黒斑	

表 22　第Ⅶ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
75	坏蓋	口径　（10.2） 残高　1.1	かえりは口縁端部より下がり、端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		7
76	坏身	底径　（5.5） 残高　1.0	底部片。1/3 の残存。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
77	坏身	残高　1.2	底部片。小片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰白色	密 ◎		
78	壺	口径　（15.2） 残高　4.4	広口壺。口縁端部に沈線 1 条が巡る。1/4 の残存。	㋑回転ナデ ㋺平行叩き→回転カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		7
79	壺	口径　（13.4） 残高　3.5	広口壺。口縁端部に沈線 1 条が巡る。小片。	㋑回転ナデ ㋺回転カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		7
80	壺	残高　3.2	脚付壺。1/2 の残存。	㋩回転ヘラケズリ ㋥回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	7
81	壺	底径　（15.6） 残高　1.4	脚付壺。高台は太く、外方に開く。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
82	壺	残高　3.2	脚付壺。小片。	㋩回転ヘラケズリ ㋥回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
83	甕	残高　6.9	胴部片。	平行叩き	同心円叩き	青灰色 灰色	密 ◎		
84	甕	残高　3.9	胴部片。	平行叩き→ハケメ	円弧叩き	灰白色 灰白色	密 ◎		
85	埴輪	残高　4.6	円筒埴輪。土師質。	ハケ （7～10本/cm）	ハケ （7～10本/cm）	橙色 灰褐色	石・長（1～2） 金 ◎		7

表 23　第Ⅷ層（上層）出土遺物観察表（土製品）　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
86	深鉢	残高　3.9	貼り付け突帯文。突帯上に刻目あり。口縁端部は丸い。	ナデ	ナデ	黒褐色 黒褐色	石･長（1～3） ◎		7
87	深鉢	残高　4.1	貼り付け突帯文。突帯上に刻目あり。口縁端部は面をなし、刻目あり。	マメツ	マメツ	黒色 黒色	石･長（1～2） ◎		7
88	深鉢	残高　2.7	貼り付け突帯文。突帯上に刻目あり。口縁端部は面をなし、刻目あり。	ナデ	ナデ	黒褐色 褐灰色	砂粒 金 ◎		7
89	深鉢	残高　2.9	貼り付け突帯文。突帯上に刻目あり。口縁端部は面をなし、刻目あり。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 黒色	石・長（1） ◎		7
90	深鉢	残高　3.9	貼り付け突帯文。突帯上に刻目あり。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石･長（1～2） ◎		
91	深鉢	残高　3.6	口唇部に刻目あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 にぶい橙色	石・長（1） 角閃石 ◎		7
92	深鉢	残高　3.4	口縁部内外面に磨消縄文、内面に1条の沈線あり。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 黒褐色	石･長（1～2） ◎		7
93	深鉢	残高　2.9	口縁部内面に沈線1条あり。	ミガキ	ミガキ	褐色 黄褐色	石･長（1～2） ◎		8
94	深鉢	残高　4.9	外面に磨消縄文と沈線1条あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黒色	石･長（1～2） ◎		8
95	深鉢	残高　5.2	小片。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石･長（1～2） ◎		8
96	深鉢	残高　2.3	小片。	ナデ	ナデ	灰褐色 褐色	石･長（1～2） ◎		8
97	深鉢	残高　4.4	口縁部は肥厚する。	貝殻条痕	貝殻条痕	黒色 黒色	石･長（1～4） ◎		8
98	深鉢	残高　3.3	口縁部は肥厚する。	ナデ	ミガキ	黒色 灰褐色	石･長（1～3） 金 ◎		8
99	深鉢	残高　3.7	口縁部は僅かに肥厚する。	マメツ	マメツ	黒色 黒色	石･長（1～3） ◎		8
100	深鉢	残高　2.6	小片。外面に沈線1条あり。	ナデ	マメツ	黄灰色 にぶい黄褐色	砂粒 ◎		8
101	深鉢	残高　3.9	小片。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石･長（1～2） ◎		8
102	深鉢	残高　4.3	胴部片。	ミガキ	ナデ	暗黄灰色 黒褐色	石･長（1～2） 金 ◎		8
103	深鉢	残高　2.2	胴部小片。外面に籾圧痕2ヶ所あり。	マメツ	ナデ	灰白色 にぶい橙色	石･長（1～2） ◎		8
104	浅鉢	残高　3.3	口縁部は内方に肥厚。	貝殻条痕	ナデ	灰褐色 灰褐色	砂粒 ◎		8
105	浅鉢	残高　2.6	口縁部は上方に拡張し、口縁端面に沈線2条あり。沈線間に磨消縄文を施す。	ナデ	マメツ	褐色 灰褐色	石･長（1～2） 金 ◎		8

遺物観察表

第Ⅷ層（上層）出土遺物観察表（土製品）　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
106	浅鉢	残高　1.7	貼り付け突帯。突帯上と口唇部に刻目あり。	ナデ	ナデ	暗褐色 黒褐色	石・長（1） ◎		8
107	深鉢	底径　7.0 残高　2.9	凹み底。底部完形。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石･長（1～4） ◎		
108	深鉢	底径　5.4 残高　2.7	凹み底。底部完形。	ミガキ	ミガキ	褐灰色 灰褐色	石･長（1～2） ◎		8
109	深鉢	底径　(6.4) 残高　1.8	凹み底。1/4の残存。	マメツ	ナデ	浅黄色 灰黄褐色	石･長（1～3） ◎		
110	深鉢	底径　(4.8) 残高　2.5	凹み底。3/4の残存。	マメツ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石･長（1～3） ◎		
111	深鉢	底径　(9.5) 残高　2.5	凹み底。1/3の残存。	ミガキ	ミガキ	灰黄色 灰黄色	石･長（1～4） ◎		8
112	深鉢	底径　(7.4) 残高　3.0	僅かに凹む底部。1/4の残存。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石･長（1～4） ◎		
113	深鉢	底径　(12.0) 残高　2.3	僅かに凹む底部。1/6の残存。	ナデ	マメツ	灰白色 浅黄橙色	石･長（1～5） ◎		
114	深鉢	底径　(6.2) 残高　2.5	平底。ほぼ完形。	ミガキ	ナデ	浅黄橙色 明褐色	石･長（1～6） ◎		8
115	浅鉢	底径　(7.4) 残高　3.8	平底。小片。	マメツ	マメツ	淡黄色 灰白色	石･長（1～4） ◎		
116	壺	残高　3.4	口縁部外面に凹線文２条あり。小片。	ヨコナデ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長（1） ◎		9
117	壺	残高　3.7	断面三角形状の突帯文３条あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 褐色	石･長（1～3） 金 ◎		9
118	壺	残高　4.0	貼り付け突帯文。突帯上に刻目あり。	マメツ	ナデ	灰白色 灰白色	石･長（1～2） ◎		9
119	甕	底径　5.0 残高　4.4	上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長（1～3） 赤 ◎		9
120	甕	底径　8.5 残高　6.4	僅かに上げ底。底部完形。	ハケ（10本/cm） →ヘラミガキ	ケズリ→ナデ	黄褐色 黄褐色	石･長（1～4） ◎		9

表24　第Ⅷ層（上層）出土遺物観察表（石製品）　（1）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
121	石斧	一部欠損	緑色片岩	(6.60)	2.00	1.90	36.82		9
122	石斧	一部欠損	緑色片岩	(13.10)	5.30	2.40	273.60		9
123	石斧	一部欠損	結晶片岩	(10.30)	3.70	6.10	67.66		9
124	石斧	一部欠損	蛇紋岩	5.60	3.20	0.91	24.53	縄文系	9
125	石斧	一部欠損	花崗岩	11.50	5.90	4.00	354.70	伐採斧	9

第Ⅷ層（上層）出土遺物観察表（石製品）　（2）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
126	石斧	1/2	火成岩	(6.40)	5.30	4.30	218.49		9
127	磨石	4/5	砂岩	4.30	(2.30)	2.70	34.64	片面使用	10
128	磨石	完形	砂岩	10.00	7.10	3.80	373.85	片面使用	10
129	磨石	完形	花崗岩	13.00	10.70	6.60	1,292.11		10
130	台石	1/2	花崗岩	(6.00)	10.00	5.20	382.37		10
131	敲石	一部欠損	花崗岩	11.00	7.50	4.20	486.25		10
132	敲石	一部欠損	花崗岩	10.60	8.20	4.90	594.15		10
133	敲石	完形	花崗岩	7.10	3.80	3.60	128.88		10
134	石錘	ほぼ完形	砂岩	6.60	5.30	1.90	83.58		10
135	石錘	ほぼ完形	砂岩	8.40	5.30	1.70	124.41		10
136	石庖丁	一部欠損	緑色片岩	10.50	4.60	0.88	50.81	未成品	10
137	石鏃	一部欠損	サヌカイト	(2.80)	1.80	0.26	0.91		10
138	石鏃	完形	サヌカイト	2.90	1.80	0.40	2.00		10
139	楔形石器	一部欠損	サヌカイト	1.50	3.60	0.56	3.58		11
140	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.20	1.30	0.46	1.70		11
141	スクレイパー	完形	サヌカイト	4.30	2.80	1.05	10.39		11
142	剥片	一部欠損	サヌカイト	2.60	5.00	0.62	7.30		11
143	剥片	一部欠損	サヌカイト	(3.85)	3.70	1.28	13.25		11
144	剥片	完形	サヌカイト	2.30	2.85	0.39	2.43		11
145	剥片	完形	サヌカイト	2.00	3.20	0.37	2.01		11
146	剥片	完形	サヌカイト	1.40	2.20	0.43	1.08		11
147	剥片	完形	サヌカイト	2.30	1.90	0.46	2.42		11
148	剥片	一部欠損	サヌカイト	1.90	2.50	0.50	1.69		11
149	剥片	一部欠損	サヌカイト	(2.30)	(1.60)	0.41	1.56		11
150	剥片	完形	サヌカイト	2.20	1.20	0.34	1.14		11
151	砕片		サヌカイト	2.60	1.80	0.26	0.90		11
152	砕片	一部欠損	サヌカイト	2.90	1.10	0.49	1.39		11
153	砕片	完形	サヌカイト	2.70	1.10	0.72	1.84		11
154	不明	完形	軽石	6.30	4.10	1.25	22.77		11
155	不明	完形	軽石	6.00	3.40	2.00	36.74		11
156	不明	1/2	軽石	4.80	(2.50)	(1.33)	12.88		11
157	不明	1/2	軽石	4.30	3.70	1.25	11.25		11

遺物観察表

第Ⅷ層（上層）出土遺物観察表（石製品）　（3）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
158	不明	一部欠損	軽石	2.70	2.20	1.40	7.08		11
159	礫石器		砂岩	4.50	3.00	1.60	24.39		11
160	礫	完形	砂岩	9.10	9.55	4.90	352.07		11
161	礫	完形	砂岩	9.00	6.80	4.50	279.73		11

表 25　第Ⅷ層（下層）出土遺物観察表（土製品）　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
162	深鉢	残高　3.4	口縁部を拡張。口唇部に刻目、口縁部に多重方形文あり。	ナデ	ミガキ	灰黄色 灰黄色	石･長（1～2） 金・角閃石 ◎		12
163	深鉢	残高　4.0	口縁部外面に磨消縄文あり。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石･長（1～4） ◎		12
164	深鉢	残高　3.0	口縁部内面に沈線1条、口縁部内外面に磨消縄文を施す。	ナデ	ナデ	暗褐色 黒褐色	石･長（1～2） 金 ◎		12
165	深鉢	口径（39.4） 残高　3.8	口唇部に磨消縄文、口縁部外面に沈線1条と縄文を施す。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 褐灰色	石･長（1～2） 金 ◎		12
166	深鉢	口径（36.0） 残高　3.6	耳状突起の貼り付け。口縁部外面に磨消縄文を施す。	ナデ	貝殻条痕	灰色 灰色	密 ◎		12
167	深鉢	残高　5.8	無文。	貝殻条痕	ヘラミガキ	灰黄色 黒褐色	石･長（1～2） ◎		12
168	深鉢	残高　4.5	無文。	貝殻条痕	貝殻条痕	黒色 黒色	石･長（1～2） 金 ◎		12
169	深鉢	残高　4.6	無文。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長（1） ◎		12
170	深鉢	残高　4.5	口縁部を僅かに拡張。無文。	貝殻条痕	貝殻条痕	灰色 灰色	石･長（1～3） ◎		12
171	深鉢	残高　2.3	無文。	貝殻条痕	ミガキ	暗褐色 灰褐色	石･長（1～2） 角閃石 ◎		12
172	深鉢	残高　2.1	無文。	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂粒 金 ◎		
173	深鉢	残高　7.0	外面に渦巻き状の沈線文と磨消縄文あり。	ナデ	貝殻条痕	黒褐色 黄灰色	石･長（1～3） 角閃石 ◎		13
174	深鉢	残高　3.7	胴上端部外面に縄文あり。	ミガキ	ミガキ	褐灰色 褐灰色	石･長（1～3） 金 ◎		13
175	深鉢	残高　4.2	外面に沈線1条と縄文あり。	条痕	条痕	黒褐色 にぶい黄橙色	石･長（1～2） ◎		13
176	深鉢	残高　5.7	胴部片。	条痕	条痕	灰黄色 浅黄色	砂粒 ◎		13
177	深鉢	残高　3.0	外面に縄文あり。	ナデ	ミガキ	灰黄褐色 灰黄褐色	石･長（1～2） ◎		13

第Ⅷ層（下層）出土遺物観察表（土製品）　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
178	深鉢	残高　3.6	外面に沈線1条と縄文あり。	ナデ	ナデ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長（1） 金 ◎		13
179	深鉢	残高　4.7	胴部片。外面に縄文あり。	条痕	条痕	暗褐色 黒褐色	石・長（1） 金 ◎		13
180	深鉢	残高　3.6	縄文と沈線（三角文）あり。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石･長（1～3） ◎		13
181	深鉢	残高　4.2	沈線2条と縄文あり。	ミガキ	ミガキ	褐色 褐色	石･長（1～2） 金 ◎		13
182	深鉢	残高　3.3	沈線1条と縄文あり。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長（1） ◎		13
183	深鉢	残高　3.3	外面に縄文あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長（1～4） ◎		14
184	深鉢	残高　2.0	外面に沈線1条あり。	ミガキ	ミガキ	灰色 黒色	石（1） ◎		14
185	深鉢	残高　2.6	外面に縄文あり。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	石・長（1） ◎		14
186	深鉢	残高　3.9	外面に沈線1条あり。	ナデ	ミガキ	灰褐色 黒褐色	石･長（1～2） ◎		14
187	深鉢	残高　2.9	外面に沈線3条と縄文あり。	ナデ	ナデ	褐色 灰褐色	石･長（1～4） 金 ◎		14
188	深鉢	残高　3.4	外面に沈線5条と縄文あり。	ナデ	ミガキ	褐色 灰褐色	石･長（1～2） 金 ◎		14
189	深鉢	残高　3.3	外面に沈線4条と縄文あり。	ナデ	ナデ	褐色 褐灰色	石･長（1～2） 金 ◎		14
190	深鉢	残高　3.5	外面にタテ方向の沈線2条あり。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石･長（1～2） ◎		14
191	深鉢	残高　3.1	外面に縄文あり。	ナデ	条痕	黒褐色 黒褐色	長（1～5） ◎		14
192	深鉢	残高　3.4	外面に縄文あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 灰白色	砂粒 ○		14
193	深鉢	残高　2.8	外面に縄文あり。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石･長（1～2） ◎		14
194	深鉢	残高　3.7	胴部片。	貝殻条痕	貝殻条痕	灰白色 黒色	石・長（1） 金 ◎		14
195	深鉢	残高　7.3	胴部片。	条痕	条痕	黄灰色 黄灰色	石･長（1～2） 金 ◎		14
196	深鉢	残高　3.7	胴部小片。	ナデ	条痕	にぶい橙色 褐灰色	石･長（1～2） ◎		
197	深鉢	残高　3.6	胴部片。	条痕	条痕	にぶい褐色 黒色	石･長（1～5） ◎		

遺物観察表

第Ⅷ層（下層）出土遺物観察表（土製品）　（3）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
198	深鉢	残高　2.4	胴部片。	条痕	ナデ	黒褐色 黒褐色	砂粒 ◎		
199	深鉢	残高　5.1	胴部片。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 橙色	石･長（1～3） 金 ◎		
200	浅鉢	残高　4.9	口縁部内面に沈線1条と縄文あり。	ミガキ	ミガキ	暗褐色 黒色	石･長（1～2） ◎		14
201	浅鉢	残高　3.9	口縁部片。無文。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗褐色 暗褐色	石･長（1～2） 金 ◎		14
202	浅鉢	残高　2.8	波状口縁。	ミガキ	ナデ	灰褐色 黒褐色	石･長（1～2） ◎		
203	浅鉢	残高　1.8	口縁部は上方に拡張。	マメツ	ミガキ	暗褐色 暗褐色	石（1） 金 ◎		
204	深鉢	底径　5.8 残高　3.4	凹み底。底部完形。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄色	石･長（1～3） ◎		15
205	深鉢	底径　（9.2） 残高　2.5	凹み底。1/4の残存。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい黄褐色	石･長（1～2） 金 ◎		15
206	深鉢	底径　（5.4） 残高　1.8	凹み底。2/3の残存。	マメツ	マメツ	褐色 灰褐色	石･長（1～3） ○		15
207	深鉢	底径　（8.0） 残高　1.5	僅かに凹む底部。1/2の残存。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石･長（1～4） ◎		15
208	深鉢	残高　3.3	高台状の底部。1/3の残存。	ナデ	ナデ	灰褐色 褐色	石･長（1～3） ◎		15
209	深鉢	底径　（10.7） 残高　2.5	平底。小片。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石･長（1～5） ◎		
210	浅鉢	底径　（3.4） 残高　2.9	僅かに上げ底。1/2の残存。	マメツ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石･長（1～4） ◎		15
211	壺	口径　（18.0） 残高　4.6	広口壺。口縁部は下方に垂下。	㊀ヨコナデ ㊁ミガキ	ミガキ	橙色 にぶい橙色	石・長（1） 赤 ◎		15
212	壺	口径　（11.2） 残高　3.5	無頸壺。口縁部にヘラ描き沈線文と刺突文3列、径0.4cm大の円孔2ヶを看取。	ハケ→ ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石･長（1～2） ◎		15
213	甕	底径　（8.8） 残高　7.1	僅かに上げ底。	ヘラミガキ	ナデ	橙色 灰褐色	石･長（1～5） ◎		15
214	甕	底径　10.1 残高　11.1	僅かに上げ底。	ハケ（7本/cm） →ヘラミガキ	マメツ	褐色 褐色	石･長（1～4） ◎		15

表26　第Ⅷ層（下層）出土遺物観察表（石製品）　（1）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
215	石斧	一部欠損	緑泥片岩	5.00	3.30	0.90	14.53	石器素材	16
216	石棒	一部欠損	緑色片岩	（9.20）	3.00	2.40	90.67		16
217	磨石	完形	砂岩	12.00	8.50	5.10	675.85		16

第Ⅷ層（下層）出土遺物観察表（石製品）　（2）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
218	磨石	一部欠損	砂岩	11.00	7.40	4.60	515.11		16
219	磨石	完形	砂岩	10.50	9.00	4.10	449.00		16
220	磨石	一部欠損	砂岩	10.60	7.80	3.10	439.14		16
221	磨石	一部欠損	砂岩	(9.80)	6.50	5.50	465.01		16
222	磨石	一部欠損	砂岩	8.20	5.00	4.30	244.36		16
223	凹石	ほぼ完形	砂岩	9.30	6.40	3.00	258.28		16
224	敲石	一部欠損	花崗岩	7.20	4.80	4.20	186.71		16
225	敲石		花崗岩	10.60	6.40	2.80	191.21		16
226	ハンマー(敲石)	刃部欠損	緑色片岩	(17.40)	2.70	2.70	173.73		16
227	砥石	一部欠損		21.50	15.10	5.60	3,100.00	片面のみ使用	17
228	砥石	一部欠損	砂岩	7.00	7.80	2.50	144.92	線状痕あり	17
229	石錘	一部欠損	結晶片岩	6.20	5.00	2.20	84.47		17
230	石庖丁	ほぼ完形	サヌカイト	8.60	4.50	0.90	36.94		17
231	石庖丁	1/2	緑色片岩	10.10	4.10	0.80	49.70	未成品	17
232	石庖丁	小片	緑色片岩	(4.10)	4.10	0.65	13.95	未成品	
233	石鏃	完形	サヌカイト	2.45	1.80	0.30	0.64		17
234	楔形石器	一部欠損	サヌカイト	5.05	2.65	0.79	11.19		17
235	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.65	3.30	0.91	10.75		17
236	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.60	2.80	0.86	8.14		17
237	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.00	2.70	0.81	5.93		18
238	スクレイパー	完形	サヌカイト	5.80	1.95	0.85	10.27		18
239	剥片		サヌカイト	3.30	2.10	0.34	2.48		18
240	剥片		サヌカイト	1.60	1.90	0.26	0.77		18
241	剥片		サヌカイト	4.80	2.80	1.02	12.30		18
242	剥片		サヌカイト	3.30	1.30	0.28	1.57	上下に使用痕	18
243	砕片		サヌカイト	3.80	2.90	0.59	3.25	扁平礫の表皮部分	18
244	砕片		サヌカイト	3.20	1.80	0.65	2.42		18
245	砕片		サヌカイト	2.20	1.80	0.19	0.91		18
246	砕片		サヌカイト	2.20	1.90	0.38	1.30		18
247	砕片		サヌカイト	5.40	2.10	0.92	8.31	スパール状	18
248	不明	完形？	軽石	4.00	2.40	2.50	19.97	灰色	18

遺物観察表

第Ⅷ層（下層）出土遺物観察表（石製品）　（3）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
249	不明	一部欠損	軽石	(3.30)	2.90	0.92	5.95	赤橙色	18
250	不明		石英	5.00	2.50	2.30	23.25	片面：自然面	18
251	礫(石器)	一部欠損	花崗岩	(13.10)	4.50	5.75	436.64		
252	礫	一部欠損	花崗岩	14.90	7.00	4.90	711.18		
253	礫	約1/2	砂岩	9.00	(5.80)	6.80	335.34		
254	礫	ほぼ完形	花崗岩	8.60	7.00	4.70	399.80		
255	礫	一部欠損	砂岩	(7.30)	5.45	2.90	172.59		
256	礫	完形	砂岩	8.25	6.50	2.50	178.73		
257	礫	1/2	砂岩	4.20	3.50	0.87	15.60		
258	礫	完形	砂岩	3.80	2.70	1.80	19.84		
259	礫		花崗岩	3.00	0.95	1.20	2.13		

表27　ベルト・トレンチ出土遺物観察表（土製品）　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
260	深鉢	残高　3.5	波状口縁。口縁部に瘤状の突起を貼り付け、突起及び波頂部に沈線が巡る。	条痕	条痕	褐色 褐色	石・長（1） 角閃石 ◎		18
261	深鉢	口径（21.2） 残高　3.0	無文。	条痕	条痕	黒褐色 褐灰色	石･長（1～2） ◎		18
262	深鉢	残高　3.4	外面に縄文あり。	ミガキ	ミガキ	浅黄色 浅黄色	石･長（1～3） 赤 ◎		18
263	深鉢	残高　2.6	外面に沈線1条あり。	ミガキ	ミガキ	灰黄褐色 灰褐色	石･長（1～2） ◎		18
264	深鉢	残高　3.6	外面に沈線1条と縄文あり。	ミガキ	ミガキ	浅黄色 浅黄色	石・長（1） ◎		19
265	深鉢	残高　4.5	外面に沈線1条と縄文あり。	ナデ	ミガキ	灰白色 にぶい黄褐色	石･長（1～3） ◎		19
266	深鉢	残高　2.9	外面に縄文あり。	条痕	ナデ	灰黄色 にぶい黄橙色	石･長（1～2） ◎		19
267	深鉢	残高　4.4	外面に縄文あり。	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 黒色	砂粒 ◎		19
268	浅鉢	残高　3.5	無文。	ミガキ	ミガキ	暗褐色 暗褐色	石･長（1～2） ◎		19
269	浅鉢	残高　2.0	波状口縁。口縁部内面に沈線あり。	ミガキ	ミガキ	暗褐色 暗褐色	石･長（1～2） 金 ◎		19
270	浅鉢	残高　1.9	口縁部は、やや肥厚する。	ミガキ	ナデ	褐色 暗褐色	石・長（1） 金 ◎		19

ベルト・トレンチ出土遺物観察表（土製品）　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
271	浅鉢	残高 3.9	外面に沈線1条と縄文あり。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長（1～2） 金 ◎		19
272	甕	残高 3.7	逆「L」字状口縁。貼り付け突帯1条。突帯上に押圧を加える。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） ○		
273	甕	口径（19.6） 底径 7.5 器高 13.2	短く外反する口縁部。底部は僅かに上げ底。3/4の残存。	㊐ヨコナデ ㊒ケズリ→ミガキ ㊎ケズリ→ナデ	㊐ヨコナデ ㊒ヘラミガキ ㊎ヘラミガキ	褐色 灰褐色	石・長（1～4） ◎	煤付着	19
274	壺	口径（25.7） 残高 2.1	広口壺。口縁部内面に径3.3cm大の浮文を貼り付ける。口縁下端部に刻目あり。	マメツ	ハケ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ◎	黒斑	
275	壺	口径（24.4） 残高 4.4	広口壺。口縁部は上下方に拡張し、凹線文4条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長（1～3） 金 ◎		19
276	蓋	口径（5.6） 底径（18.2） 器高 10.2	甕形土器の蓋。つまみ上部は凹む。	ミガキ	ミガキ	褐色 黄褐色	石・長（1～2） ◎		19
277	甕	底径 2.7 残高 6.4	平底。	ハケ （7～8本/cm）	ナデ	褐色 褐色	石・長（1～7） ◎	黒斑	
278	壺	底径 5.0 残高 13.2	僅かに上げ底。1/3の残存。	ヘラミガキ	㊒上ナデ ㊒下ヘラケズリ ㊎ヘラケズリ	黄褐色 黄褐色	石・長（1～5） 金 ◎	黒斑	
279	坏身	残高 3.0	たちあがりと受部を欠損。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長（1） ◎		
280	坏身	残高 1.2	底部片。小片。	回転ヘラケズリ	ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
281	壺	残高 3.3	胴～底部片。小片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
282	甕	残高 2.7	胴部小片。内面欠損。	平行叩き →回転カキメ	—	灰色 灰色	密 ◎		

表28　グリット出土遺物観察表（土製品）　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
283	甕	口径（14.2） 底径（5.1） 器高 14.3	短く外反する口縁部。底部は上げ底。1/4の残存。	㊐ヨコナデ ㊒ヘラミガキ ㊎ナデ	㊐ヨコナデ ㊒ヘラミガキ ㊎ナデ	褐色 褐色	石・長（1～4） ◎	煤付着 黒斑	
284	甕	口径（14.2） 残高 11.9	貼り付け口縁。胴部に櫛描き沈線文7条あり。	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～5） 金 ◎		
285	甕	口径（22.2） 残高 4.0	逆「L」字状口縁。小片。	㊐ナデ ㊒ハケ （11本/cm）	ナデ	明褐色 橙色	石・長（1～2） ◎		
286	壺	口径（9.4） 底径 5.2 器高 21.9	ほぼ完形。頸部に刻目突帯を貼り付け、突帯の上下に刺突文あり。胴下半部に孔あり。	ハケ （6～7本/cm）	ナデ	橙色 橙色	石・長（1） 金 ◎		20
287	壺	口径 14.1 残高 6.1	広口壺。頸部に断面三角形状の突帯を貼り付ける。2/3の残存。	ナデ	ミガキ	橙色 橙色	石・長（1～2） 金 ◎		20

遺物観察表

グリッド出土遺物観察表（土製品）　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
288	壺	口径 (13.0) 底径 (6.8) 器高 17.2	広口壺。僅かに上げ底。1/2の残存。	ミガキ	ナデ	橙色 黒褐色	石･長（1～3） ◎	黒斑	20
289	壺	口径 13.6 残高 18.0	広口壺。頸部に突帯。肩部に刺突文2列を施す。	㊐ヨコナデ ㊒ヘラミガキ	㊐ヘラミガキ ㊒ナデ	褐色 明褐色	石･長（1～3） ◎	黒斑	20
290	壺	口径 9.6 底径 7.2 器高 15.9	無頸壺。口縁部に径0.6cm大の円孔を2個看取。平底。ほぼ完形。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石･長（1～2） 金 ◎	黒斑	20
291	壺	残高 6.1	頸部に沈線文3条と刺突文2列、肩部に沈線文4条と刺突文1列あり。	ハケ→ミガキ	ナデ	橙色 橙色	石･長（1～3） ◎		20
292	器台	残高 4.1	柱部片。円孔を看取。	ハケ（6本/cm）	ナデ	橙色 橙色	石・長（1） 金 ◎		
293	甕	底径 5.0 残高 6.5	上げ底。1/2の残存。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石･長（1～5） ◎	黒斑	
294	甕	底径 7.2 残高 6.8	上げ底。ほぼ完形。	ハケ→ミガキ	ナデ	橙色 橙色	石･長（1～3） ◎	黒斑	
295	壺	底径 (8.2) 残高 5.5	上げ底。1/2の残存。	ミガキ	ナデ	橙色 浅黄色	石･長（1～4） 金 ◎	黒斑	
296	壺	底径 5.5 残高 6.5	平底。1/2の残存。	ヘラミガキ	ミガキ	灰褐色 灰褐色	石･長（1～3） ◎		
297	坏蓋	つまみ径 1.5 残高 3.2	宝珠状つまみ。1/3の残存。	㊍回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		21
298	土釜	残高 6.0	脚部片。断面円形。	ナデ	—	にぶい褐色	石･長（1～2） ◎		
299	深鉢	残高 4.6	外面に沈線3条と縄文あり。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 暗褐色	石･長（1～3） ◎		21

表29　地点不明出土遺物観察表（土製品）　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
300	坏蓋	残高 3.2	断面三角形の稜あり。小片。	㊍回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
301	碗	口径 11.4 底径 4.3 器高 6.2	染付碗。体部外面に草花文、高台部分には圏線2条あり。	施釉	施釉	白色 白色	密 ◎		21
302	皿	口径 (9.6) 底径 (7.1) 器高 1.7	1/5の残存。灯明皿。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石（1） 赤 ◎	煤付着	
303	甕	残高 4.7	胴部片。	ナデ	ナデ	黒褐色 にぶい黄橙色	石･長（1～2） ◎		
304	壺	口径 (14.8) 残高 4.8	広口壺。口縁端部は、ナデ凹む。	㊐ヨコナデ ㊓ナデ	ナデ	黄褐色 灰黄色	石･長（1～4） ◎		
305	壺	口径 (13.8) 残高 3.1	広口壺。口縁端部は、ナデ凹む。小片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石･長（1～2） 金 ◎		

地点不明出土遺物観察表（土製品）　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
306	壺	口径 (9.2) 底径 5.2 器高 12.7	小型壺。口縁部は短く外反し、底部は上げ底。口縁部を一部欠損。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～4） ◎		21
307	壺	底径 7.8 残高 3.1	厚みのある平底。3/4の残存。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 褐色	石・長（1～3） 金 ◎		
308	壺	底径 (9.8) 残高 5.7	厚みのある平底。1/4の残存。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰白色	石・長（1～3） ◎	黒斑	
309	浅鉢	残高 5.5	内外面に沈線、口縁端部に刻目あり。	マメツ	ナデ	褐色 にぶい褐色	石・長（1～2） 角閃石 ◎		21
310	深鉢	残高 2.8	平行沈線文3条と縄文あり。小片。	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 浅黄色	石・長（1） ◎		21
311	深鉢	残高 4.3	ヘラ状工具による山形文と直線文あり。小片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄色	石・長（1～2） 赤 ◎		21
312	深鉢	残高 3.4	突帯を貼り付け､突帯上に刻目あり。小片。	ミガキ	ナデ	明赤褐色 黒色	石・長（1～2） ◎		
313	深鉢	残高 1.6	粘土紐の貼り付け。刻目あり。小片。	ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長（1～2） ◎		
314	深鉢	残高 3.7	平行沈線文2条と縄文あり。小片。	ナデ	マメツ	にぶい褐色 褐灰色	石・長（1） ◎		21
315	深鉢	残高 2.2	胴部小片。	縄文	貝殻条痕	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長（1～2） ◎		
316	深鉢	底径 5.8 残高 2.1	凹み底。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄色	石・長（1～2） 金 ◎		

表30　地点不明出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
317	石庖丁	1/2	緑色片岩	(7.10)	5.15	0.67	39.26	未成品	22
318	石庖丁	1/2	結晶片岩	(4.60)	5.40	0.90	22.92		
319	石斧	ほぼ完形	緑色片岩	12.00	6.00	1.49	160.89	未成品	22
320	敲石	完形	砂岩	11.00	9.50	4.60	639.60		22
321	スクレイパー	完形	サヌカイト	7.00	8.90	1.50	118.80		22
322	剥片	完形	サヌカイト	3.25	5.75	0.90	12.51		22
323	剥片	完形	サヌカイト	2.56	2.35	0.51	3.27		22
324	砕片		サヌカイト	2.45	1.30	0.42	1.19		22
325	砕片	一部欠損	サヌカイト	(1.70)	1.50	0.36	1.05		22

写真図版

写真図版データ

1．遺構は、デジタルカメラで撮影している。一部の撮影には高所作業車を使用した。
　使用機材：

　　カ　メ　ラ　　Nikon D90　AF-S　DX18 ～ 55㎜

2．遺物は、デジタルカメラで撮影した。
　使用機材：
　　カ　メ　ラ　　Nikon D610　マイクロニッコール 105㎜
　　ス ト ロ ボ　　コメット /CA32・CB2400
　　スタンド等　　トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101

3．製　　版：写真図版 175 線
　印　　刷：オフセット印刷
　用　　紙：マットコート 110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ～ 20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1 ～ 6

図版1

1. 重機による掘削状況
（南より）

2. ガードフェンス
設置状況
（南西より）

3. 調査区南壁土層状況
（北西より）

図版２

1. Ⅳ層上面の検出状況
（東より）

2. Ⅳ層精査時の区割り
（東より）

3. Ⅳ層（遺物包含層）
検出状況
（東より）

図版３

1. 基準点設置状況
（南東より）

2. 調査地から北を望む
（南より）

3. 土砂置き場と大ベルト
（北東より）

図版 4

1. SX3 検出状況
（北西より）

2. 大ベルト精査の様子
（東より）

3. SK28 据え置かれていた土器出土状況
（北より）

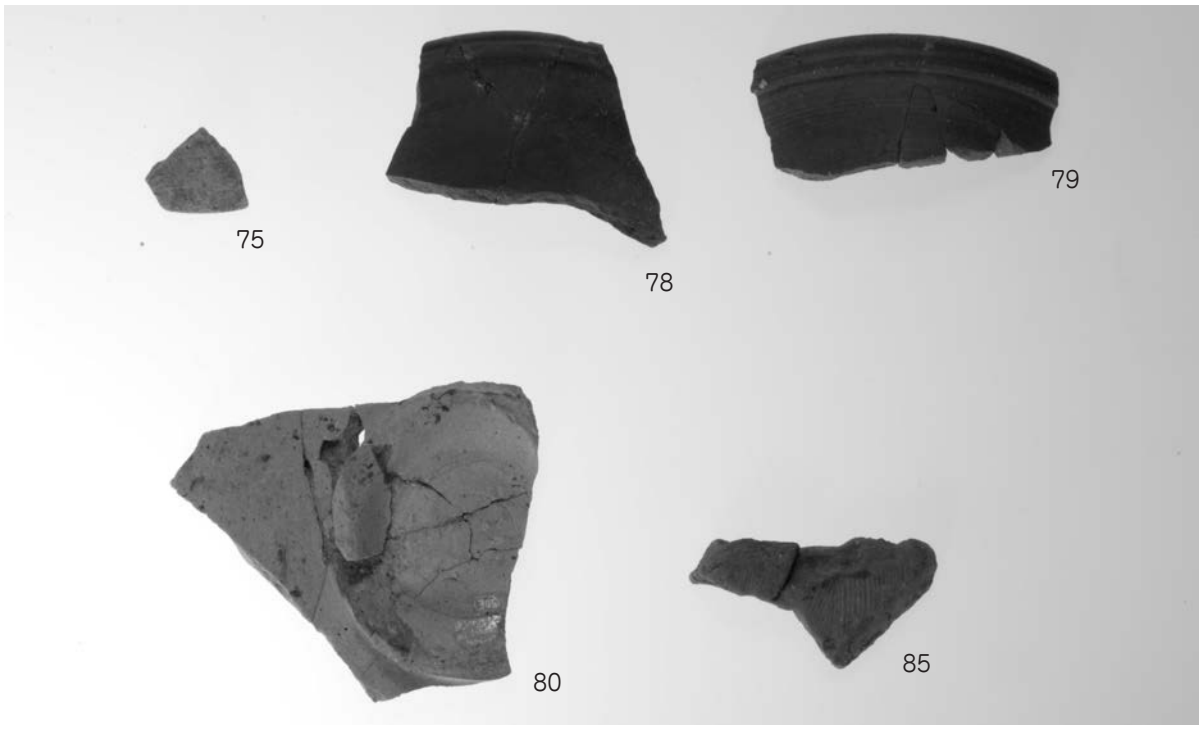
1. SX3 埋土の水洗選別作業風景（南東より）

2. 愛媛大学によるフィールド講義（南東より）

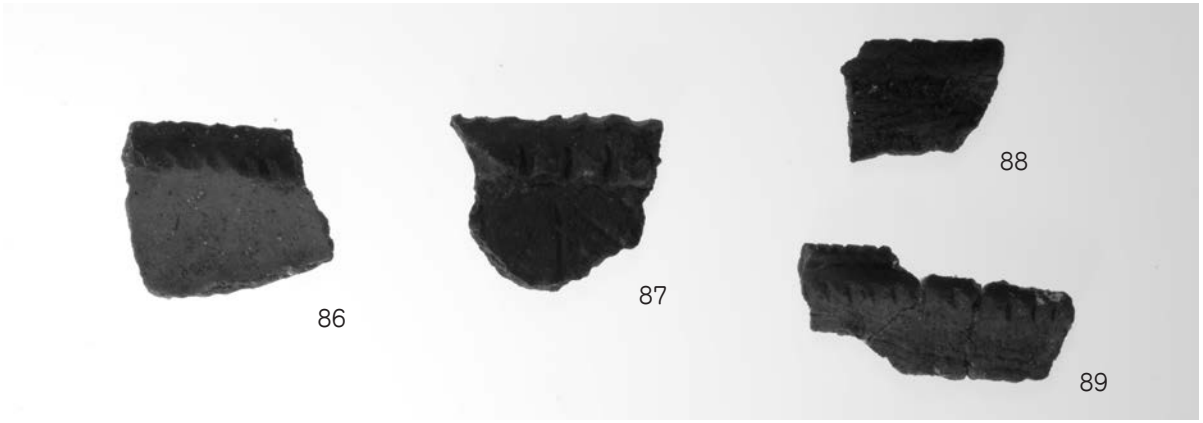
3. 現地説明会の様子（西より）

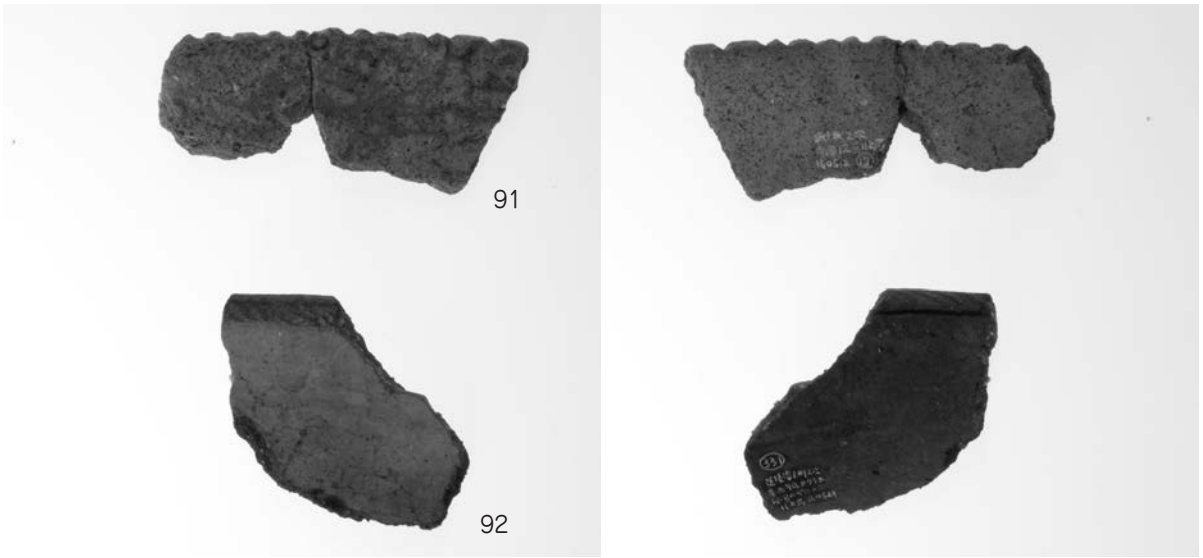
図版 6

1．出土遺物（SK20：44、SK27：51、SK28：55）



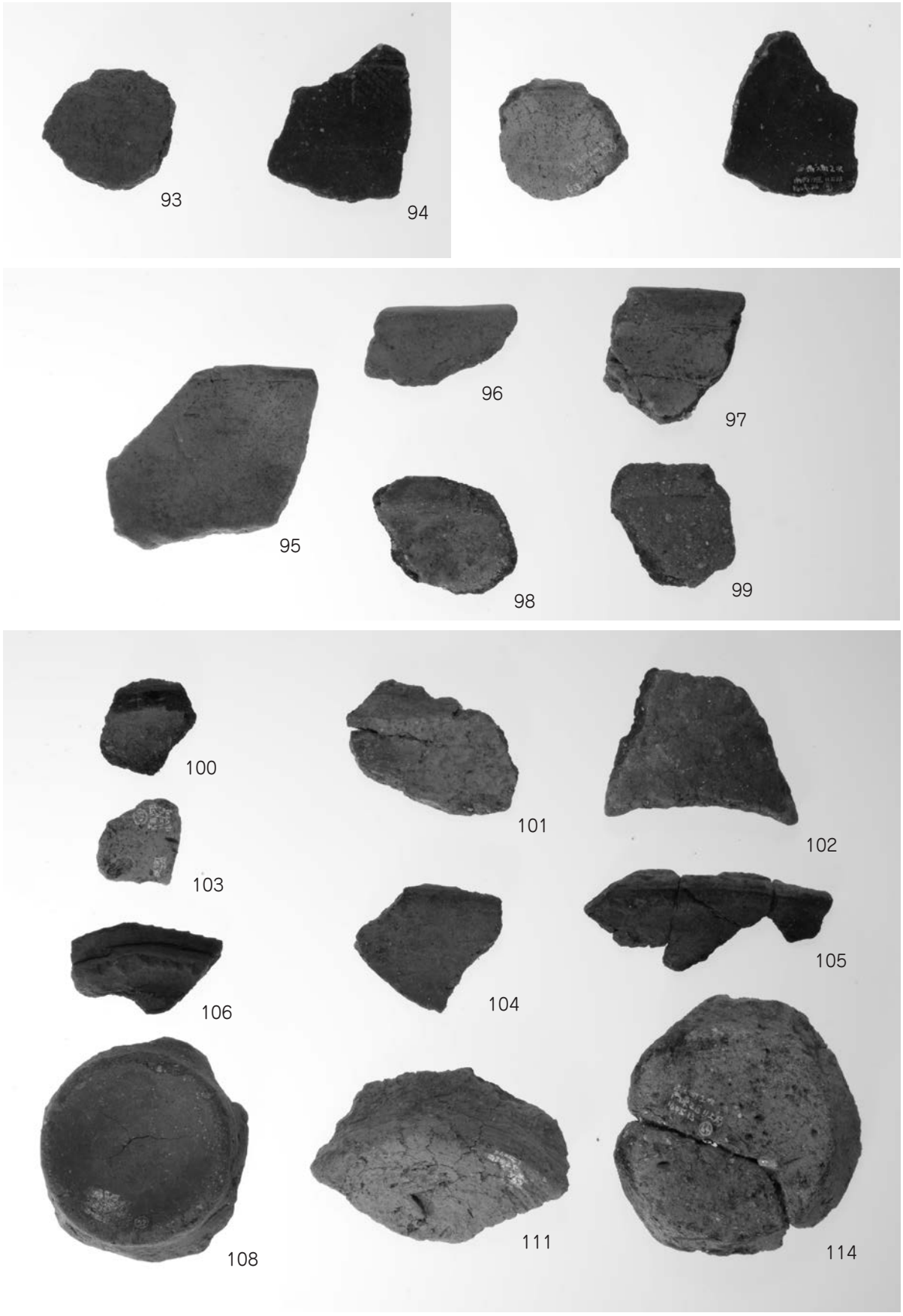
１．第Ⅶ層出土遺物



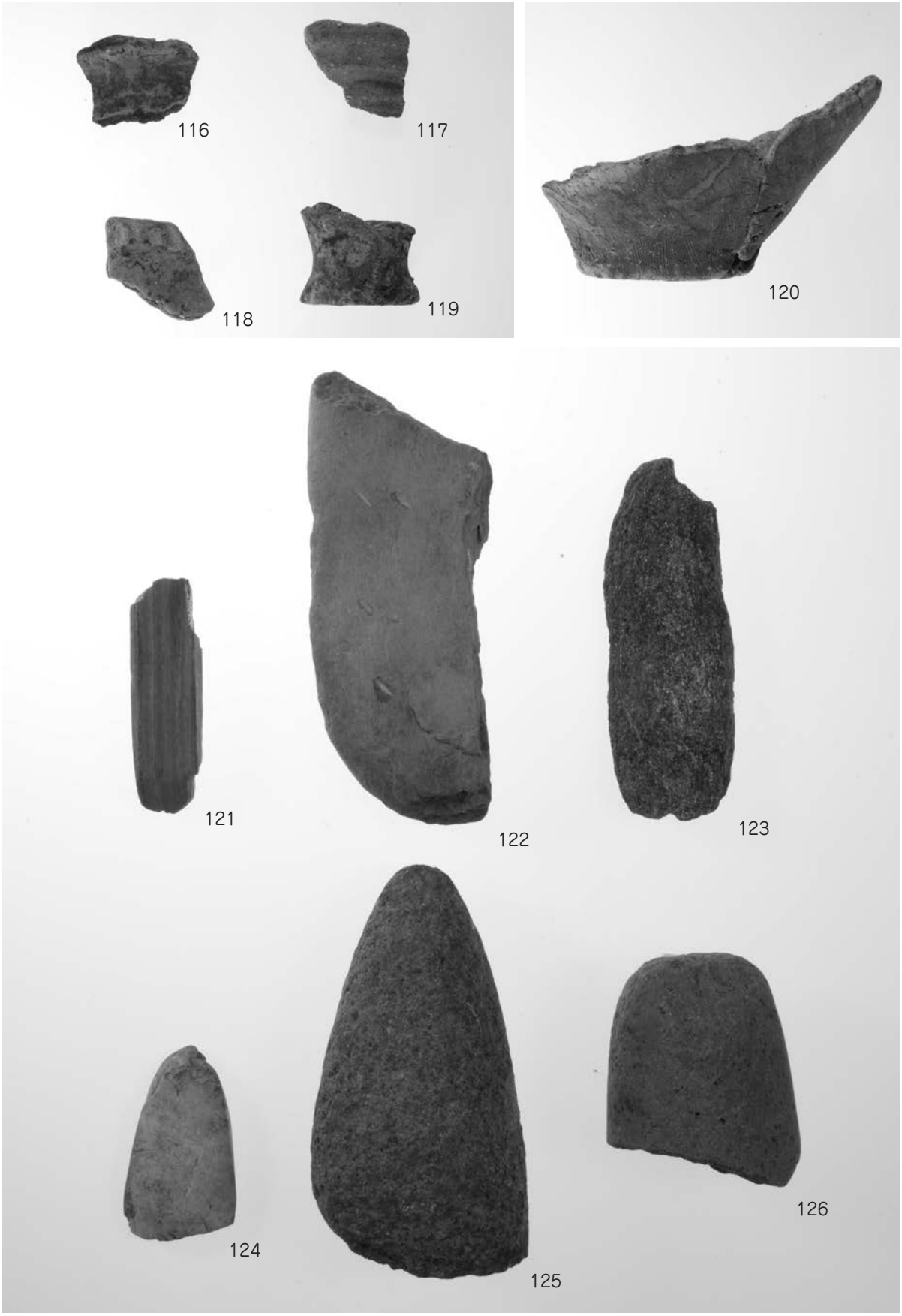


２．第Ⅷ層（上層）出土遺物①

図版8

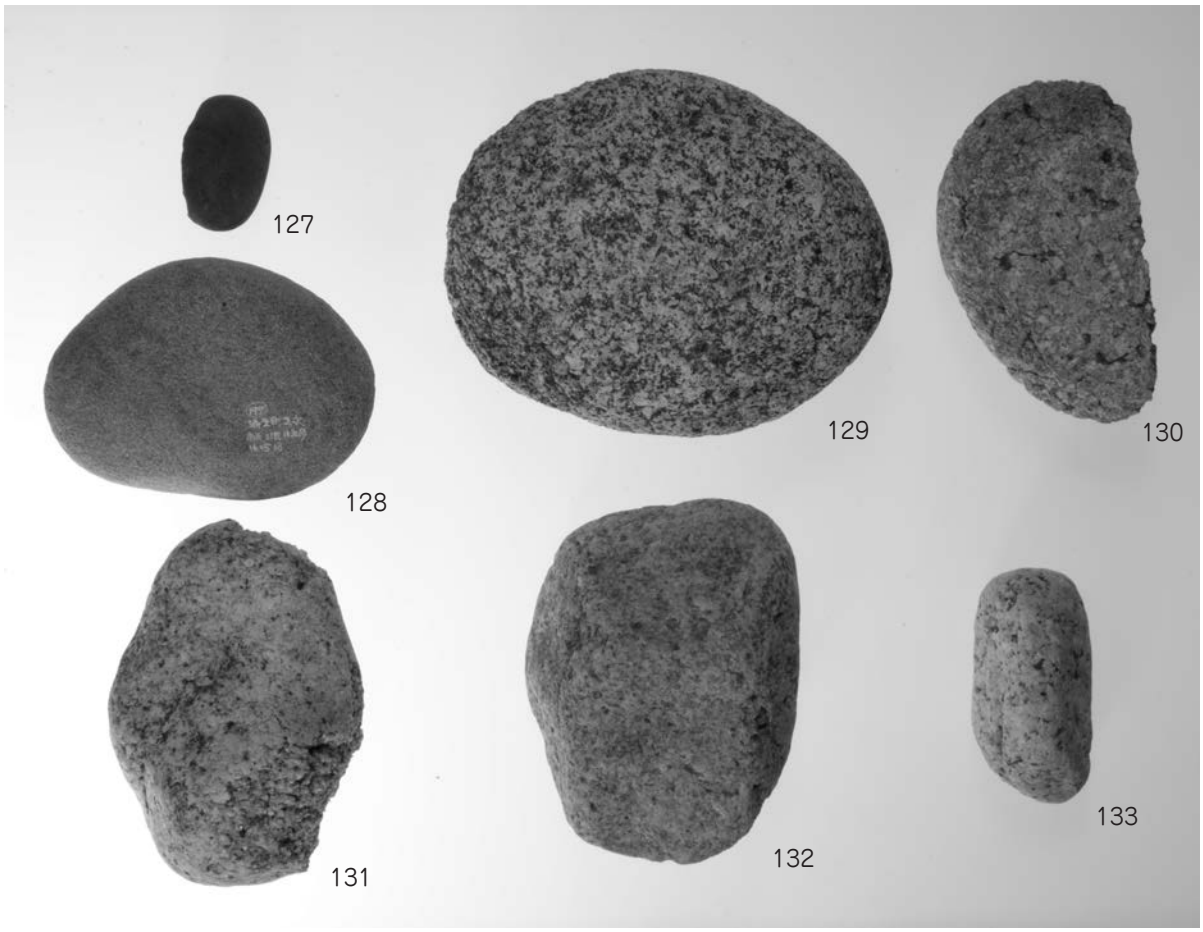


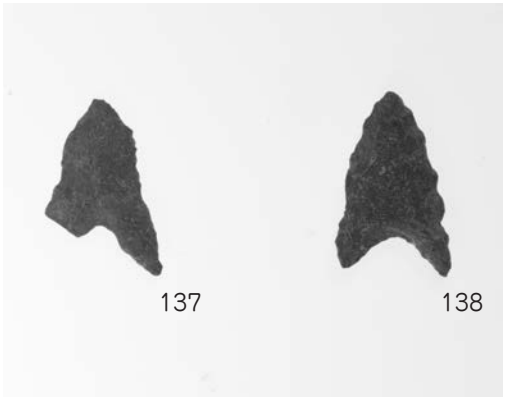
1．第Ⅷ層（上層）出土遺物②



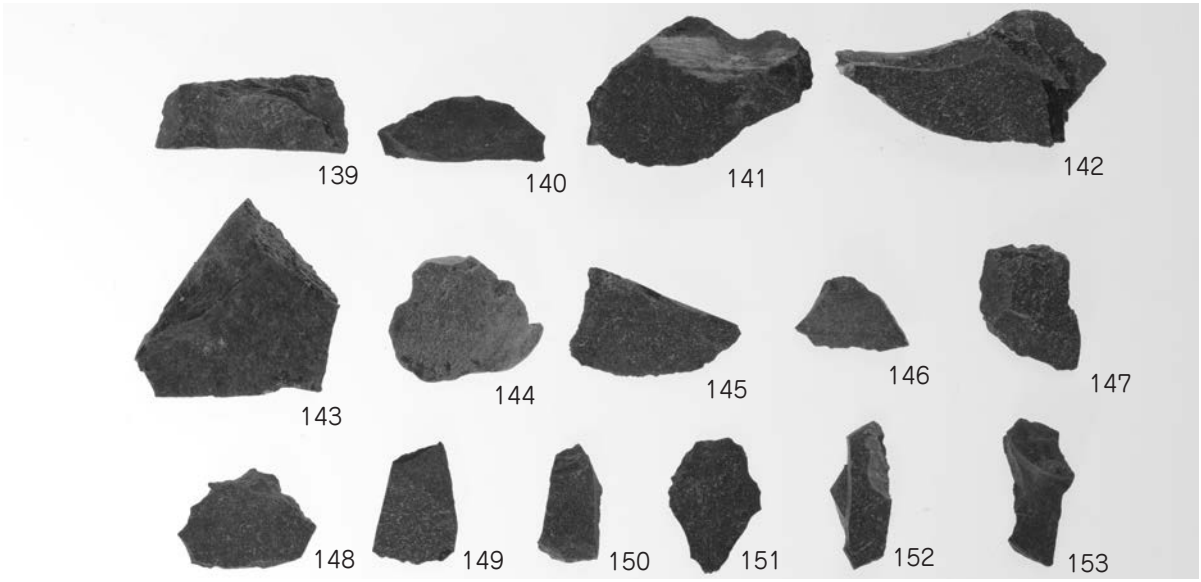
１．第Ⅷ層（上層）出土遺物③

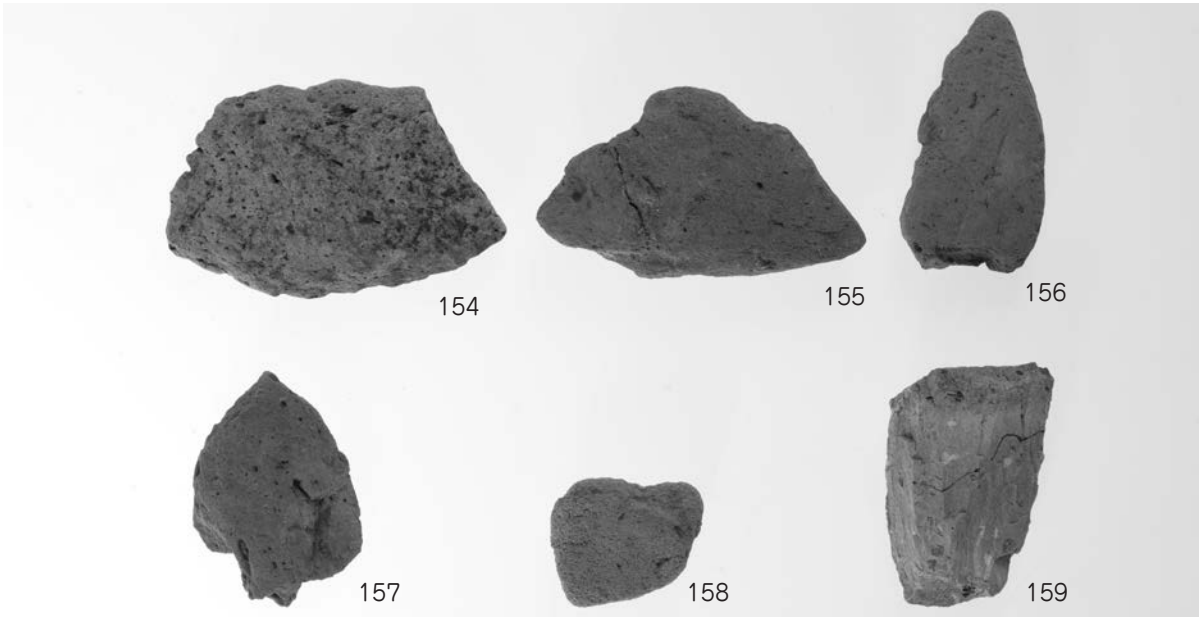
図版10

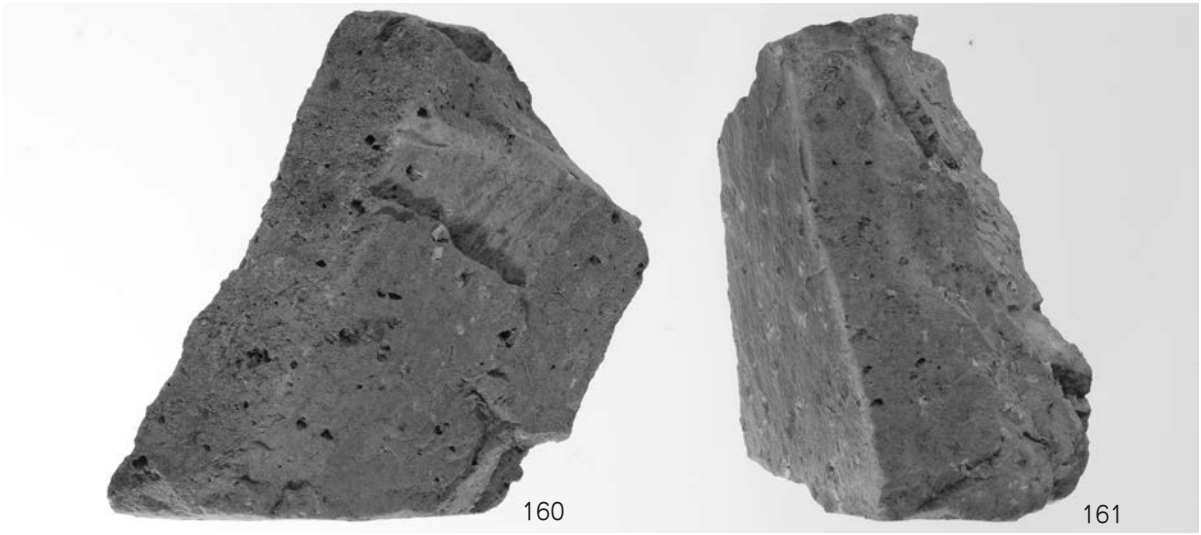




１．第Ⅷ層（上層）出土遺物④

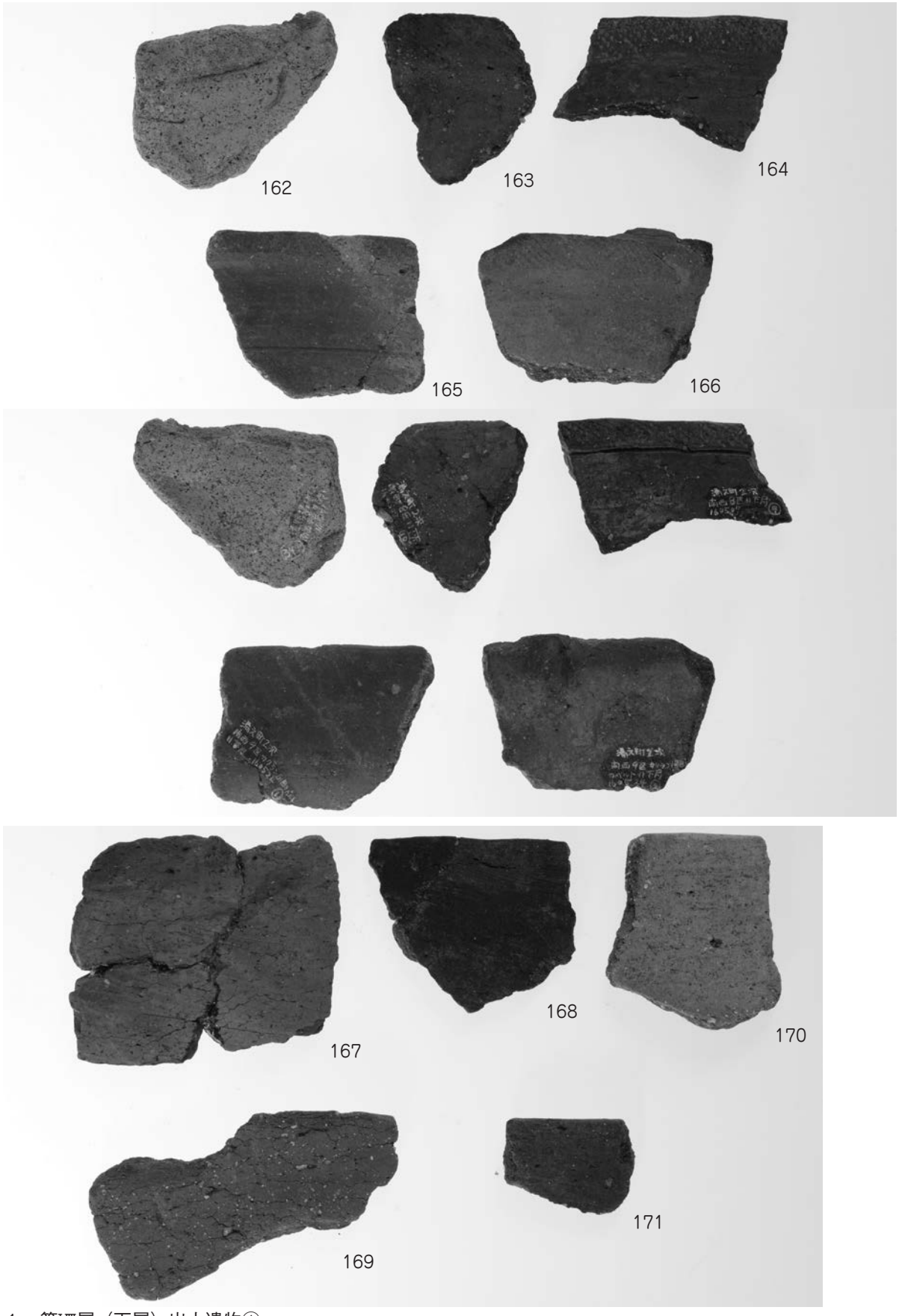




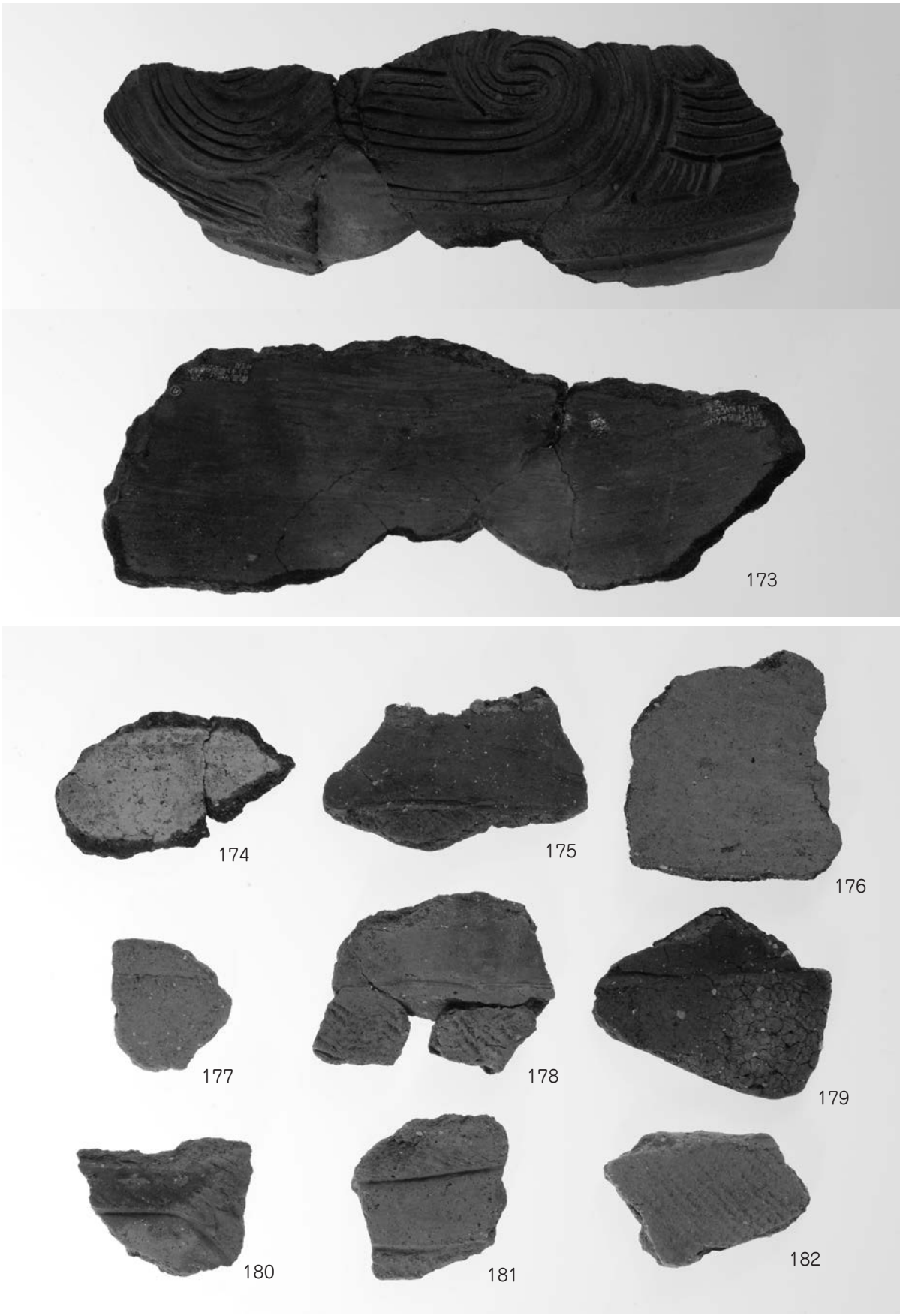


１．第Ⅷ層（上層）出土遺物⑤

図版12

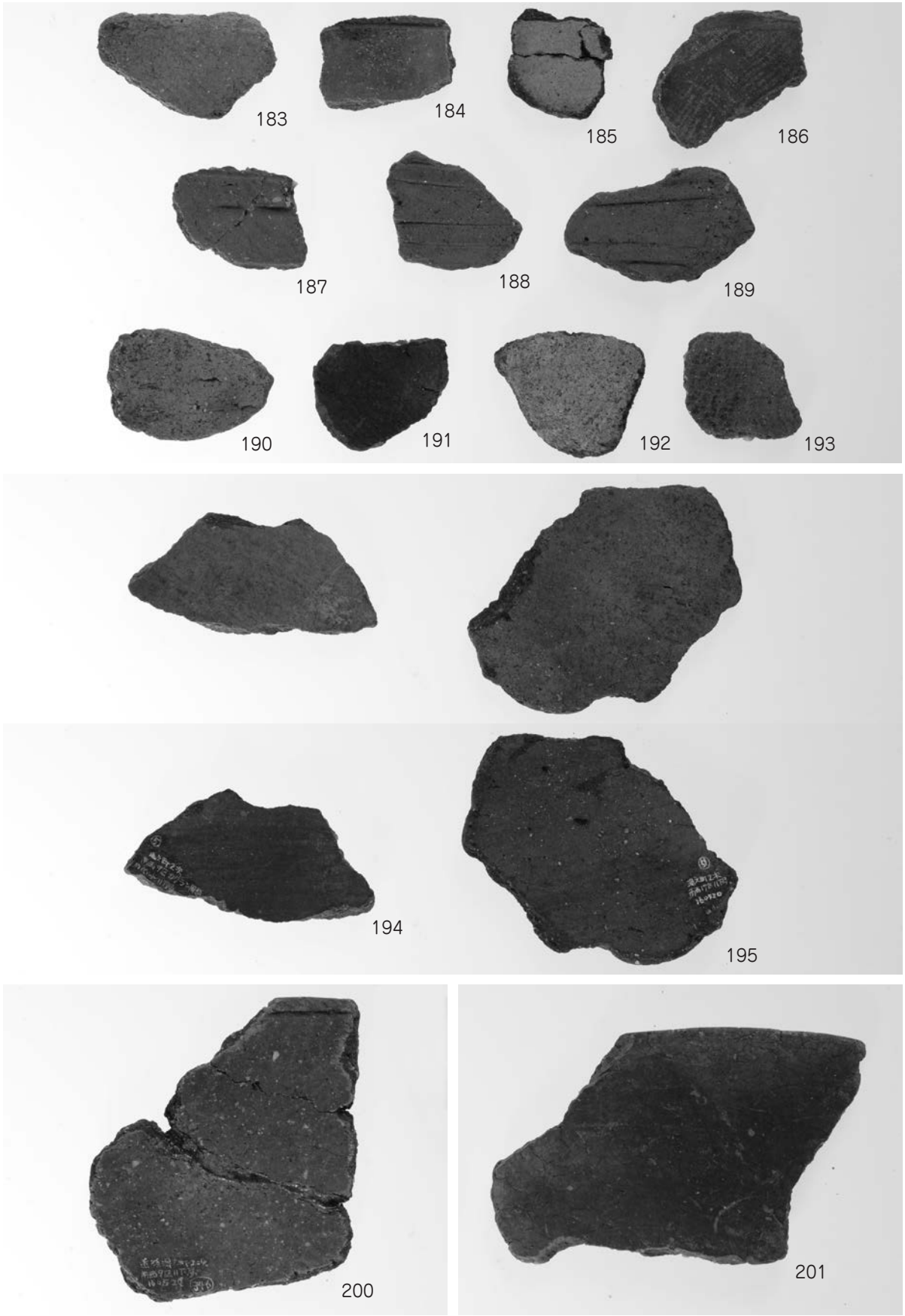


１．第Ⅷ層（下層）出土遺物①

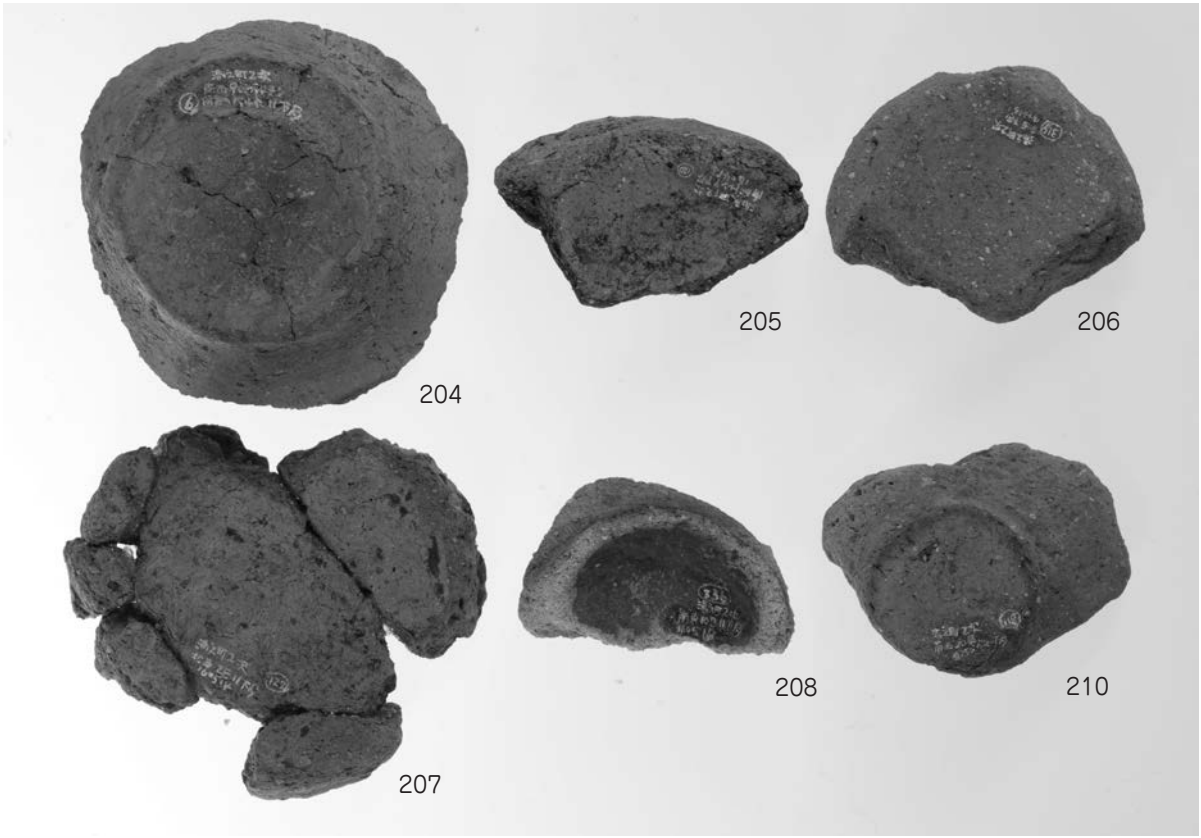


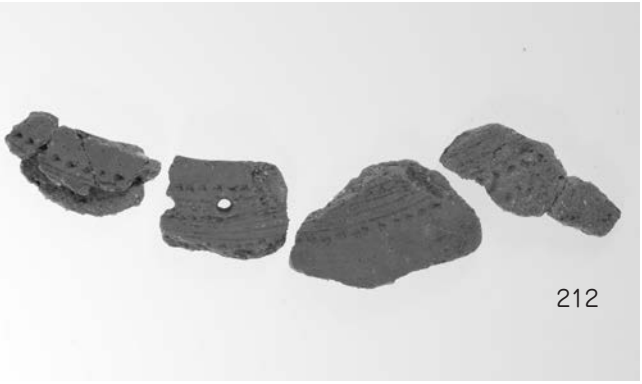
１．第Ⅷ層（下層）出土遺物②

図版14



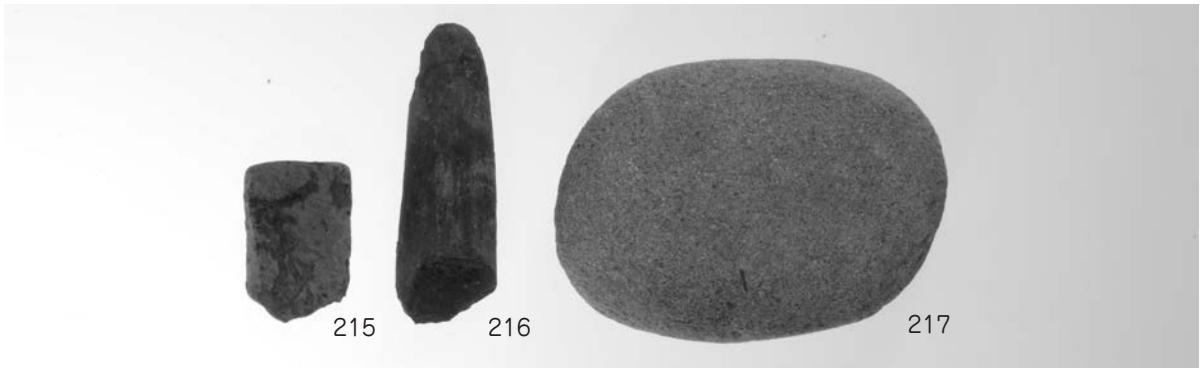
１．第Ⅷ層（下層）出土遺物③

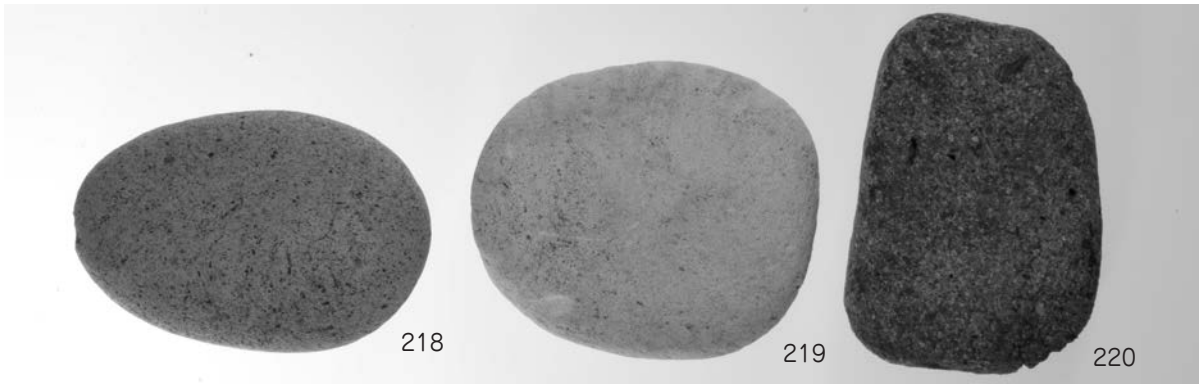


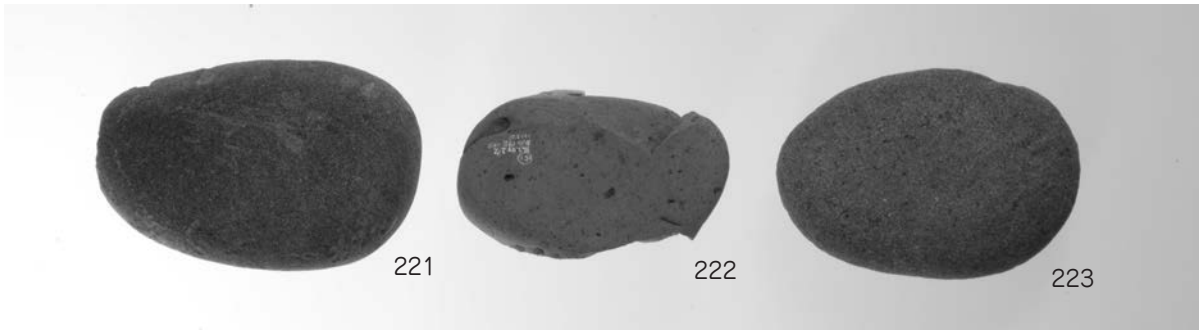


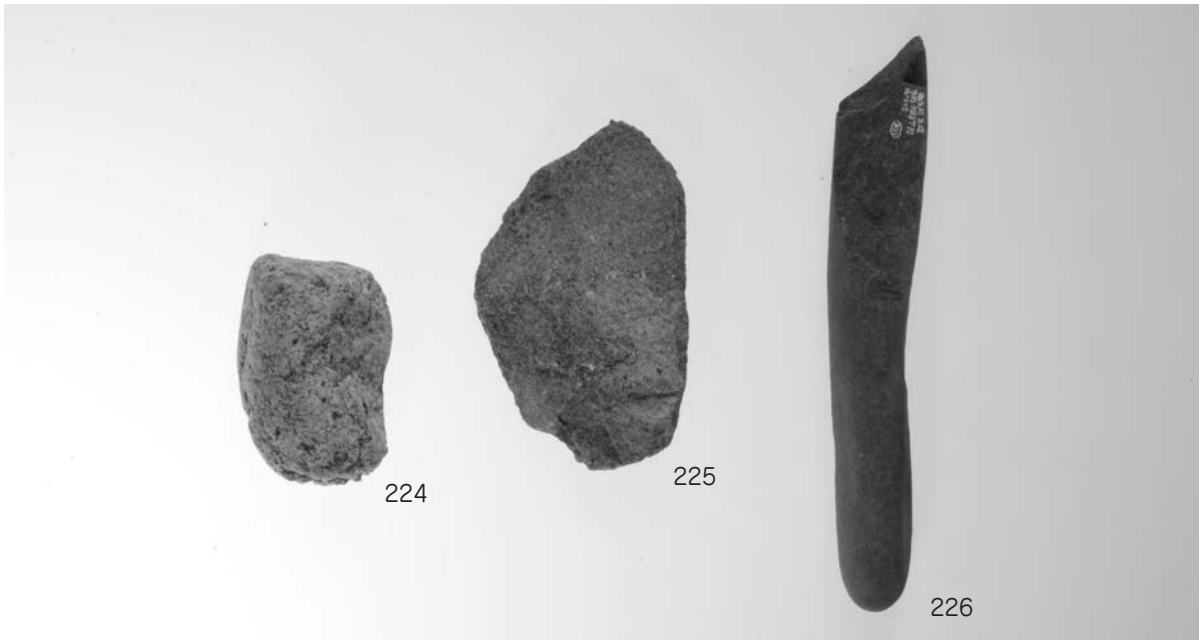
1．第Ⅷ層（下層）出土遺物④

図版16

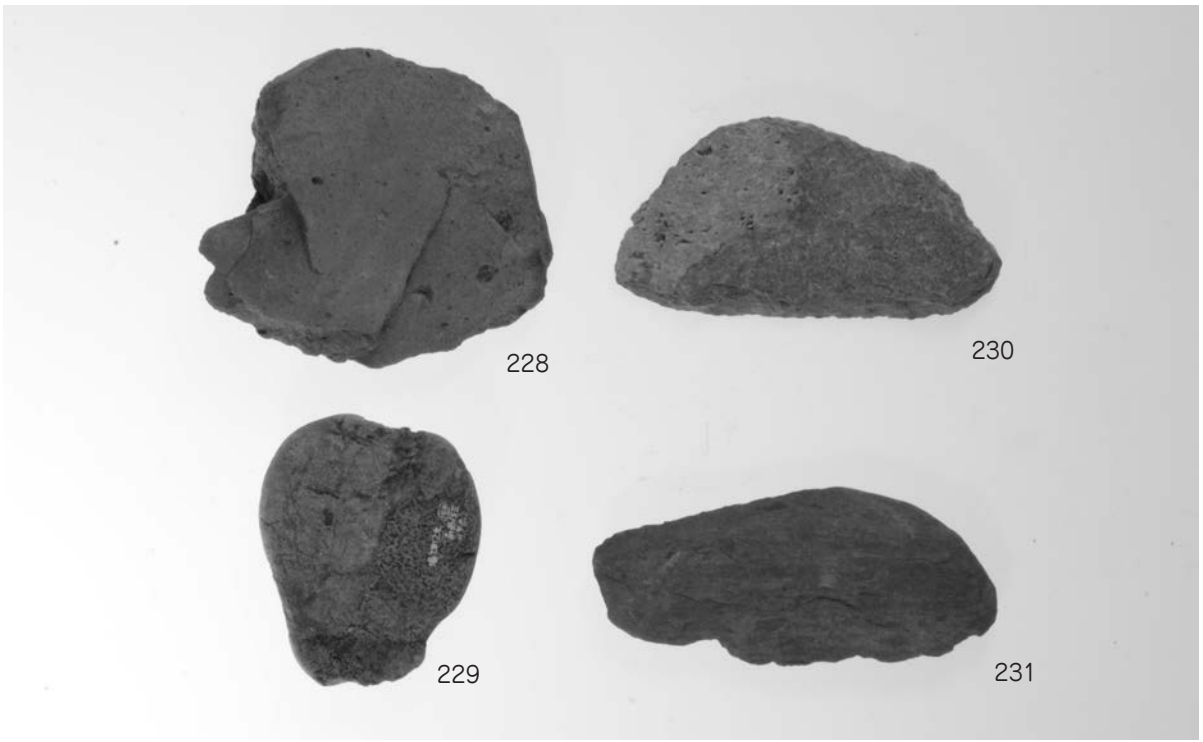


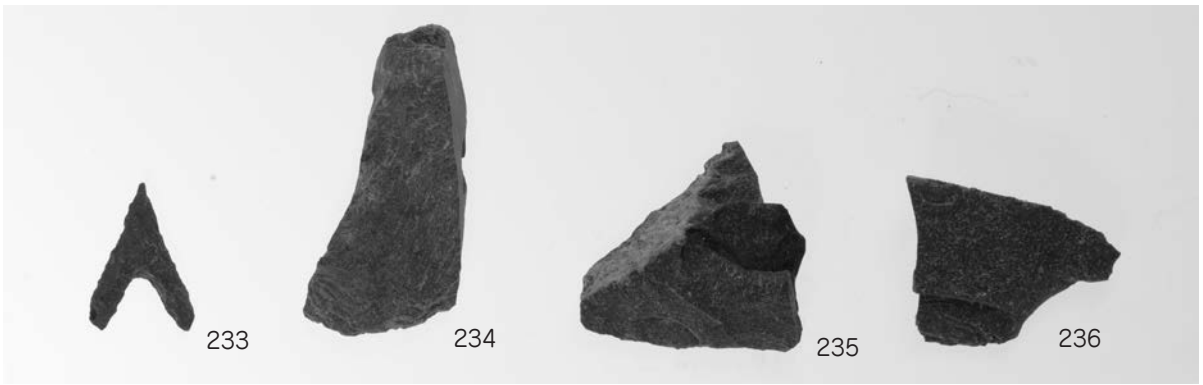






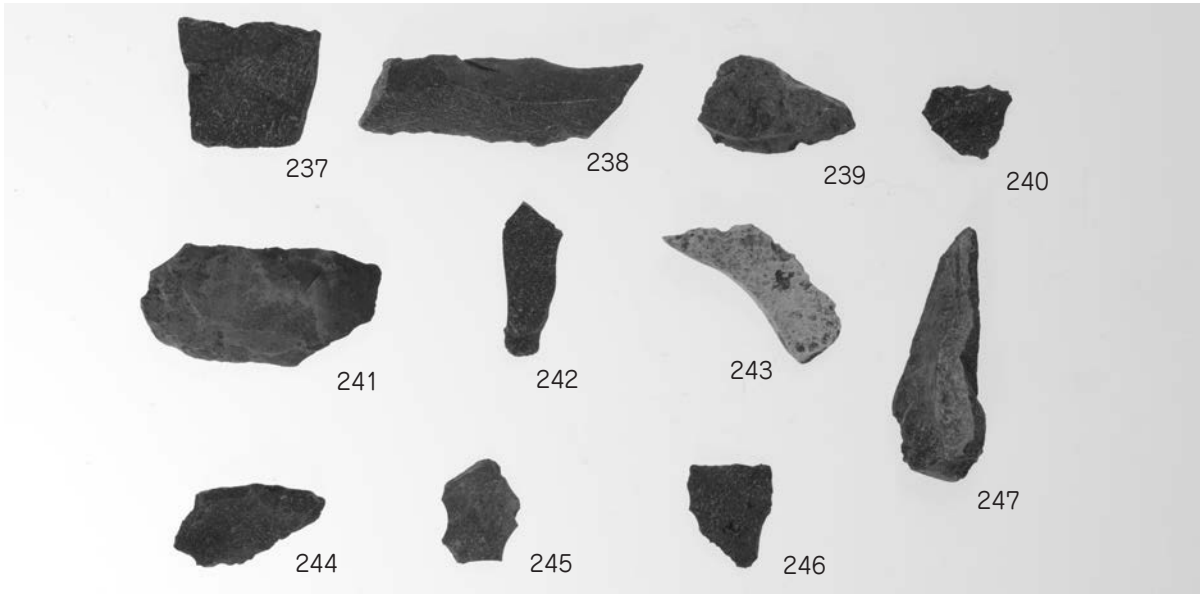
1．第Ⅷ層（下層）出土遺物⑤



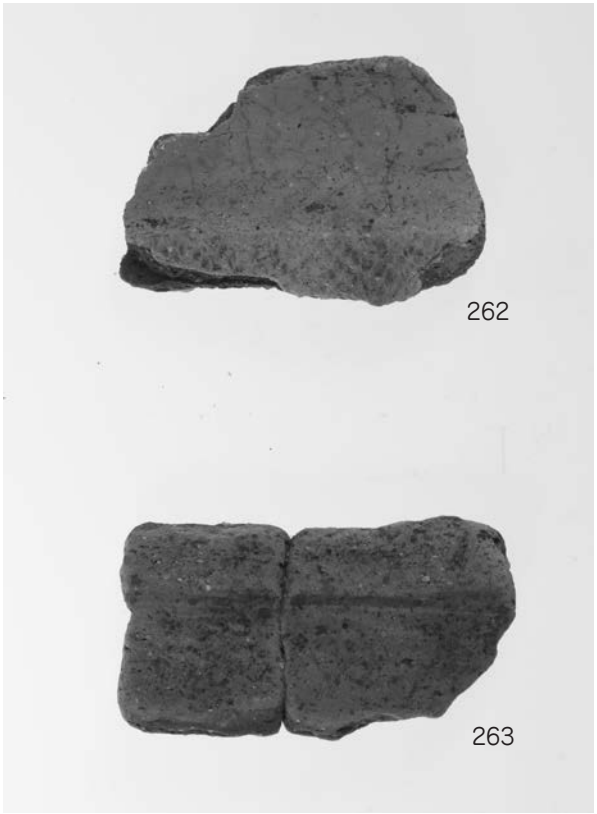


１．第Ⅷ層（下層）出土遺物⑥

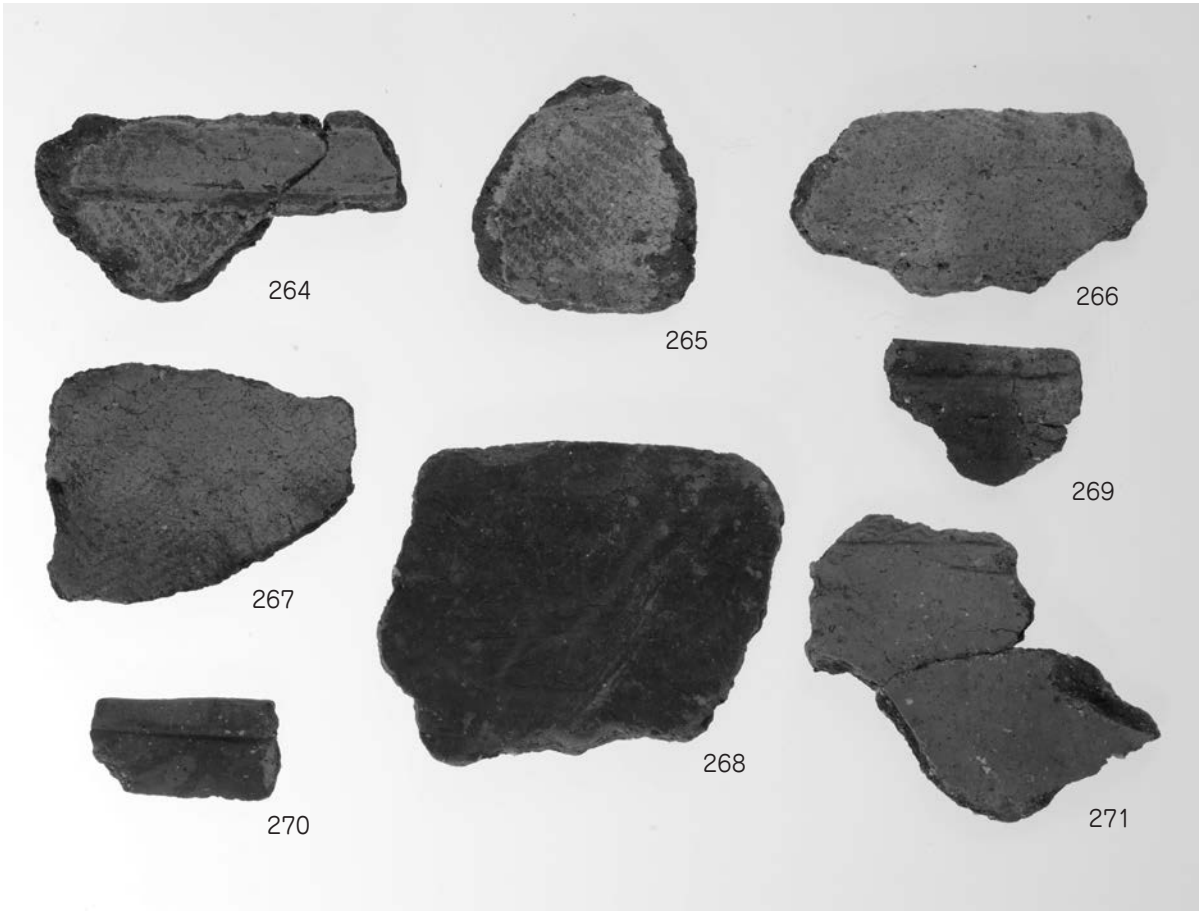
図版18

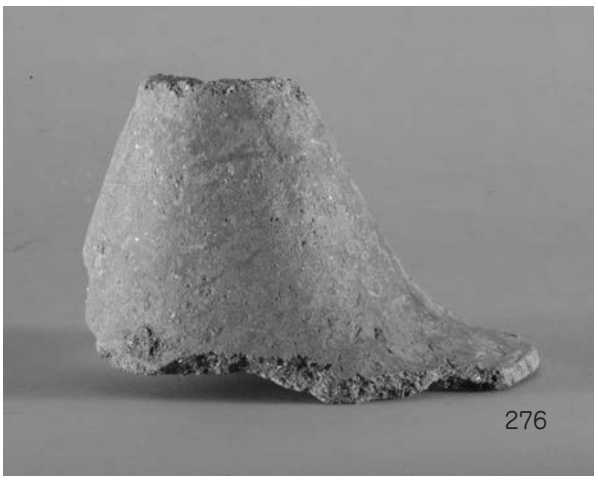


１．第Ⅷ層（下層）出土遺物⑦



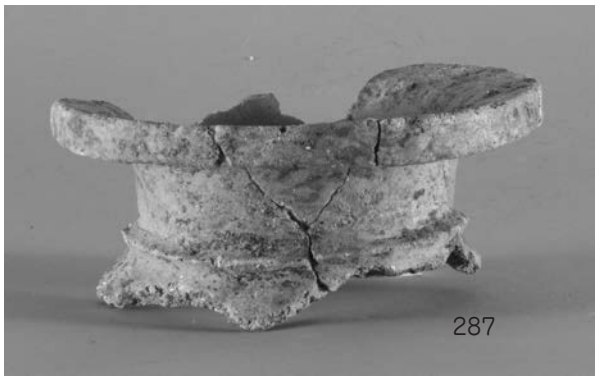
２．ベルト・トレンチ出土遺物①



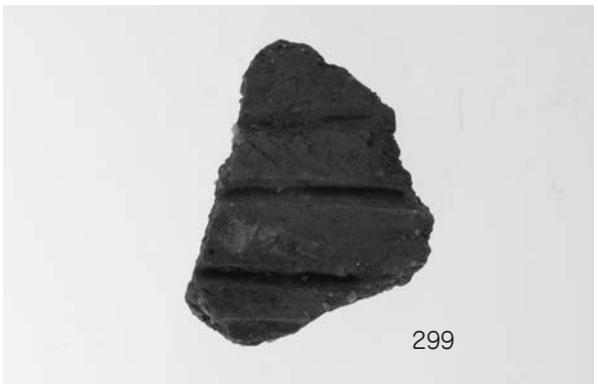


１．ベルト・トレンチ出土遺物②

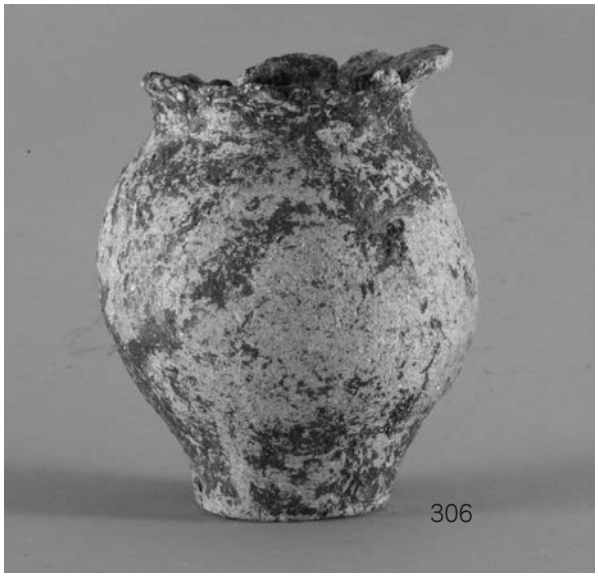
図版20

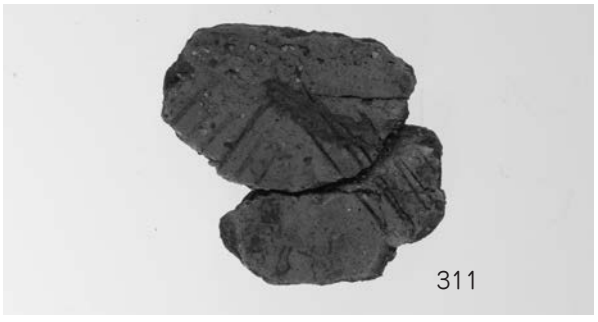


1．グリッド出土遺物①



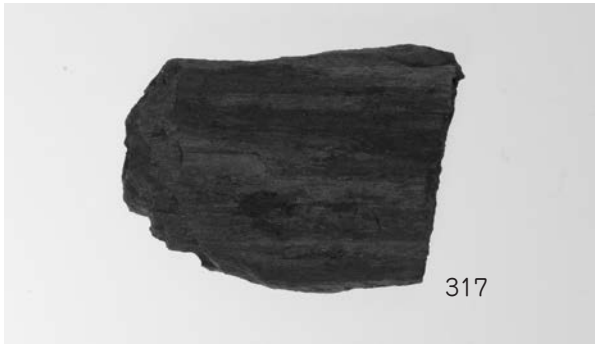
1．グリッド出土遺物②

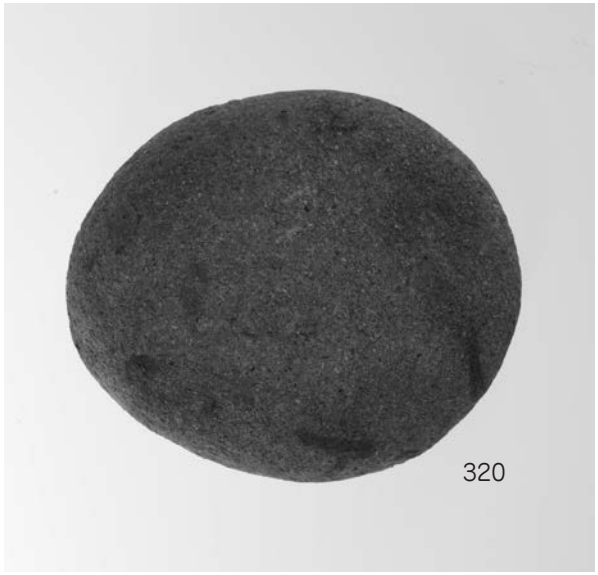


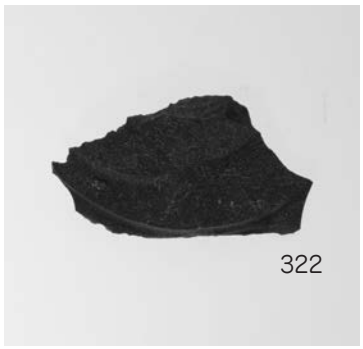


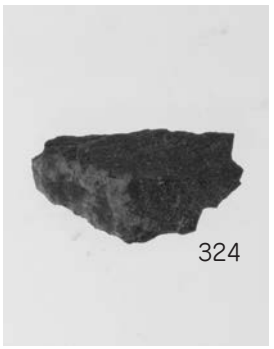
2．地点不明出土遺物①

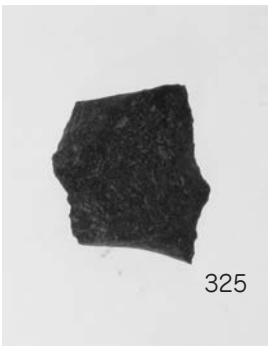
図版22











1．地点不明出土遺物②

報 告 書 抄 録

ふ り が な	どうごゆのまちいせき
書　　名	道後湯之町遺跡２次調査
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 191 集
編 著 者 名	宮内慎一・髙尾和長
編 集 機 関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 791 － 8032　愛媛県松山市南斎院町乙 67 番地 6　TEL 089 － 923 － 6363
発 行 年 月 日	西暦 2018（平成 30）年 1 月 5 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
どうごゆのまちいせき 道後湯之町遺跡 ２次調査	まつやまし 松山市 道後湯之町	38201	613	33° 51′ 08″ 179	132° 47′ 04″ 766	20160401 ～ 20160630	410.92	道後温泉 別館 飛鳥乃湯泉 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道後湯之町遺跡 ２次調査	集落	縄文 弥生	土坑 土坑	縄文土器、石製品 弥生土器、石製品	廃棄土坑 祭祀土坑

要　約

道後湯之町遺跡２次調査からは、縄文時代から近世までの遺構や遺物を確認した。縄文時代は後期から晩期の土坑を複数検出したほか、これらの遺構や包含層などからは主に後期中葉から後葉と晩期後半期の遺物が数多く出土している。弥生時代では、前期末から中期中葉の土坑を複数検出した。この中には、完形品が出土した土坑も存在する。調査地西方に広がる丘陵上には該期の土坑が 300 基以上確認されており、調査地近隣地域まで構築エリアの広がっている可能性が考えられる。なお、土坑や包含層からは土器のほかに比較的多くの石器が出土した。この中には未成品や剝片、砕片なども数多く含まれており、近隣地域には石器製作に携わる集団の存在が伺われる。古墳時代以降では明確な遺構は検出されなかったが、包含層などからは古墳時代から古代に時期比定される土師器や須恵器の破片が出土している。

今回の調査では古代の道後温泉に直接関連する資料は得られなかったものの、縄文時代や弥生時代の集落遺構や遺物を確認した。このことは、道後地区における集落構造や変遷を解明するうえで貴重な成果といえよう。今後は調査・研究を重ね、道後地区一帯の集落様相や動態を解明することが急務となろう。

松山市文化財調査報告書　第191集

道後湯之町遺跡２次調査

平成30年1月5日　発行

編　集　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発　行　埋蔵文化財センター
〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923－6363

印　刷　明　星　印　刷　工　業　株　式　会　社
〒790－0056　松山市土居田町500番地
TEL（089）971－7111